
我が故郷は星の彼方

paiちゃん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

我が故郷は星の彼方

【Nコード】

N9861V

【作者名】

paiちゃん

【あらすじ】

異星人との戦闘で負傷し、機械化した主人公はある戦いの中で故障した星船で宇宙の彼方に飛んでいきます。運良く不時着した惑星は科学ではなく魔法が発展した世界。その世界の戦争に巻き込まれてしまいます。SFっぽいけど、ファンタジーです。

星戦

どうやら、あの恒星に捕らわれたようだ。

幾多の恒星を通り過ぎたはずだ。睡眠状態の体が、船のエマージェンシー機能により活性化したのが数時間前。

破損したこの船では、コース変更等出来そうも無い。

死の覚悟は、当に出来ている。たとえ恒星に飛び込むことになっても、笑いながらフレアの中で焼かれる自分を冷静に見ることが出来るだろう。

2000人の仲間は、黄泉路に先立っている。さぞかし、待ちくたびれていることだろう。

私は、連邦軍第一重降下猟兵師団所属、特殊戦術中隊隊長・・・RDY-1732・・・大尉だ。

あの大戦は、人類の生存を賭けた戦いだった。

人類は、火を使い。鉄を精製し・・・ついには宇宙への進出に成功した。

太陽系を植民地化し他の恒星系への進出も、対消滅エンジンの実用化と高エネルギー操作技術により可能となった。相対性理論を無視した瞬時移動が可能となったのだ。

少しずつ共栄圏をペルセウスの腕の中に伸ばし、人類の総数が5000億を越えた頃それは起こった。

他の生命体との接触・・・それは、だれが予想したろう。いや、何れ、当然に起こる事象であつたかも知れない。

そして、それは最悪の出会いとなった。

人類共栄圏最外周部に位置するある惑星の入植基地からの連絡が

突然途絶えた。

調査隊が編成され、入植基地で彼らが見つけたものは・・・戦闘の痕跡と幾多の惨殺体であった。

生存者は皆無であった。惨殺体の数と入植者数は合致していた。

この虐殺者は戦闘に参加してない妊婦、幼い子供までも殺したのだ。そして、調査隊はその犯人を特定した。損壊したサブ制御室の記憶装置を解析すると、そこには人類と異なる姿態をした異生物が映し出されていた。

それはトカゲだった。

5000億の人類に衝撃が波のように走った。

すぐに襲撃者の侵入方向を特定し、幾多の監視衛星を設置して次の来襲に備えた。

この事件を不幸な偶発的な出来事と主張するものもいた。

その中の代表者達が政府の制止命令を無視して異性人との交渉に臨んだ。これは彼らの教義からして必然なのかも知れない。

しかし、結果は・・・監視衛星で捕らえた彼らの星船の爆発する映像であった。

ここで、政府は決断した。

異生物・・・エイリアンとの全面戦争！

互いの共栄圏が接触した場合には、互いが理解できない場合はこの方法でのみ人類の存続が可能となる。

その戦いは数百年も続いている。

・

私が入隊した時は10代だった。重降下猟兵師団に配属され、幾多の惑星にパワードスーツで奇襲降下し、トカゲを惨殺した。

1年目で、右腕を失った。

3年目で、下半身を失った。

そして、5年目に・・・上半身を負傷した。

ほぼ即死の状態ではあったが、その場で脳を分離し半冷凍状態で

後方移送がなされた。

負傷する都度、損壊した部位を機械に置き換えて最後に脳だけの存在となったら、それは人間と呼べるのだろうか？

体の殆どを機械に置き換えた人間・・・サイボーグは原隊復帰が出来ず、より過酷な任務をこなす特殊戦術部隊に配属される。

10年以上そこで戦う内に、何時しか同僚は黄泉に先立ち・・・私は中隊長になった。

さらに戦いが続き、私の最後の生体部分、脳に損傷を受けた。これで仲間に合えると眠りについたが・・・軍病院のベッドで意識を回復した。

長きに亘る戦いの中での驚異的な科学の発展、それは、医学にも応用される。

脳の活動・・・シナプス細胞の電気的ネットワークを少しずつ積層型量子演算機に転写することにより、意識を移植することが可能となったのだ。

考える、故に我あり・・・全てが機械となった私だが、人間である自覚はある。

その状態での戦いは、生体を持つ人類と全く異なる次元で行うことが可能であった。

空気、水、食料を必要としない体は、宇宙空間でも、深海でも直接活動が可能であり、待ち伏せを何日間も継続することが可能である。

ある宙域の、広範囲にわたる強行偵察任務でそれは起こった。

目的宙域に達する寸前で、クルーザー級星船が襲撃を受けたのだ。それは、強襲用単座星船で発信指令を待つ私に衝撃と割れたキャノピーから見える連続爆発続くクルーザー、クルーザー周辺に舞い飛ぶトカゲの強襲艇で判断することが出来た。

幸いにも、私の星船は破損体と認識されているのか襲ってくるト

カゲは皆無であつた。

クルーザーの光も見えなくなった頃、星船の制御を試みたが無駄であつた。せめて、自分の最後は自覚したいと、体の機能を休眠状態に変更した。異常があれば接続した星船の監視機能で覚醒出来るはずである。

・

恒星に直撃すると思つていたが、どうやら予定がかわつたらしい。
・先ほど木星ほどの惑星の近傍を通過した際、惑星の引力で星船の減速と方向修正が行われた。

再計算した結果では、後数時間後に地球と良く似た惑星に突入する。

突入時に星船の緊急脱出装置を使用してみようと思う。

うまく運べば、生存期間が少し延びる。悪ければ、流星が2個出現する。

私は、連邦軍第一重降下猟兵師団所属、特殊戦術中隊隊長・・・
RDY-1732・・・大尉だ。死を望むことは無い！

神託

城が燃えている。

たった8騎で夜の街道をひたすら走り、黒い森の手前で後ろを見た。

私が生まれ、そして育った城が・・・アトランテ帝国の王宮が赤く燃えている。

「姫、急ぎましょう！」

ナナイが急かす。私は頷くと、黒い森の1本の道を見据え馬に鞭を入れる。

馬は前足を上げて嘶くと、暗い道を走り始める。

ヒズメの足音が減っている。また、誰かが時間稼ぎのために・・・私を逃がすために伏兵となって残ったに違いない。

涙は流すまい。私を逃がすためにどれだけの者が犠牲になったのか？

乳母も、メイド達も通路で私を逃すための壁になった。父と母は抜け道を自らの体で閉じた。

父が託した近衛の騎士達も、おとりの娘とともに四方に散っている。

私に付き従う騎士は隊長であるナナイ以下10名・・・それも今は2騎となった。

本来は、再起を図るためにナナイの所領に行くはずであった。

父の最後の言葉もそうであったし、ナナイの所領シャープネスには帝国代々の墓所がある。墓所には非常時のために、帝国皇帝の印で開く秘密の部屋がある。その部屋はどのような魔法も無効化する結界に守られており、皇帝の印は皇帝のみが知っている。

その印を私は持っている。それは・・・皇帝が持つ宝飾された短剣であった。

皆が知りたいと願った皇帝の印は、皆が常に目にしている物だっ

ただ。

私が黒い森の中を急ぐ理由はただ一つ。今朝方の礼拝で受けた神託による。

（・・・夜、黒い森の先に運命が待つ・・・）

何故、夜なのか？・・・おかしな神託だ・・・と思っていたが、夜半から始まった宮廷内の反乱に始まったこの逃走までも神は知っていたのかも知れない。

ならばこそ！黒い森の先にある運命を知らなければならない。たとえ私の死がそこで待っていたとしても、それも運命なのだから。突然、視界が開けた。黒い森の先は草原である。私達を隠すものは何も無い。

見上げれば、満天の星。王宮の明るい空ではこのような星空は望むべきもない。

しばし、我を忘れて星空を見てみると流れ星に気付いた。一瞬で消えるものが流れ星と思っていたが、ずいぶん遅くしかも近づいている。

やがて、ゴオーと言う大きな音を立て周囲を照らし出すと私達の遥か頭上で爆散した。一瞬の大きな輝きに思わず目を閉じ、再び目を開けると大空に白い花のような物を開きながらゆっくりと何かが降りてくるのが見えた。

「行きましょう！」

「姫、いささか危険ではないですか？」

ナナイの忠告を無視して馬を走らせる。

・
・
・

どうやら、まだ仲間には合えないようだ。

ぎりぎりまで惑星の大気で減速し脱出装置を作動させたが、ほんの1秒でも遅れていたら星船の燃料加熱による爆発に巻き込まれていただろう。

もうすぐ地上に着く。パラシュートが珍しいのか、この惑星の間が2騎ほど駆けてくる。

まずは友好的に対処しよう。すべての異星人が敵ではない。ましてや、ここでのエイリアンは私である。

ドシンという音とともに地上に降りた。降下で物音を立てるとは・
・仕官候補生時代の軍曹がこれを見ていたらなんと言うか・
グランド10周だけでは済ませないだろう。

そんなことを考えながら、パラシュートの索を体から切り離して身軽になる。パラシュートの生地は良質の合成繊維だが、取引の材料に使用すべく大急ぎで畳むことにした。

どうやら小さく折りたたんで索をぐるぐる巻きにできた時に、彼らはやってきた。

数mの距離をとり2騎は停止する。少女と青年のようだ。驚くほど人類に似ている。いや、同じ人類だと信じてしまう。

「flhynkd pv」

青年は何か言っているが、理解できない言葉だ。

「お前達はなにものだ！」

私の言葉も彼らは理解できないらしい。

「ジュリアーナ」

そう言って少女は自分を指差す。

「ナナイ」

今度は青年を指差す。なるほど・・・名前か。

「RDY-1732」

私もそう言っていると自分を指差した。彼女が頷く・・・少なくとも名前はお互い理解したようだ。

指差しながらその名称を告げたり、ジェスチャー等により少し状況が理解できた。

どうやら、何かから逃げてきたらしい。

2人の身なりはそれなりに整っており、少女に至っては宝石を多数身に着けている。また、青年は長剣をさげている。

お家騒動もしくは駆け落ち・・・どこの世界にもあるものだと、急にこの惑星に親近感を覚えた。

・
・
・

私の運命は、空から訪れた全身を金属甲冑で包む戦士であった。彼の話す言葉は私達と異なり、私達の言葉も彼には理解出来ないようであった。

指差して名前そして身振りにより、私達の境遇を説明したつもりであったが、どの程度相手に伝わったかは定かでない。

王宮であれば意思疎通の魔道具があるのだが、ここでは望むべきもない。

そんな会話？を空からの客人としていると、遠雷のような音とともに森の中ほどで火の手が上がる。

近衛が貴重な時間を私に与えていたことを急に思い出した。急がねば・・・

私は身振りで走るしぐさをすると森の右手を指差す。その方向はあまり知られていないが森を山際で迂回する小道がある。そして、シャープネスに入る抜け道がある。

私達は、ゆつくりと馬を走らせる。彼はどうするか振るかえると・・・それは、衝撃的であった。

地上すれすれの高さを浮かんで移動してくるのだ。足は全く動かしていない・・・戦士ではなく魔道師・・・しかし、このような移動方法は聞いたことも無い。

彼を見ていると、手を伸ばし前に振る・・・どうやら、急げと言っているようだ。

「急げ！」

ナナイに告げるとともに馬に鞭を入れた。

追手

先を急ぐナナイが右腕を横に上げて休止の合図をする。

改めて周囲を見渡すと、星明りの中、右手山側の方向へ伸びる抜け道がある。

「先を見ますゆえ、しばしお待ちを・・・」

ナナイは単騎抜け道を駆けていく。山間を抜ける間道は、旅人には険しく伏兵を配置するには最適だ。

そこまで準備が整っているとすれば・・・周到な下準備をする必要がある。しかし・・・王宮ではそのような気配を感じることはなかった。

ここも、私の命をチップとした賭けとなるのか。

魔道戦士が私に近づく・・・騎乗した私とほぼ同じ高さまで体を上昇させる。

全てが、金属に包まれたその体はナナイより少し大きいくらいか・・・顔でさえヘルメットと一体になったフェイスプレートによりうかがいしれない。目の位置には黒いガラス状のもので楕円形に覆われている。

その彼が、後方を指差す。追手か？・・・星明りの中では私の見通せる距離は100歩にも満たない、それでも少くないヒジメの音が小さく、しかもすこしづつ大きくなってきている。

黒い森での散発的な伏兵による遅延時間、草原での搜索時間、私達の足跡を確認してから馬を早がけする時間。・・・ほぼ追手と考えてよいだろう。

もはや、これまで！・・・覚悟を決める。腰に差した短い杖を抜く。これは、母の形見・・・歴代の皇帝正室が持つ宝錫、その地位を示すとともに魔法の増幅を可能とする魔道具だ。

宝錫を右手に持ち頭上に掲げる。

「ボルトノン！！」

裂帛の気合を込め、投射点を睨みながら魔法の発動キーを叫ぶ！
ドドォーン！！と、稲妻が投射点に落ちる。投射点を中心に落雷が重複する。

稲妻の光で、幾人かが被雷し馬とともに地上に投げ出されるのが見える。やはり、追手だ。・・・10騎程の騎士が落雷を避け、興奮する馬をなだめている。そして抜刀した。

混戦での広範囲魔法攻撃は自分をも巻き込む。連発が可能な低級魔法では、騎士の装備している鎧の加護により威力が損なわれる。かといって、中級魔法では連発不可能・・・そして、私に残された魔力は中級魔法6回分。

ナナイの戻るまで・・・そして戻らねば最後の魔法を自分に放つ。墓所の鍵と宝錫は私とともに消えるのだ。

星明かりの中の黒い影、それに宝錫を向ける。

「ゴーラム！」

私の言葉に合わせて宝錫から手毬ほどの火球が飛び出す。

魔法を連続で放つ。追手の内、3人を倒した。また火玉に驚いた馬により2人が落馬している。・・・残り5騎。

ここまでか・・・宝錫を自分に向ける。

その時、一条の青い光線が残像を残しながら追手の馬を射抜く・・・次々と。

それまで、何もせずに経緯を見ていた彼の手には金属製の筒が握られている。どうやらその筒から光線を放っているようだ。しかし、魔法の詠唱は聞こえない・・・

落馬した騎士の内、2人が起き上がると長剣を大上段に構え私に向って走ってくる。

魔法を唱える寸前にそれは起きた。稲妻の輝きに似た光を放つ長剣を真横に構え、彼が追手の真横から走り抜ける。追手は体を両断させて、その場に倒れる。

彼は、右腕を私に向け、親指を上げる。何かの合図なのだろうが、何故か私は安堵した。

「姫——っ!!」

遠くから聞きなれた声が聞こえる。ナナイが戻ったようだ。それに複数の騎馬のヒズメの音が続く。

20騎程の騎兵を従えたナナイは、私達の後ろに広がる戦闘の惨劇に驚いたようだ。

「追手ですか・・・間に合うか心配でしたが・・・」
体を両断された遺体を見ながら呟く。ふと、何かに気付いたようだ。

「どのような魔法を使われたのですか？体を両断するような魔法はいろいろありますが・・・これほど綺麗にしかも出血を伴わないものは始めて見ます。」

「雷光の剣だ。私も始めてみる・・・決して魔法ではない。」

ナナイは改めて彼を見る。手傷を負った痕跡は見受けられない。

「すまない。手間をかける。」

ナナイは彼にそう告げると、先を急ぐ仕草で出発を促した。

ナナイが私の馬に並ぶと、抜け道の状況を説明する。

「この先は一応安全です。途中で父の部隊と遭遇しました。王宮の変事を物見の塔で確認し、状況確認に小隊を派遣したようです。半数を引きつれてまいりました。残り半数は、私の判断で国境の封鎖を命じています。」

この先には、狼の巣穴と呼ばれる砦がある。帝国領土とサザランド王国の国境を見守る前線基地だ。砦は帝国のシャープネス男爵領にあることから、常時1個中隊、約500名程度の兵により守られている。

アトランテ帝国とサザランド王国を一本道で結ぶ街道は重要な交通路である。2国間のサザランドよりにある白狼山が国境線となっており、山が急峻であるが故、軍隊の展開を許さない。このため軍隊の移動は街道のみとなる。

初代皇帝はこの山の峠に砦を作りサザーランドに睨みを利かせた。隘路に兵を展開すれば十分に少数の兵で大群を阻止できる。

抜け道を急ぐ。何時第二、第三の追手が迫るとも限らないからだ。峠に差し掛かり、朝焼けの空に狼の巣穴が見える。砦の物見には帝国の国旗とシャープネスの旗がはためく。振り返れば、黒い森の遙か彼方が黒い煙で雨雲のようだ。

砦の跳ね橋を通り、馬を下りる。砦の宿舎から中隊長と兵がぞろぞろと広場に集まってくる。

私は、ジュリアーナ・デル・アトランテ・・・帝国最後の皇族である。

私は、帝国を失い・・・運命を手に入れた。

館にて

砦の守備隊を率いる者は、ナナイの身内のような。少女をうやうやしく出迎えると、ナナイの肩を抱き再会を喜んでいる。

私の姿を訝しげに見ていたが、それに気づいた少女の話で納得がいったのか、私の前に歩いてくると右腕を鎧に打ち付けて話しかけてくる。・・・たぶん礼を言ってるのだろうと右手を前にし、それはいいと態度で示す。

そこに、1名の兵が走ってきた。小箱を少女にうやうやしく託すと、少女が私に近づく。

私の前で小箱を開けると、幼児のコブシほどのオレンジとブルーの2色に彩られた結晶体を取り出し私に差し出す。

持て！ということか？と考え、結晶を手取る。

この前、追手に放った少女の攻撃時にもそうだったが、私のエーテル観測器官にエーテルの歪が感知される。前回と違って、今回は歪みに強弱のリズムがある。電脳にて情報処理を試みる。

処理開始・・・26の記号による音節表現・・・（周辺の兵達の話し声をサンプリング・・・展開）・・・合致・・・（少女とナナイの言葉と動作表現を比較）・・・情報の一部を解読・・・（解読データを基に未解読部分を推論）・・・

処理終了・・・翻訳システムに類似・・・一部不明箇所が有るものの、言語による意思疎通が可能・・・

驚いた！・・・中世的な世界と認識していたが、このような物が存在するとは！

結晶を高解像度の電子目で調査する・・・ブルーとオレンジでは結晶構造に相違がある。その境界面は複雑な多層構造であり、私の

電腦構造体の一部を思い出させる。

「私の言葉がわかりますか？」

「理解できる。」

私の言葉に満足した微笑みを浮かべると、少女は言葉を繋ぐ。

「まずは、助けて頂いたことを感謝します。ここは、ナナイの実家シャープネス男爵領の外れにある砦、【狼の巣穴】です。ここまで来れば、一安心出来ます。」

「死を覚悟するのはまだ早い。理由はともかくだ！」

「それは・・・詳しくお話しします。ともあれ、お疲れと思えますので・・・誰か！戦士殿の案内を。」

少女が手を上げて兵を呼ぶと、一人の兵が駆け寄る。

「十人長のカシムです。ご案内します。」

兵はそう名乗ると私を館の中にいざなう。

客間は館の2階にあった。窓下に先ほどの広場が見える。その先は兵営なのだろう、壁と一体となった2階建ての建物がある。

そういえば、砦の門前には跳ね橋があった。物見の塔と合わせる
と1000名程度が優に居住できる前線基地としても十分機能する
砦だと推察できる。中世の世であればだ！

はたして、どの程度の文化水準なのであろうか。

「お座りになってください。」

後ろから声がかかる。振るかえると、少女が、トレイを持ったナナイとともにいる。

つかつかと少女の方に歩み寄り、少女の示すソファに腰をかける
と少女が反対側に着座する。

「ここは、気遣い無用です。どうぞ、兜をはずし御休憩ください。」

「たしか・・・ジュリアーナと言ったな。何れ判るのだからここで

説明しておく。・・・私は肉体を持たない。」

そう言つて、胸の装甲板を開放する。

2人は息を呑んだ・・・声も出ないか。

私の体、装甲板の下には数々の電子機器、機械構造体、それを繋ぐケーブルが隙間無く詰め込まれている。

「この、兜の中も似たようなものだ。生物と呼べる存在ではないが、人間であると自覚している。」

「・・・なにかの呪いなのですか？」

ナナイは絶句しているが、少女は気丈にも私に問いかける。

「いや、呪いではなく、戦いの必然と言つべきだろう。長きに亘る戦いで、負傷箇所を機械に置き換えた結果だ。」

「そうですか。・・・では、その甲冑姿は全て貴方であると・・・」

「

「そう考えても、間違いではない。それと、前にも言つたが私は、RDY-1732と言う。」

「では、ルディと呼ばせて頂きます。私のことは・・・ジュリアでかまいません。」

「いや。姫と呼ばせて貰おう。貴方には立場があるはず・・・」

「そのことですが・・・」

ナナイが口を挟む。

そして、これまでの経緯を説明した。

反乱・・・皇族の最後の一人、追手がかかるはずだ。

しかし、気になることもある。それほど大規模な反乱であるならば予兆を完全に隠すことは困難なはず・・・

「よほど周到な準備で進められたと見える。」

「いえ、忠信はあつたのですが・・・皇帝陛下は、それはない。

と・・・」

「父は、いえ陛下は、信じることが平和の根本である。が口癖でしたから。」

「しかし、たまたまその場にいた私の父は、その話を基に密かに

調査し、可能性が極めて高いと判断しました。そして、皇帝にその話をしたところ・・・」

「シャープネス男爵を・・・皇帝は、多数の貴族の前で罵倒したのです。そして謹慎を命じました。」

「父は、領地で謹慎するため馬車で王宮を去ったのです。つい数日前に・・・しかし、父の部下が私にそつと耳打ちしました。皇帝が謹慎のためにわざわざ用意した馬車の中に、娘を頼むの私信が入った一箱の黄金があつたと。」

2人は涙を流しながら話す。

「どちらも良い父親ではないか。姫よ、そなたの父は自分の言葉に責任を持ったのだ。これは恥ずべきものではない！」

「そして、ナナイよそなたの父も忠義の士であるといえよう。だからこそ、万が一を想定して所領に帰したのだ。」

「「はい！」」

2人は涙に濡れた顔を上げる。

「ところで話は変わるが、国民は幸せだったのかな？」

「国民とは？・・・帝国には身分制度があります。貴族、僧侶、兵士、市民、商人、そして奴隷。各身分の幸せも異なると考えられますから、帝国全体の人間を同一視して論じることが難しいです。」
私の問いに姫が答える。・・・そうか、身分制度と奴隷制度・・・極めて中世に近いのか。

「では、質問を限定して、市民は幸せだったのかな？」

「市民はそれなりに生活を楽しんでいたと思います。先ほどの姫の言葉ですが・・・補足します。身分はあいまいさがあります。能力のある市民はそれなりに上位の身分に上がることが出来ます。また、逆に身を持ち崩した貴族が市民階級に下がることもままあります。」

「父は、自分が男爵の位を持つのも、祖父が鉱山開発に尽力した結果を、先代皇帝が評価したのだと言っておりまして。」

ナナイが続ける。

「実は今回の反乱も身分制度が原因と考えられます。皇帝は、奴

隷制度の廃止を画索していたのです。」

「奴隷制度が廃止されると困るものがいたか？」

「貴族は基本的に大農園の経営者ですから、耕作を行うものは基本的に奴隷です。」

なるほど、将来を見通せるものは近視眼の持ち主には嫌われるか・
・まして、自分の経済根源を脅かされるとなれば穏やかではすまない。

「しかし、このような話を私にすることとは・・・」

「はい。協力をお願いするためです。」

「協力しよう。但し、条件がある。」

ストレートの問いの答えに、姫は、ほっと息をする。

「その条件とは？」

ナナイの問いに私は答えた。

「反乱の鎮圧は、国民の手で行う。国民とは、我々に賛同する住民全てだ！」

峠の戦い（１）

沈黙、それは、深い思考過程がもたらすもの。深ければ良いというものではない。それは、自分に都合の良い解釈に落ち着くことが殆どである。

少しの間をおき言葉を続ける。

「帝国は何代続いているのかな？多分１０代以上続いていると考えるが？」

「父は第１３代皇帝です・・・」

私は頷く。当たりか・・・停滞の末期・・・皇帝を不可侵とせず、自ら次期皇帝を望むものも出てこよう・・・

シャープネス男爵の鉱山開発、それは、詳しく聞くと奴隷達を解放し、能力と成果に応じた給与を支払うことであつた。

働けば働いただけ生活が豊かになることを知った人々により、鉱山開発は一機に進展したという話である。

その話を聞いた皇帝は、停滞していた皇帝領の活性化を図るために奴隷制度の改革を画索し始めたというところで、反対派に粛清されたと言うことか。

ならば、我々のなすべきことは一つとなる。

「これからの戦いは、皇帝の遣り残した仕事であり、我々の義務でもある。」

「それは・・・奴隷の解放？」

姫の言葉に私は頷く。

「そうだ、そして身分制度の緩やかな否定・・・」

「そんなことをすれば、帝国中の貴族が敵になりますぞ！」

「たしかに・・・だが、それを望む者も多いはず。だから、緩やかな移行をうながす。」

「出来るでしょうか？」

「貴族の主だった者達の私兵を合わせると約５万、帝国軍が反乱

軍に組み込まれた場合は・・・約10万が加わります。シャープネスの私兵は2個大隊6千程度です。兵の数では、比較になりません。」

2人は現実の下を向く。

「兵の質が同じならば、結果は見えている。しかし、ここで私が協力することで兵の質を変えることが出来ると考えている。但し、必要なものがある。」

「それは、旗印となる人物、鉄の加工を行える者、炭、硫黄、硝石だ！」

2人は、最初の言葉に頷くが、次の事項に首を傾げる。

「姫を旗印には理解できます。しかし、硫黄等は・・・必要なのですか？」

「男爵私兵に義勇軍を募集したとしても、反乱軍には数で圧倒される。しかも、反乱が周辺諸国に知れれずにいるとは考えにくい。だから、兵力差を兵器の差で補う。今言ったものが準備できればそれも可能だろう。」

「分かりました。男爵公邸に先立つて準備させましょう。我々が到着するときにはどの程度準備できるか分かるはずです。」

ナナイは壁際のライティングテーブルでメモを書き、客室前の警備兵に託した。それと引き換えに何か品物を受け取る。

「どうも、私達の会話に入りづらかったようです。兵からみれば極秘に該当しますからね。それと、これは貴方への贈り物です。少なくとも貴方は兵ではありませんね。言動で創造すると、少なくとも將軍に近い方とお見受けします。全身甲冑にこのマントをつければ、形だけですが將軍クラスに見えるでしょう。」

ナナイはそう言う私の後ろに回り、純白のマントを装備させる。姫が立ち上がり髪止めを取る。白金の髪が途端に腰まで流れ落ちる。

「・・・これを・・・」

言葉少なく、私のマントの留金に髪留めを差し込む。布を貫いて

硬く固定される。

「他者には、私付きの將軍と見えるでしょう。ナナイが近衛隊長ですから、その上に位置するものと見られるでしょうね。」

そついいながら姫は微笑む。ナナイが頷いて姫を見ている。

階下が慌しい。鎧がこすれる金属性の音と廊下を走る音が近づく。不意にドアが開くと、年若い騎士が数名の部下を率いて飛び込んでくる。

姫の前に控え、胸に手を置く礼を取ると、息を切らせながら報告する。

「姫、サザーランドの軍が峠に近づいております。」

「動いたか・・・規模は？」

「約1万程度かと・・・」

「魔道兵数百は厄介だな・・・しかし、1万程度でこの砦を攻め、峠の門を突破するにはかなりな時間が必要。やつら何を考えているのか？」

魔道兵・・・そうか、魔法がこの世界にはあったのだ。

魔法による攻撃にもこの砦と街道を閉鎖する門はある程度は絶えられると言ふことか。しかし、魔法の波状攻撃を受けた場合はそれほど持たないと考えられる。

「確認したい。シャープネスに水銀はあるか？」

「魔道具、薬等の用途に水銀は使用されます。このシャープネスは生産地です。」

ナナイは、あまり関係ない話に舌打ちしながらも答えてくれた。

「では、魔道師の対策は私が行う。殲滅しても良いのだろうか？」

全員が私を見る。一人でどうするのだと言ふ目で見ているが、対処は簡単だ。

「ところで、敵の攻撃はどのような手順を踏むと考えているのだ？」

「砦の門前で、一旦行軍を停止。その後、騎士が開門を迫ると思

います。開門せぬ場合は、魔道師の一隊が前に出て、一斉に攻撃魔法を門に投射すると考えられます。」

「魔法攻撃時の門と魔道師の距離は？」

「弓矢の届かない距離・・・3百歩前後でしょう。」

「ならば、私一人で完全に殲滅可能だ。門に案内してくれ。」

若い騎士は、どうぞこちらへと先立つて歩き出した。私は後に続くと姫もナナイを連れ立つて付いてくる。

危なくないのかと問いたですと、魔法攻撃の数回程度は完全に皆の防護魔法で相殺できるとのことである。

高みの見物・・・そんなものだろう。

サザーランドと帝国を結ぶ街道は道幅約15mの立派な道である。門はかつては隊商の休憩所として使用された峠の広場にあり、両側の崖を利用した造りとなっている。

門自体は、高さ約10m幅3m程度である。門の扉は樫の木を鉄で鱗状に覆っており、火矢程度ではビクともしない。

隘路は門を境に北と南に緩やかな傾斜を持っており、道の両端は高さ30m程度の急斜面が続いている。なるほど、小で大を防ぐ絶好の位置と言えよう。

北から数名の騎士が馬を駆けて来る。門を開き迎え入れると門上の我々に大声で敵の接近を知らせる。

緊張して北の街道を見ているナナイに近づく。

「南からの挟撃があると厄介だ。呼応しているとは思えないが万が一も考えられる。南の様子を確認した方が良い。」

姫はナナイに頷く。

はっ！とナナイは、離れて様子を見ている年若い騎士に数言話す。騎士は駆け出す。南はこれで良いか・・・

サザーランドの旗印が見えてきた。

騎馬隊が先行する。続いて徒歩の重装歩兵・・・その後ろの十数

名の一隊が指令部か・指令部の後に軽装の歩兵が続いているようだ。

砦より数百m程度の距離でサザランド軍が停止する。

6列に並んだ騎馬隊の真ん中に道が開く。

司令部より騎馬が1騎駆けて来る。

門の前、10m程度に止まると、我々に向かい声を張り上げる。

「開門ー！」

峠の戦い（2）

「開門ー！ー！」

峠に軍使たる騎士の声が木霊する。

フェイスプレートを開けた顔は、青年に達したばかりのようだ。一世一代の晴れ舞台の場でやや上ずった声になっているが、興奮してややもすれば後ろ立ちする馬を御しながらの姿は立派である。

「私は、サザーランド王国第2師団に所属するライトンと申す。

この度のガスト伯爵義拳に一万の兵を持って馳せ参じた次第。次第は前の約定をもって定めし事。早、開門を開きたまえ！」

「そのような約定は知らん！」

私の声に、馬上から我が姿をマジマジと見る。

「・・・貴殿は、ガスト候の縁者ではないのか？ 砦に至る街道で姫を捕らえたのではないのか？」

やや、後方にナナイに支えられて立つ姫の姿は、見ようによってはそのようにも見えるのだろう。

「我は姫を守護し、この砦に至る。ガスト一味は反乱軍、そのような輩と同一視されるとは、いささか無礼であろう！」

「では、貴殿は？」

「我は、連邦軍第一重降下猟兵師団所属、特殊戦術中隊隊長、ルディ大尉である。義によってジュリアーナ皇女陛下に組するもの、退かねば、我が戦技の糧となると考えおろう！」

騎士はフェイスプレートを下ろし、騎馬を返す。

再び、騎馬隊が2つに割れ、軍使を取り込む。

「さて、どうなるか・・・」

「面倒をかけます。」

姫の声にそんなことはない、軽く手を振って打ち消す。

合戦の準備をする。

膝の装甲板を開放し、中に収納されているプラズマ加速銃を取り

出す。

次に背中 of 装甲板内のロングレンジバレルを加速銃に接続する。

2人は、私の準備を不思議そうに見ている。

「これが、私の戦い方だ。魔法は使えないが、似たようなことは可能だ！」

「始まります。」

ナナイが敵軍を指差す。

騎馬隊が道を開けると軽装歩兵の中隊が進み出て関門から200m程度の距離で停止する。

「魔道師隊です。攻撃魔法に特化した部隊と聞いております。」

横に約30人、5段に整列した姿は綺麗な方形陣となっている。

魔道師隊が一斉にその右手に持つ杖を掲げる。

「・・・始まります。数撃は砦の防護魔法で防げましょう。」

「後は、頼みます。」

それまで、関門の上で見守っていた者達が砦の中に入っていく。

私の感知機能にエーテルの急激な、しかも大規模な乱れが感知されたときそれは始まった。

「「ボルタノン（ゴーラム）！！」」

同一魔法の攻撃ではなく性質の異なる魔法が、一斉に150個放たれる。辺りは音の洪水だ。常人では鼓膜を痛めるであろう。

火球が重なり巨大な劫火となりゴーオ！と言う音を伴って砦に迫る。

杖より放たれた電光は、巨石を転がすようなゴロゴロという重低音と伴に関門に迫る。

しかし、魔法は砦に近づくにつれ威力を減じ、石壁の1m程度手前で消失した。

（なるほど・・・エーテルの乱れはエーテルの正常化により消失するのだな。）

「「ボルタノン（ゴーラム）！！」」

魔法攻撃が継続する。

次は、こちらからの攻撃だ。

私は、プラズマ加速銃改を構える。照準は最も左側の魔道師だ。銃の引金を引く。

カートリッジ内の水銀タンクから重力操作で、直径5mmの水銀球体が銃のバレル最後部に形成される。

水銀球は重力崩壊によりプラズマ化する。プラズマはバレルに内臓された磁力コイルにより光速の数%まで加速されバレルより放出される。

しかも、目標は私の電腦により精密に計算され、当たるべくバレル内の磁力バランスを可変する。

この操作が、僅か0.1秒の間で行われる。

先頭の魔道師の列に対し、引金をひいたまま水平に銃を移動させる。

青白い光が帯状になって飛び出す。

1人に10発以上のプラズマ弾を打ち込んだようだ。前列の魔道師が全手倒れていく。

続いて2列目、3列目と攻撃を行い、魔道師隊を全滅させる。

皆から、オオオ〜と言う歓声とも驚きとも取れる声が響く。

騎馬隊は全く動じない。驚いてはいるのだろうが、姿勢に変化は生じない。訓練の賜物か・・・我が部下もかく有るべきと一人賞賛する。

また、騎馬隊が割れる。

同じように同じ服装をした者達が同じように列を作る。第2隊か・

同じようにロングレンジのプラズマ加速銃で薙ぎ払う・・・

突然、引金を引くも、プラズマ弾が発射しなくなった。

カートリッジ内の水銀が空になったせいである。

急いで、銃を分解し、収納する。

前を見ると、後ろ２段の列が無傷のようだ。仲間の死をもともせず魔法を放ってくる。

よく見ると、魔法の消失点が石壁に近づいている。

私は腰に手をやると、両わき腹の装甲板の開放し、プラズマソードの柄を取出した。

前に手を伸ばし、互いの柄を接続する。約８０ｃｍ程度の棒状にそれは変化した。

棒を左手に持って、関門から跳躍する。

空中で棒に付属したスイッチを操作する。と、棒の両端より１，２ｍのプラズマ噴流が飛び出す。

威圧効果を期待して、風車のようにプラズマソードを回す。マントを翻し２０ｍ程度飛んだようだ。

重力操作により体を１０ｃｍ程度浮かすと、滑るように魔道師隊の切り込む。

回転するプラズマソードにより苦もなく人体を両断していく。広場を１往復。これで全ての魔道師隊が抹殺された。

あまりの出来事を目の当たりにしたためか、騎馬隊の先頭列に脅えが走る。

脅えは馬に伝染し、何頭かの馬が２本立ちになる。

私と騎馬隊の距離は約２０ｍ。

私はプラズマソードのプラズマ放出を停止すると、左手に持ち替え自然体で立つ。

「帰れ。さもなくば殲滅する！」

私は短く言葉を発した。

しばし、両者のにらみ合いが続く。

後ろより騎馬隊の列が静かに分かれて道を作る。
中より、1人の女性が騎士の甲冑に身を包み静かに歩いてくる。
騎馬隊の最前列を過ぎ、私の前で止まる。

「珍しい武技を見せていただいた。礼を言おう。」

女性騎士はそう言うともぎうでを胸の前に組む。

「我らとて、帝国の内乱に義があるとは思えんが、そこは・・・それ、主君の命と言う訳だ。これで逃げ帰っても、魔道師隊全滅では皆の攻略も出来ないわけだから言い訳も出来よう。」

「ルディ・・・と言ったか。凄まじい技量である。2度と戦場では会いたくないな・・・」

「我らは引くでしょう。しかし、国王の野心は変わらない・・・注意することだ。」

女性騎士はそう言うて踵を返す。

「・・・忠告は感謝する。して、貴殿の名は？」

「私の名は・・・マリア・・・マリア・・・サザーランド。ただの第3王女だ。」

彼女は振り返りながらそう言うのと騎馬隊の中に溶け込んだ。

湖畔の館

王女を隊列に飲み込みサザーランド軍は峠を下る。

隊列が遠ざかるのをしばし眺めた後、関門にゆつくりと歩む。

関門まで20m程近づいた時、反重力装置を作動させ一気に関門の上に飛び上がる。

そこには、姫達が私を待っていた。

「ご苦労様でした。一人では言われましたが、杞憂でした・・・」

「さほどのことはない。」

「ところで、相手の指揮官は、確か第3王女と言っていたが・・・」

「軍略に優れた指揮官です。そうでしたか・・・マリア將軍であれば、内乱で乱戦状態となっても自国に利した戦いが可能でしょう。」

客室に戻ると、数名の取巻を引きつれ中隊長がやってくる。

「見事な戦いでした。魔法具をあれほどに上手く使われるとは・・・さぞや、数多の修羅を越えて来られたと感服しております。」

「賞賛に来たのではあるまいに。」

「館への移動準備が整いました。それをお知らせに・・・それと、今後の対応の件についてご相談したく・・・」

中隊長が姫に問う。

姫が私を見る。

「サザーランド軍は引いた。軍略家なら再び進軍することは無いと考える。この砦の防護魔法は協力であり、破るには多数の魔道師が必要となる。」

「大丈夫でしょう・・・後は任せます。」

姫の言葉にナナイも賛同する。中隊長は黙礼で答え館に戻って行

った。

「では、私達も出発しましょう。」

ナナイが姫を促す。

我々は、砦の広場に用意された馬車に向かう。

「申し訳ありません。姫様がお使いになるには、いささか武骨ではありますが・・・」

馬車は軍用馬車であった。

我々が乗り込むとナナイは窓から御者に出るよう合図を送る。

岩山の斜面に、この馬車1台がようやく通れる程の細い道が切出されている。

所によつては、道の半分程が切出されており、道を庇のように覆っている。

山肌に合わせて曲がりくねった緩やかな坂道を進む。

眼下には黒い森が遠くまで続いている。

やがて、森に入ると道は広くなり、森を出ると道は石畳に変わった。

今は、丘陵に面した畑の道を進んでいる。

どのような作物を栽培しているかは判らないが収穫は済んだとみえ、まばらな雑草の下に黒々とした土が見えている。

村が見えた。

数十軒の農家が道の両側に寄添うように立っている。

村を過ぎ、畑を過ぎ・・・馬車はひたすら走る。

しばらくすると、遠くに黒煙が見える。

「もうしばらくです。あの煙は鉾山都市のもの。あの先に私の館があります。」

鉾山都市は、城塞都市のように見える。町の周囲が数mの城壁に囲まれており、入口の門には門番兵が立っている。

馬車は都市には入らず、都市の手前で迂回路を進む。

「町の中は煩雑で一気に走り抜けられません。迂回して進みます。」

「鉦山都市を迂回すると一筋の川の流れている。」

「この川は鉦山都市への用水路です。100年程前に作られたものです。」

用水路に渡された橋を渡り、山裾を迂回した道を進むとそれが見えた。

「あの湖の畔にある館が、シャープネス男爵の居城です。」

緑の木々に縁取られた銀色の湖、その岸边に低い城壁に囲まれた城がある。

城の主建屋である館は、3階建程で防備よりも優美さを主眼に作られたものと思われる。

鉦山経営の手腕をかられて男爵位を得たという男は、審美眼も備えていたに違いない。

湖に浮かび上がるように見える城は、それは優美な光景であつた。いつしか、道の両側は並木となっており、木漏れ日の中を馬車は進む。

開かれた門を入り、城の広場を通り過ぎ、館の玄関前に馬車が止る。

そこには男爵以下、城の主だった者達が石段に待ち構えていた。私と、ナナイが降り、姫が下車しようとすると、男爵はかけより自ら手を差し伸べて手助けする。

「この度は、お力添え出来なく申し訳ございません。」

「よい。それは過去の事。これからの事は頼みましたよ。」

「それは、もう・・・さ、さあ、こちらへ。」

「御館様・・・姫様は私が御案内いたします。」

最後列の侍女の列を割って妙齡の婦人が石段を降りてくる。

「宮殿と違い、華やかさはありませんが・・・さあ、こちらへ、湯あみの準備が出来ております。それと着替えを・・・」

婦人は姫と伴に侍女を連れ立って館に入って行った。

男爵はそれを微笑みながら見ていたが、踵を返すとナナイに厳しい表情を見せる。

「近衛は、居ないのか？」

「突然の出来事でしたので・・・何とか小隊を編成し、脱出しましたが、追手からの時間稼ぎをするため・・・散って行きました。」

「そうか・・・手勢を与える。今後とも護衛を任せるぞ！」

「何はともあれ、安堵した。反乱軍も帝都の混乱でしばらくはここに来れまい。まずは、ゆとりと休息いたせ。」

「客人も、こちらへどうぞ。」

ナナイは男爵と伴に館に入る。

私は執事風の老人に伴われ客間に通された。

「どうぞ、甲冑をお外し下さい。今、お着替えを用意致します。」

「気遣い無用。それに、この甲冑を外すことは出来ぬ。」

気遣いを全て断る私の扱いに苦慮しているようだが、全て無用のことだ。

そんなことをしていると、部屋のドアが開き男爵とナナイが入ってきた。

男爵は私に歩みよる。

「気付かぬこととはいえ、申し訳ありませんでした。」

男爵は、執事に耳打ちし執事を下げる。

「異界よりの武人とは・・・俄かには信じることが出来ませんが、貴方がここにいるからには信じるほかないでしょう。」

男爵がてを叩く。

ドアが開き、数名の男が入ってきた。

ドワーフ達

客室に数名が入ってくる。

小柄な、それでいて筋肉質、しかしながら顔つきは老人のそれだ。
(ドワーフ・・・魔法もある。彼らがいても不思議はないか。)

男爵は、我々を窓の傍にあるソファーに案内する。

「さて、彼ら呼んだのは、貴方の指示によるものです。彼らは、
鉦山都市で、それぞれ工房を持つマイスター・・・その技能は優秀で
す。」

ドワーフ達はその言葉にほくそ笑む。それなりの実力を自負して
いるということか・・・

「彼らに何を作らせるおつもりですか？」

「今までの戦を根本から変えるものだ。その前に聞きたいことがある。」

「長さや重さの単位はどのようになっている。」

「長さは、ケープという単位を使う。重さはエントを使う。初代
皇帝の体を基準に決めたものだが、年月を経て曖昧になって来てお
る。」

「ほれ、この短剣だが、長さ1ケープ、重さ3.5エントになっ
ている。しかし、わしの工房での値であり、他のやつは違った値を
言うだろう。」

ドワーフの1人が短剣を取り出して言った。

要するに、明確な基準単位が存在しない・・・ということか。

「男爵殿。この館に銅の塊はあるか？あれば分けて貰いたいのだ
が・・・」

お安い御用。と男爵は執事に手配させる。

「依頼したいのは、薬品の調合。細い鉄管、銅管の製作、ちょっ
としたからくりだ。」

私の依頼に、つまらん仕事だという顔をする。

そこへ、執事が入ってきた。

テーブルに棒状に精製された銅バーを5本置く。

「依頼のものです。」

私は立ち上がると席を離れ客室の中央に歩き、腰の装甲板を開け、プラズマソードを取出す。

「近づくな！」

テーブルより銅バーを4本、反重力場で持上げると、私の正面まで移動させる。

動力炉よりソードの柄にエネルギーを供給すると、プラズマの細いビームが形成される。

電脳で計算された結果を基に、プラズマソードで銅バーを刻む。

同じことを4回。

さらに、残りの銅バーを移動させ別の計算結果で切り刻む。

銅バーの残財を一旦床に落とし、必要なものを手に持ち席に戻る。ソファアのいた者達は、信じられない物を見たせいか、あっけに取られた顔をしている。

「今のは！魔法ですか？」

男爵が皆を代表するように言った。

「そうではないが、似たようなものだ。」

「それを見せては貰えんかの？」

私は、柄をドワーフに渡す。

重さを確かめるように両手で持つと、次に舐めるような目で外部を見ている。他のドワーフも身を乗り出すようにその詳細をうかがっている。

やがて、あきらめたように頭を頂垂れ私に柄を戻した。

「・・・判らん・・・魔法具と言う訳ではなさそうだの。」

「さて、話を戻すでしょうか。」

そういつて先ほど作成した銅の板と銅のキューブをテーブルに置いた。

「何個か作ってみたが・・・この板とキューブを製作の基本単位と

したい。」

「長さはm：メートルとする。板は、厚さが0.01m。幅が0.1m。長さが0.2mだ。」

「重さはg：グラムとする。キューブは、1000gであり、単位の1000倍をK：キロと呼ぶことにする。」

私は、単位の原器をドワーフ達に渡す。

「次に、私はどのような形でお前達に依頼をすればよいのか？」

「薬は調合比率を教えられるが、形はどうするかが問題か。」

「画家を使われたらどうでしょうか？」

男爵が助け舟を出してくれた。

「私が説明することを形として捕らえてくれだろうか？」

「大丈夫でしょう。お抱えの者が居りますので手配します。」

「ドワーフはタバコが好きと聞く。この中でタバコを吸わないものはあるか？」

「わしじゃ。体を壊しての。」

「では、薬の調合を頼む。使うのは、硝石、硫黄、木炭だ。比率は・・・」

名乗り出たドワーフに薬剤名と比率をメモした紙を執事が渡す。

「残りの者は、製作に係ってもらう。おおよそのような形のものだ。」

執事からメモ用紙と羽ペンを受取り、銃の概略図を描く。

「この部分は、鋼鉄の筒、ここにからくりを置く。からくりはこの突起を押すことで作動する・・・」

外略図で説明する。

「詳しい寸法等は、後で届けるが・・・出来そうか？」

「わしらは、工房の主じゃ。それなりの弟子を抱えたいっぱしの者よ。簡単な細工じゃ。」

「では、よろしく頼む。」

ドワーフ達が去って行った。

「男爵殿。お願いがあるのだが・・・」

「何なりと、姫様と息子の命に釣合うものではありません。」

「何人かの部下が欲しい。それと、ある程度の領内における自由行動の許可を。」

「それでしたら直ぐにでも。それと、貴方が身に着けている姫様の簪は、姫様の直下にあることを示すもの。言わば私の上の地位であると言えます。問題有りません。」

男爵の言葉に執事がドアに向かうと、1人の侍女を連れてくる。

「私の孫ですが、自由にお使い下さい。」

「ミールと申します。よろしくお願いします。」

まだ、幼いが利発そうな表情を私に向けて挨拶した。

「ところで、客人のお名前は、ロディ様でよろしかったでしょうか。」

私は黙って頷く。

「客人用の部屋にご案内します。では、ミール、ご案内しなさい。」

「はい。こちらです。」

私は少女に連れられて2階の1部屋に案内された。広さは客室の半分というところか、暖炉にベッドそれに簡単なテーブルセットがある。

「こちらです。なにか御用なものがあれば準備させますが・・・」

「そうだな・・・とりあえず椅子を何脚か追加したいが・・・後でよいか。それと私は、こんな体だ。」

私は腹部の装甲板を開く、少女は思わず悲鳴を上げそうになったが、理性でなんとか抑えたようだ。ゴクリと唾を飲み込んでいる。

「食事とお茶は必要ない。しかし、客人は別だ。」

「判りました。」

彼女はそう言うのとドアのすぐ脇にある小さな机に移動する。

私が怪訝そうに見ていると、侍女の控え場所と教えてくれた。

なるほど、来客の取次ぎも、私の依頼もそこなら問題なく処理出来よう。

私は、窓際の椅子に腰を落とすと風が作り出す湖の波紋を眺め続けた。

「ロディ様・騎士が参りました。」

深い思索の中にいた私を、ミールの声が呼び覚ます。振り向いた先には、歳若い5人の騎士がいた。

1人が一步前に入る。

「御館様の命により貴方の部下となります。ミゲルです。後の4人は左から、アレス、トロア、ヘイム、リオです。全員、今年の春に騎士となりました。」

ミゲルが名を告げるとそれぞれが恭しく右手を胸に礼をとる。

「ロディだ。早速だがしてもらいたいことがある。詳細はその後だ。」

「先ず、このベッドを片付けて、この部屋に長椅子とテーブルを持ち込んで貰いたい。」

「話はそれからだ。」

了解！と返事を返すと、5人はベッドを持ち出した。

やがて、彼らが戻ると、窓際に私の席を設け、小さなテーブルを挟んで両側に長椅子を置く。

大型テーブルは部屋の真ん中だ。

私は席に着くと、5人に着座するよう促した。

「先ず、お前達に言っておく。私は、この姿が本体だ。この甲冑のように見える外部装甲板下には生身の肉体は無い。」

さほど、5人は驚いた様子がない。

あらかじめナナイが釘を指していたようだ。

「次に、お前達の任務だ。これから始まるであろう反乱軍との戦闘は兵力で圧倒的に我々が不利である。」

皆が頷く。

「よって、これからの戦いは今までの常識が通用しない、言わば奇略をもって行うことになる。」

「そこで、お前達の仕事が重要になる。」

5人が聞き漏らすまいと身を寄せる。

「その前にいくつか質問したい。」

「1つ目の質問だ。遠くの敵を倒すにはどうしたらいい？」

会議

私は離れた場所への攻撃方法を問う。

「規模と状況にも異なりますが・・・弓矢若しくは攻撃魔法、あるいは罠というのも考えられますが・・・」

私の意図が読みづらいのか、ミゲルがとつとつと答える。

「なるほど・・・では、弓について説明せよ。アレス、おまえだ！」

「弓・・・は、長弓と短弓に区分されます。長弓は主に防衛用、短弓は攻撃用に用いられる事が多いと・・・ああ、それに、長、短どちらにも属さない、言わば中間の弓として狩猟用の弓があります。」

アレスは、弓の性能について話し始める。

それによると、射程は、長弓で約300歩程度、魔法よりは速射性が高いが、金属プレートを多用した鎧には効果が薄い。

魔法で強化された鎧に対しても、強化は魔法攻撃に限定されることからそれなりに有効性を持つ。

要するに矢の衝撃力の大小が戦を行う上で重要な要素となるということか。

「お前達の中の3人には、兵を率いて貰う。また、1人には兵は与えるが全く異なる戦をして貰う。最後の1人には、私の副官として主に連絡と意見の調整をして貰う。・・・さて、名乗り出る者はいるか？」

「名乗りをあげれば、全て兵を率いる者となりましょう。・・・それで、推薦したいと思うのですがよろしいですか？」

「言ってみる。」

私の同意を得たミゲルが続ける。

「兵を率いる者は、アレス、トロア、ヘイムの3人が良いかと思っています。彼らは仲間内の面倒もよく見ますし、武技も優れています。」

また、彼らの父、兄はシャープネス軍の千人隊長です。彼らが部下を持った家族も喜ぶでしょう。」

「次に全く異なる戦の方ですが・・リオが適任でしょう。彼は騎士になりましたが、親が獵師ということもあって、我々の意表をつく戦いをするができます。演習ではずいぶん梃子摺りました。」

「最後に、連絡係ですが・・私ではどうでしょうか。父が商人をしております関係上、近隣諸国の情勢は这其中では一番詳しいと思います。」

わたしは、5人を今一度見る。

「他に、意見はあるか。今のミゲルの案でよいのか？」

「・・・問題ありません!」

意見の一致を見た。

「では、次に入る。これからの戦だが、圧倒的に戦力が不足している。よって、民兵を組織する。民兵の徴募及び訓練は3人仕事だ。約3千人程度を考えている。」

「次に、民兵とは別の兵を組織したい。運のいいことに、私の意図にあたり才がいる。彼には獵兵を組織して貰う。兵力は約30人程度。」

「だが、徴募を開始するには、軍資金がいる。その確保は私がしよう。」

「それでは、ここで一旦解散する。ミゲルの連絡を待て。」

4人が部屋を出て行く。

「一つ、よろしいですか？」

「なんだ。」

「先ほど民兵を使うと言いましたが、傭兵の間違いではないですよね？」

「民兵だ。傭兵は上手く使えば頼もしいが、この兵力差では、足元を見られるのが落ちだ。それに、何時寝返られるとも限らない。」

多分、反乱軍では傭兵の売り込みが盛んだと思うがな。」

「では、本当の市民いや農民兵ということですか。」

「そうだ、そのための手は打ってある。お前にも協力して貰うぞ。」

そこに、ミールがやってきた。

「ロディ様。姫様からの連絡です。会議の準備が出来たそうです。是非とも御出席ください。とのことですよ。」

「わかった。こちらお願いの筋があるところだ。案内を頼む。」

「場所はどちらに？」

「御館様の執務室になります。」

「私が案内します。」

ミゲルは立ち上がるとドアに歩き、私を待つ。

「では、行こうか！」

私は、立ち上がるとミゲルの後続く。

館の3階は男爵のプライベートルームらしい。3階の恥にある執務室のドアを開けると大勢の者達が大テーブルを前に着座していた。どうぞこちらに。と案内された席は姫の隣であり、男爵は姫の右に座している。

「そろったようですね。それでは、今後の対応についての会議を開きます。」

私が、姫の左に座したことを訝しんだものが多いだろう。数人のものがこちらを睨んでいる。

「その前に・・・その方、姫君を前に、兜を脱ぐ礼も忘れておるか！事と次第においてはこの場で切って捨てるぞ！」

私を睨んでいた者の中から一人が私を指差し立ち上がる。

早くも剣の柄に手を掛けているが・・・さて、どうしたものか。

「私が許しておるのです。それでもですか？」

姫が私を庇うが、この場合逆効果だ。ますます激昂している。

「この場にいる者達に先ず言っておく。私はこの国の外から来た。」

よって、この国の礼儀についてはいささか非礼となる行為が有るかも知れん。それについては他意はないと言っておく。次に、この体だが・私そのものだ。決してプレート鎧をつけているわけではない。だから、私に兜を脱げと言った者に言うておく。」

「貴様の顔の皮を剥げ！さすれば私も貴様が兜と言ったこれを外そう。」

私は、フェイスプレートに似た装甲板を指でこつこつと叩いて言った。

「ふざけるな！！」

彼は立ち上がりざま長剣を引き抜き、ひとつ跳びで私に迫り長剣を斜に切り下ろす。

ガシ！と音がした。

振り下ろされた長剣が私の右手に掴まれているのを、呆然とした目で皆は見ていた。

そのまま右手に力を入れる。

バキッ！と音がして長剣が折れる。

「相手にならん。このプレートは私の顔だと言っている。なぜ、理解しないのだ？」

「・・・わかった。しかし、我らに仇なすときは、」

「判っている。私は協力者だ。姫に仇なすことはない。」

「皆も判って欲しい。彼は味方だ。敵ではない。」

「私を追手の手から救ってくれました。それに、狼の巣穴では300の魔道師を一瞬で倒しています。それほどの戦士なのです。」

男爵の言葉に姫が続ける。

「では、改めて会議を開く。誰か意見はあるか？」

「そもそも、戦力差はどの様にしても変わるものではない。ここは、硬く街道を守ってシャープネスを姫の所領として反乱軍に認めさせるが上策と考えるが・・・」

「しかし、それでは帝国の名が泣く・・・二十分の一以下の領土に

なるのだぞ！」

「それでは、援軍の要請をしては？サザーランドは相手方に組みしたが・・・そうだ！法王に直訴してはどうだ。」

「法王は姫を巫女として所望したことがある。直訴は通るであろうが、その後は・・・」

「それなら・・・」

「しかし、それでは・・・」

「・・・」

会議は進まぬ。やはり、戦力差はどうしようもないことなのか。

「よいか！」

私の言葉に全員が私を凝視する。よそ者が・・・という蔑みはなさそうだ。

「私は、この反乱を鎮める作がある。しかも、それは、恐れ多い事に先帝の遺言に近いものだ。」

テーブルの者達が黙って聞いている。

「シャープネスの兵力は約5千、然るに相手は10万さらに増えている。これを打ち破るには手順を必要とする。一つの策ではだめだ。」

「先ず、兵力を高める。これには民兵を募集する。いずれ、反乱軍の略奪が見えている。参加者は多いだろう。私は3千人を目標としたい。まあ、多いに越したことはないがな。」

「次に、兵器だ。魔法も戦力としては重要だが、魔道師の絶対数が少ない以上、有効な攻撃手段にならないだろう。そこで、民兵にも簡単に相手を倒せる武器を開発する。先ほど、都市の工房主と相談したところそれほど手数も掛からずに出来そうだ。」

「最後に、これは私が協力する条件でもあるのだが・・・帝国を解体し、民衆の国を作る。・・・以上だ。」

部屋がシンと静まった。

「ちよつと待て・・・先の話は理解できる・・・しかし、帝国の解体とは・・・姫様はどうなるのだ！」

「民兵等使えるものか！傭兵なら未だしも・・・しかし、傭兵では何時首をかけられるかわからん・・・」

「さて、民衆等に政治が出来るものか。いつ反乱が起きるか判らんぞ。」

部屋がまた騒がしくなった。

「皆さん・・・」

姫の声は小さかったが、その言葉で再び部屋が静まった。

「帝国の命数は過ぎていきます。どの様に皇帝が望もうにも・・・老いた帝国には老獪な貴族がつきもの。国の行く末を貴族の利害が左右する事態を生むのです。なら、どうすれば、簡単です。常に新しい血で国を運営する。これが民衆に委ねることと可能となるでしょう。しかし、直ぐにそうなるとは思えません。ある程度は私達がそのやり方を教えていくことが必要です。」

「それでは、姫様の立場が・・・」

「私は、帝国纏めるための飾りですね。一族がその立場でいる限り帝国は永続するでしょう。」

「良いのですか・・・華やかな宮廷生活は無くなるのですぞ！」

「あれは、貴族の見栄です。必要有りません。」

「とりあえず、今日はここまでとする。皆も明日の夜まで考えてくれ。」

皆が席を立つ。

偉い事になったと呟くもの。静かに部屋を出るもの。数人と密談するもの・・・これから別室で議論でもするのか。ご苦労なことだ。私もミゲルを連れて部屋を出ようとしたところ、男爵に呼び止められた。

「明日、墓所に行く。付いてきてくれ。」

姫が頷く。

私は了承した。

墓所

朝だ。湖は銀色の小波に覆われ、その上を取りの群れが飛び交っている。

そんな、まだ明やらぬ薄明の中、館の外で出立の準備が進んでいるようだ。

馬の嘶き、馬車の金具の立てる音、鎧の軋む音が朝の静寂の中、嫌にも耳に響く。

そんな中、不意に部屋のドアを叩く音がした。

「ロディ様」

「入れ！」

ドアを開け、入ってきたのはミゲルだ。

上半身に金属甲冑を着けている。背中と腕は皮製だが所々金属板で補強している。腰に長剣を下げ、羽飾りの付いた兜を小脇に抱えている姿はさぞかし画家の良い題材になるだろう。

「墓所への出立準備が整っております。よろしければ、ご同行を！」

私は窓際の席を立つと、ミゲルと共に館の広場に向かった。

広場に出ると、十数名の者達が出発を待っていた。

その中の、ナナイに声を掛ける。

「遅れたか？」

「いや、姫様が最後になります。」

部下への指示を下しながら、私の答える。

部下の配置に満足したのか、改めて私を見る。

「朝早く申し訳有りません。墓所への往復を考えると、このような時間となりますので・・・ところで、ロディ様は乗馬の経験はございますか？」

「無い。馬を見るのも、この国に来てからだ。」

「それでは、馬車に御乗車下さい。・・・ミゲル！ロディ殿の乗馬訓練を後ほど頼むぞ。それと、馬車の右側を頼む。」

「心得ました。」

ミゲルは館の裏側に駆けて行く。

そんな中、館より、男爵に伴われた姫が姿を現した。侍女が2人後ろに続く。

男爵は武装しておらず、姫は華やかなドレス姿・・・本来の姫の姿だ。

男爵が手を取り姫を馬車に乗せると、侍女が後に続く、最後に私が乗ると、ナナイが出立の合図をした。

馬車は昨日よりも大きく内装は豪華であった。男6人が優に乗れる。

「朝早くから、御手数をお掛けします。」

「いや、かまわない。」

姫の労いに短く答える。

「しかし、乗馬の経験が無いとは以外でしたな。」

「私の国では、別の手段で移動するのだ。機械仕掛けの馬といったらよいか・・・」

「ここで、覚えるのも武術の一つと割り切りなさい。一頭進呈しますよ。」

館から数時間・・・3人の話が続く。

馬車は湖の縁を進んでいる。起伏の無い石畳の道をひたすら進む。

「良い田園になりそうな場所だが、人家も見当たらないな。」

「この道は墓所に至る道であれば、畏れ多いと人は近づきませぬ。たまに獵師共が山の帰りに利用する程度です。」

「ほら、見えてきましたよ。あれが墓所の入口です。」

男爵が指差した先には、石像が2体見える。大型の獣のようだが、
・
・

「入口を守る2体の石像は、翼ある狼・・・初代皇帝陛下に従った

神獣とされています。」

先に進んだところで休憩を取る。

湖に張り出したテラス状の休息所は、遠距離の墓所への参拝には必要なものなのだろう。

ここでは、先ほどの神像が良く見える。

比較となるものが無いため大きさを実感することは出来ないが、巨大な建造物であることは伺い知ることが出来る。

しばらくの休息の後、ナナイが出発を合図する。

再び、岸边沿いの石畳を進む。

湖にせり出した巨石を廻ると、それが目の前に姿を現した。

巨大な石像である。岩山を削りだしたと思える石像は、優に私の身長の10倍以上の高さであり、背中の翼を折りたたんだ状態で来訪者に目を向けている。

背後は巨大な鑿で岩山を穿ったように、絶壁の岩山を長方形に繰り抜いている。

神像からは、石段が続く、凡そ100mはあるだろうか。

石段の先に三角形の入口が見える。墓所だ・・・

エーテル観測器官が凄まじいエーテルの乱流を警告している。

砦とは次元の違う結界に包まれているようだ。

「ここからは、お歩き下さい。」

男爵の言葉に我々は馬車を降りた。ナナイ達警備の者達も馬を降りる。

ナナイが数名に馬の世話を命じると、我々は墓所への緩やかな傾斜を持つ石段を進んで行った。

垂直にそびえる岩盤の下部に一边が10mを超えるであろう形で、

正三角形に奥へと通路が続いてる。

通路は、我々が歩む場所を中心に20mの半径で、透明な光が壁から溢れている。

エーテル乱流は奥から続いているが、実体験上はそよ風すら感じられない。あくまで、観測器官の示すものでしかない。

数十mほど進むと、正三角形の断面をした通路が、正方形に変化した。

両側には岩を彫りだした列柱が連なり、列柱の間には、石像が立っている。武人像だ。

「初代皇帝に付き従った騎士の像と伝えられています。」

私が石像を注視しているのに気付き、男爵が説明をしてくれた。さらに奥に進む。

そこは、直径50m程の球状天蓋を持つ空間であった。

天蓋は宝石により装飾され、プラネタリウムのように擬似的な星空を作っている。

中央には、3段の石台が削りだされ、中央に一辺が5m程の石造筐体が鎮座する。

筐体の4方向には女神と思われる石像が、優しい微笑みを筐体に向けていた。

数m程の距離を置いて我々は立ち止まりしばし、その創玄な光景をみていた。

姫が筐体に歩み寄る。

筐体に施された細密な彫刻の一角に手を差しのべると、筐体が真ん中より2つに分離する。

そして、階段が現れた。

姫は階段を下りて行く。我々も後に続いて下りて行く。

降りた先は楕円形をした通路であつた。床の幅は15m程度、高さは8m程である。

先に進んで行くと、両側に石の筐体が整然と並んでいる。

「歴代の皇帝一族を納めた石棺です。」

男爵が小さく呟く。

ゆつくりとした足取りではあるが、やがて最深部に着いた様だ。そこは、階上のホールと同じように星空の天蓋が小さく造られている。

その真下に一切の装飾を省いた石棺が鎮座している。その両隣に1個つつ小さな石棺、細密模様に掘り込まれた石棺だ。

石棺を取巻くように3対の松明が不可思議な炎を燃やして空間を照らしている。

さらに、左右の壁には、副葬品と思しき大小の金属製の箱がぎつしりと積まれていた。

「初代皇帝の石棺です。両隣は、夫人と統一戦争で戦士したお子様のものです。」

我々の対面には、1対の石像が鎮座している。墓所の入口にあつた石造の小型版だ。

姫はその石像に近づくと、短剣を取出した。

短剣を抜き、威嚇しているように口を開けた狼像の口に差し込む・

・

ズズズー・・・と音を立て正面の壁が開く。

建国以来開いた事の無い部屋が今姿を現す。

深遠に待つもの

姫の持つ鍵により、玄室の正面の壁が開く。

そこには、一辺が3 m程の長方形の入口が現れた。

内部は漆黒の闇である。

姫がおもむろに松明を手にとると闇に足を踏み出す。

私は、視覚を（通常）から（暗視）に切り替えると姫を追った。

男爵達が松明を手の後を着いて来る。

姫の持つ明かりが壁に揺らめいて反射する。その反射に違和感を持った私は、視覚の解像度を上げ解析ルーチンを立ち上げる。

壁の材質が傾斜している。

入口は確かに岩石であった。しかし、この場所では、岩石成分と未知の合金成分が均一に混合されている。その混合比率は進むに従って合金成分が多数を占めている。

私のセラミック合金と同一の手法によって製作されたとしか考えられないが・・・誰が、どうやって・・・

そんな、私の思惑を他所に、我々は先へと進んで行く。

何時しか、周囲の壁は全て未知の合金に変わっている。

さらに進むと、周囲の壁が無くなった。通路の先にテラスが見える。

テラスは直径10 m程の円形であり、周囲には低い縁石で縁取られている。

姫の持つ松明で、おぼろげながら周囲を見ることが出来た。此処は直径50 m程の球形の空間だ。我々はその中心部にいる。テラスの下は液体が満たされており、テラスの下数mにその水面が静かに横たわっている。

「ここが、終点でございますかな。」

男爵の言葉に姫が頷く。

彼としては、いささか拍子抜けなのかも知れない。

初代皇帝亡き後、封印された秘密の部屋である。どんな金銀財宝があるかと、楽しみにしていたのかも知れない。

不意に、暗闇に光が溢れた。

水面の遥か下から発光体が浮かんでくる。

ザッバァーン・・・と水面から勢いよく飛び出した後、我々の立つテラスの前に静止した。

直径は3m程あるだろうか、前に言語変換を可能とした結晶体に似ていなくも無いが、この、結晶体は内部の結晶構造を複雑に変化させながらも、その透明性と発光性を保っておる。

我々のいる球体内部にも変化は生じた。

球体内壁に無数に埋め込まれた結晶体が、目の前の結晶体の発光に触発されたのか、複雑な発光を繰り返している。まるで光がうねっているようだ。

また、エーテル観測器官はエーテルの脈動のピークに追従出来なくなり、観測続行不可の警報を発している。

（よく参った。開祖に繋がる縁者よ。）

結晶体より強い思念が伝わる。

（帝国滅亡の時と思い、墓所の封印を解きました。）

姫が結晶体に思念を送る。

（して、滅亡の原因は何か？侵略か・・・飢饉か？それとも天変地異による大規模な近く変動か？）

（いえ・・・内乱でございます。）

（その原因は？）

（皇帝の意思遂行を武力により防止したためによるものと考えます。）

（皇帝の意思とは？）

（帝国の停滞を防止するための活力の向上・・・奴隷制度の廃止と身分制度の曖昧化。）

（・・・）

結晶体の内部で激しく結晶構造が変化し、それに呼応して周囲の結晶体の発光が激しく明暗を繰り返す。

あまりの照度の変化に気分が悪くなったのか男爵始め数人の騎士が床に蹲る。

（・・・私は憂慮していた。何れその時が来ると・・・）

（貴方様は、何方ですか？）

（我は、初代皇帝・・・その意思。残留思念の集合体である。）
オオ！！、全員が驚愕の声を上げる。

姫の父親が第26代皇帝だ。一代の治世を20年として数百年・・・思念体だとしても良く今まで思念を継続出来たものだ。

（・・・発展、停滞、そして退廃・・・過去の王国は皆、押し並べてこの経過を辿る。我が帝国においても然り、帝国創設の理念を踏襲出来たのは何代までか・・・）

（それを継続した発展とすることはできないのでしょうか。）

（出来ぬ・・・人は常に上を望む。一つ満足すれば新たな欲望を持つ。人の持つ性であるならば・・・）

（では帝国はこのまま滅ぶのでしょうか？）

（それも、定めの一つ。・・・しかし、別の方策も在るにはある。）
（それは・・・）

（全く別の統治方式を造りだす。与えられるのではなく、自ら参加するものを・・・さすれば、人は己の欲望を満たすため、努力するであろう。そして発展は止ることは無い。）

（しかし、その方法は帝国を否定するものでもある。）

（私は、象徴としての帝国を残し、統治を民に委ねることを考えております。この方法は貴方様の考えにより近いように思えるのですが・・・）

（面白い方法を考え付いたものだ・・・ふむ、面白い。）

（ところで、その考えは自らのものか？）

（いえ、異界よりの来訪者。ロディより教授を受けしものです。）

突然、私は強力な思考のビームを受けた。エーテル観測器官が悲鳴を上げる。

ビームは私の全身を走査した後、その出力を弱め高速で話しかける。

（この速度の思考の遣り取りは人間では感知不可能。存分に意思を交換できる。）

（お前は何者だ？）

（連邦軍第一重降下猟兵師団所属、特殊戦術中隊隊長 R D Y - 1732だ。星間戦争のある作戦中に事故によりこの惑星に漂着した。）

（連邦軍とは？）

結晶体からの質問は続く。

私は可能な限り周辺の状況までも含めて答えた。

その質問によって、判ったことが一つ。この世界は思念の力によりエーテル制御を可能としたことにより、科学技術の発展が停止しているようだ。

しかし、その技術は決して自然科学に劣っているわけではない。

現に、ほぼ私と同様に思考する、推論すら可能な結晶体を作り上げているのだから。

（なるほど、お前の考え方は理解した。個人の力量ではなく、多数の想念を取りまとめて、方向性を持たせるのか。我はその発想までたどり着けなんだ。）

（しかし、全てを民衆に委ねるのは危険ではあるまいか？お前の世界でもその問題はあったはず。）

（一度に全ては無理と思う。私は、民衆の教育を含めて50年程

度の期間でそれを成そうと考えている。」

（そうだった・・・お前にこの世界の人間の寿命を当てはめても無理がある。）

（それで、話を元に戻すが、協力を願うことができるか？）

（協力しよう・・・民衆の発展は我が願いであった。それと、お前の体の構造、特に思考部位は我に極めて近い・・・1ヵ月後に姫を再度来訪させるがよい。さらに協力が容易となるはず。）

長時間にわたる話し合いのようであったが、人間には数秒程度に感じられたに違いない。

それほど、我々の思考速度は速いのだ。

「お話は終わりましたか？」

姫に尋ねられた私は軽く頷いた。

（皇帝陛下・・・お願いがあります。）

（申してみよ。）

（この墓所の財宝を・・・軍資金として私に賜るわけにいかないでしょうか？）

（好きに使うが良い。私の棺に金塊がある。それを使い、足りないければ副葬品を使いなさい。）

（必ずや、父の理想を実現して見せます。）

（その手段は、その者と十分に話し合った。出来ると信じる。それと、一月後に再度尋ねてまいれ。良いな。）

（必ずや・・・）

姫の思念を確認したのか、結晶体は急速に発光を減じると同時に、水中に消えていった。

球体内面の結晶体も何時しか師の光を減じ、床に転がっていた松明の結晶体の炎のみがこの場所の照明となっている。

われわれは、この場を後にした。

玄室に戻ると、初代皇帝の棺が開いている。

中には、大量の金塊が入っていた。

壁際の副葬品を納めた箱を1つ空にし、その中に入るだけの金塊を収める。その後は、私が箱を担いで運ぶだけだ。

箱を持ち上げる私を見て男爵達が驚くが、私の世界の魔術とだけ説明すると納得したようだ。

姫が石像の口から短剣を抜き取ると、壁は閉じ、秘密はまた隠された。

帰りの馬車が問題だった。

馬車の積載重量を越える可能性があったのだ。

男爵は、護衛の騎士に金塊を分散して持たせることで対応したが、このため、行軍速度が大幅に低下した。

館に戻ったのは深夜だった。

計画（１）

人の手がまだ入らぬ自然は素晴らしい。

彼方の山々と裾野に広がる湖は、我が故郷の惑星にも在ったのだろ
うが、開発の波に飲まれてしまい、私は映像の中で知るばかりで
ある。

湖から立ち上る朝霧は風景を幽玄の世界に誘い、数羽の水鳥をま
るで巫女の神楽のように演出している。

窓際の椅子に座り、しばし外を眺めているとドアを叩く音がする。
「おはようございます。ロディ様。お召換えをご用意致しまし
た。」

ミールが入ってきた。

私に着衣は不必要と断るつもりだったが、彼女の用意したものは
マントであった。折りたたんだマントの上には、ベルトと長剣が乗
っている。

「お立ちになって下さい。」

席を立ちミールに歩み寄る。

着装しているマントを取り、手際よくマントを交換し、ベルトを
付け長剣を佩かせてくれた。

「不躰な質問ではございますが・・・ロディ様は紋章をお持ちでご
ざいますか？」

紋章・・・確か家族を中心とした特定の集団のマークのような物で
あったと思う。

私の家紋は、惑星の竜の島に伝わるものだと言ったが・・・。

「在るぞ。このような紋章だ。」

ミールの小さな机にある筆記用具で単純に図案化された紋章を書
き上げた。

「花が紋章なんて・・・素晴らしいですね。この国の紋章は獣や

神獣が殆どですのに。」

「しかし、何故に紋章等を聞く？」

「マントに刺繍するためですね。鎧を着ると皆同じように見えま
すので、マントに紋章を描いています。」

そう言つて、マントをたたみ部屋を出て行つた。

帯剣した姿を窓に映すと、体の装甲板が鎧に似ているためか、こ
の国の騎士とさほど相違ない。今までも、武装はしていたが、武装
を見せるところも印象が異なるものなのか。

ドアを叩く音がする。振り返ると、ミゲルが入口で礼を行い、入
つてきた。

「立派な姿です。帯剣すると印象が変わりますね。」

「朝食は済んだのか？」

「はい。姫様がお待ちです。」

ミゲルに案内されたのは男爵の私室だ。

姫とナナイ、男爵と仕官数名が部屋にいた。それに私とミゲルが
加わる。

「さて、揃いましたね。これからのことを相談しましょう。」

「私は、鉾山経営なら出来ますが、戦はしたことも有りません。」

ナナイも近衛が任務、軍隊と軍隊の戦とは違います。・・・ロディ殿
良案が有りますかな？」

「私は、2千人程度の戦術なら立案、遂行までこなせるが、1万
人以上の集団戦が伴う戦略は課題が残る。ところで、帝国の地図は
お持ちかな？」

執事が、部屋の書棚から巻物を持つてくる。

「これが、帝国の地図になります。」

私は地図を睨む。

「申し訳ないが、私は文字を読めん。説明願えるか？」

言葉は例の結晶体により可能となつたが、文字までは判らん。

ナナイが私の傍に来て地図に身を乗り出す。

「私が、概略をお話します。」

「この太い枠で囲った部分が帝国の領土となります。帝国領は13の貴族領と3つの直轄領により構成されており、この薄い色分けがその区分です。シャープネス領はここですね。」

「帝国の北にはトルタナ山脈がそびえ、サザーランド王国との境界となっております。」

「西はネイダー王国、東は黒い森の向こうにある草原地帯をはさんでタルーン王国があり、南側は海洋です。海の向こうには別の国があると言われていますが定かではありません。」

「なるほど・・・ところで、男爵殿。我々の見方となりそうな貴族は無いのであろうか？」

「・・・一つ。シャープネスの西、アルクテュー男爵は私とは旧知の間柄、私の妻は彼の姉でございます。」

「この、青い線は河でよいのか。それと、これは橋か？」

「そうです。河はトルタナ山脈からのレニ河とバイナル湖からのバイナー河の2つがあります。どちらも川幅は広く水深もかなりあります。」

「渡河は船がいるか・・・ならば、今後詳細に作戦を立てるとして、シャープネスの防備をこの橋で取ることが最善であろう。」

男爵は頷いた。

「実は、ナナイと事前に打ち合わせた策が、その対応です。物量差が大きい今ではやはりその策となりますか・・・。」

「先ずは、守りを固めることに専念すべきかと・・・。」

「サデイン、今の話を補足することはないか？」

「ありません。」

男爵の問いかけに若い仕官が答えた。

「では早速兵3千を率いて、マナル市の防備に当たれ。橋は商隊を除き通行止めにせよ。」

若い士官は急ぎ部屋を出る。

「南からの進入はこの橋で防げると思います。・・・あくまでも時間稼ぎにしかありませんが・・・」

「やはり、戦は兵力ですか・・・傭兵を雇うこと、今一度再考願えませんか？」

男爵に仕官の一人が具申する。

「兵が少ないから、傭兵を雇えんのだ。・・・しかし、この件は確かロディ殿に腹案があると聞いておりますが。」

「民兵を組織する。組織するに当たって軍資金を用立ててもらいたいのだが。」

「それと、この地図をしばらく貸して頂きたい。」

「お安い御用です。」

会議を終え部屋に戻ると、婦人と年若い男子が長椅子で私を待っていた。

私の帰室に慌てて席を立った。

「將軍殿の帰室を着座してお迎えするなど、礼を欠いた事お詫び申し上げます。」

「それは、いい。・・・ところで、来室の目的は何だ？」

「男爵様より、火急の用事が將軍殿よりあるとのこと。私は、絵師でございます。」

「ああーそれなら・・・それと敬称はいらん。」

私は、改めて絵師に着座させると、依頼の内容を話す。

驚いたことに、絵師は夫人の方で男はその弟子とのこと。

技能に係ることに關しては男女同権なのか。と話を進めていくと、基本的にこの世界の男女間の格差が無いことを知らされた。

やり手の商人が女性だったり、大軍を率いる將軍が女性であったりすることはよくある話らしい。

ならば、身分制度の解消もそれを望むものを排除すれば比較的容易となるはずである。

「それで、私はどんな絵を描いたらよいのでしょうか？」

「製作図を描いて欲しい。色を塗る必要は無い。私が説明する内容を絵で表現して欲しいのだ。それと、もう一つ、この地図を小さくしたものを描いて欲しい。」

「地図は彼に任せましょう。セイムお願いできますか？」

「かしこまりました。」

私は持ち帰った地図を、ある程度枚数がほしい事を付け加えて彼に渡した。

地図を受け取ると部屋を出て行く。

「遠方から来られたのでは？」

「いいえ。婦人の肖像画を描くために、この館に滞在しています。」

「ところで、私が描く物を説明頂けますか？」

私は、膝の装甲板を開くと、プラズマ加速銃を取り出しテーブルの上に置く。

「これは？」

「投射武器の一つだ。今から説明する内容の参考にしたい。」

「まず、大きさだ。これは片手で操作するが、この部分を長くしたいので、扱うときは両手が必要になる。」

「この部分は握り（グリップ）だ。片手操作上このような形態だが、両手操作の場合は肩で支えられるようにしたい。」

「これは、引き金だ。この突起部分を指で手前に引くことにより、簡単な機械仕掛けが作動するようにしたい。」

私は、原始的なライフル銃の説明を30分程度行った。

彼女は、用意した紙に黒煙の棒で、ラフなスケッチを描き出す。

「このような、物になりますか・・・」

彼女は、見事にライフル銃を描きだした。

「どのように扱うかは判りませんが、將軍の説明内容から想像しますとこのようになります。」

「十分だ。しかし、この構図ではなく、4面・正面、側面、裏面、そして上面で描いて欲しい。この構図から想定できるものでよい。」

「判りました。少し時間をくださいませ。」

彼女は図面を持ち部屋を出た。多分自室で作成するのだろう。

続けて部屋に来たのはミゲルであった。

彼に、細工師の紹介とリオの呼出しを依頼する。

「忙しくなるぞ。・・・ところで、商人の出だったな。親父殿を呼び出せるか？」

「はい。今夜でよければ手配します。」

「頼む。それと、早く戻れ。」

「はい。急ぎ片付けます。」

彼とすれ違いにミールが帰ってきた。

私の座るテーブルに小さな布包みを置く。

「父に託りました。帝国の通貨です。」

金貨、銀貨、銅貨の3種類がある。銅貨1枚が1ドラクム、銅貨100枚で銀貨1枚、銀貨100枚が金貨1枚となっている。

金貨の成分比率は私の分析機能では60%程度である。

「それと、姫様と奥方様の好きな花ですが・・・」

姫は山百合^{シエルベール}、奥方は薔薇^{カミラ}との事だ。ミールにも聞いてみると、堇^{リオン}と答える。

何のためか知りたがっていたが・・・その内吃驚するだろう。

計画（２）

ミゲルがリオと共に部屋に帰ってきた。

「まあ、座れ。」

２人は長椅子に座ると私を見る。

「リオに頼みたい。親父殿の伝手を頼んで程獵師の取り纏めを５人程集めて欲しい。」

「理由を聞いてもよろしいでしょうか？」

「特殊な軍隊を作りたい。普通の軍隊であれば不可能な要求に対処するためのものだ。それには、剣や隊列に重きを置く軍隊から兵を引き抜くのではなく、獣を追って野山を駆ける者が相応しい。」

「主な任務は？」

「奇襲と謀略だ。偵察もある。・・・軍隊よりは、獣を追う者が上手く出来ると思わないか？」

「足跡を追ひ、先回りをし、息を凝らして来るのを待つ・・・確かに。」

「何時呼べば良いでしょうか。それと今の話は彼らにしても宜しいでしょうか。」

「なるべく早くして欲しい。それと、ある程度の話は彼らにしておいたほうが良いだろう。」

リオは私の話を聞くなり部屋を飛び出した。

「親父と言えば、直ぐにでも尋ねることが出来るとのことですからどうでしょうか。」

待て・・・ミゲルに依頼したのはそれほど前ではない。しかし、親父殿と連絡できたということは・・・

「親父殿との連絡は、長距離を隔てた連絡手段があるということか？」

「はい。魔道石を介した通話が可能です。」

「では、直ぐにでも呼んでもらいたい。」

ミゲルが部屋を出る。

シャープネスにて防備を固めるにしても、この領地は鉱業が主体だ。武器は何とかなるにしても、食料は直ぐ不足するだろう。

そのためにも商人のネットワークを早く把握することは極めて重要となるはず。

それに、民兵の募集も商人の協力が是非とも必要だ。

ミゲルが親父殿を伴って部屋を訪れたのは昼時を過ぎた頃だった。「お初にお目にかかります。ミゲルを副官に抜擢して頂きまことにありがたいことと思っております。」

小太りの、いかにも商人という体形であった。

しかし、その眼光は鋭く、私の一挙手一動を見守っている。

「私のことは、ロディでよい。1つ相談に乗ってもらえまいか。」

「それは、内容にもよりますが・・・」

私は、テーブルの上に金貨を1つ置いた。

彼は、怪訝そうにそれを見つめる。

「この金貨は4対6で金が使われている。1万ドラクムとして使われる。そこで質問だ。この価値は他の国でも同じ価値を持つか？」彼はしばらく考え込む。私の質問の意味を考えているのだろうか。「必ずしも・・・とお答えいたします。取引の原則は等価が正しいのです。しかし常に等価交換を品物で行うことは出来ない、よって等価を金貨で代替することが国を越えた商いの基本となります。」

「各国で、金貨、銀貨を鑄造しますが・・・その割合が一律でないため、両替所を使いその国の硬貨と交換する場合も多いのです。」

「各国の金の量は同じか？」

「いいえ、ばらばらです。でも、帝国の通貨に使用される金貨が一番金の量が多いため、帝国金貨であればほぼ世界中に通用します。」

「私は少し間を持った。」

「ここからは、この場での話しだ。よいな。」

私の念押しに彼は頷く。

「私は・・・今の皇帝金貨の比率を変えた金貨で商人と取引がしたい。」

「皇帝金貨と同じ大きさで、2対8の金貨を造る。但し、価値は同じ1万ドラクムだ。これを私が世に出した場合、どのような事態が起こる？」

彼は吃驚して長いすから立ち上がりそうになった。

顔に滲む汗を拭き取りながら話を続ける。

「とんでもない事態になります。皇帝金貨を使うものは無くなるでしょう。誰もが新しい金貨を欲しがります。他国も同様でしょう。」

「では、親父殿と取引がしたい。私が欲しいものは、硫黄、炭、硝石だ。量は最低でも親父殿5人分の重さが欲しい。鉱山を持っていても、シャープネスではあまり手に入らぬものだ。頼まれてくれるか？」

「そうだ・・・手付け金として、料金の半額を払おう。但し、金塊でだ。残りは新金貨で払う。」

「・・・承りました。それと、私のことはサラディンと御呼びください。確かに御要求のものは他国より購入することになります。よって、1月程の時間をください。それに、前金は必要ありません。但しと言っては何ですが・・・全て新金貨でお払い下さりますようお願いします。」

「了解した。」

これで、1つ片付いた。

私は手を上げてミールに合図すると、ミールは心得たように2人の前にお茶を出す。

「難しい話は以上だ。せつかなので少し世間のことを教えてほしい。」

「どのようなお話でしょうか。」

「例えば話で申し訳ないのだが・・家に男が3人生まれたとする。一人は多分親の後を継ぐのであろうが・・残り2人はどのような職を得るのだ。」

「それは、色々でしような・・多分残りの内一人は町で暮らすでしょう。女3人の家も有るでしょうし、長男が早死にすることもありますから、でも3人目は多くの場合、兵隊や傭兵になると思います。しかし、兵の給与は生かさず、殺さず・・好きでなる者はいないでしょう。」

「それはどのような職業でも同じようにいえるものか？」

「必ずしもそうではありません。開墾地を開く、鉱山で働く、行商もありますな。」

「暮らし向きは良いのであろうか。」

「それは、貴族の所領によってかなりの開きがあります。ここシヤープネスでは鉱山開発が活発で鉱夫の給与も高く安定しており、領主である男爵は他の貴族と異なり華美を嫌いますので税も低く抑えられています。ですから、シヤープネスから他の領内へ移り住む者は殆どおりません。逆に、農業が主な産業で、且つ、其処を治める貴族が華美を好むとなれば住民は税に喘ぐことになります。帝国内にもそのような所領が幾つか有ります。」

「今回の反乱が商人達に及ぼす影響はあるのか。」

「私にはそれほど影響はありません。ここでの生産物と他国の生産物の商いが主ですからね。しかし、帝都の商人はそうは行かない筈です。敵、見方を区別され、敵であれば財産は全て没収でしょう。見方であっても、多大な軍資金を工面されているはずです。」

「私は、サラディン殿に軍資金の工面だけは頼まぬつもりだし、取引は続けたいのでよろしく頼む。」

夜になった。

ミゲルが絵師の夫人を伴って入ってくる。

私は長椅子を勧めると、作業を労った。

「將軍の要望を纏めたものです。どうでしょうか？」

「形は問題ない。問題はここだな。」

図面の一部を指で示す。

「このカラクリに迷っているのだ。」

ライフル銃の最大の問題点は3つある。

1つ目は、バレルにライフルリングを切ることが出来るか否か。

2つ目は、発射機構に何を使うか。火縄、火打石、それともそれ
に変わるもの。

3つ目は、薬莢を作れるか否か。

「悩むことはありません。試行錯誤で行きましょう。鍛冶師達も
無能ではありませんから良い案があるやもしれませんよ。」

それもそうだと納得し、図面に記載されていない各部の寸法を記
入することにした。

私が告げる数値をミゲルが次々に図面に記載する。

さらに、1つ図面につけ加えた。

バレルの手元を閉じること。閉じた上面に小さな穴を開けること。
この2つだ。

計画（3）

次の朝早く婦人が訪れた。

予想より早くライフル銃の作図が一段落したため、次の依頼をすることにした。

婦人は優雅にミールの入れたお茶を飲む。

「絵師と聞いているが、私はどのように貴方を呼べばよろしいかな？」

「これは、大変失礼致しました。私はジュリアンヌと申します。皆様はジュリーと呼ばれます。」

「どこかの貴族の縁戚ということとは？」

「私は絵師です。でも、將軍はその返答では困るようですね。・元はサザーランドの下級貴族です。でもそれは昔のこと・今は絵師として接していただければ結構ですわ。」

政戦に破れ落ち延びた・・多分そんなところだろう。しかし、それでも絵師として生きていけることは素晴らしいと思う。

「実は次の依頼をしたいのだがよろしいか？」

「大丈夫です。」

「依頼は2つある。」

「1つは、この丸の中に花の絵を、単純に且つ誰が見てもその花が同定できる図案を描いて欲しい。」

「花の名は（シェルペール）、（カミラ）と（リオン）の3つだ。」

「この大きさにそれと判る花の図案ですか・・・わかりました。」

「次に、この前のライフル銃の図面だが・・・」

私は図面の元になった最初の絵をテーブルに広げた。

「この部分を全て消し去り、ここに弓を横にした形で描いて欲しい。」

「弓の先端には滑車を取り付ける。両方だ。弓の弦はここから滑車を通り別の滑車を介してここに結ぶ。こちらと同じだ。」

「トリガーはこれにも使用する。簡単な造りだ。トリガーの上部の掛口に弦を引っ掛けるとトリガーは、こちらに倒れる。トリガーを引くと掛口から弦が離れる。」

「そして、ここの部分を勢い良く滑ると・・・ここに置いたボルトが飛び出す。」

ライフル銃との違いを図面上で示しながら説明を行う。

「大体は理解できたと思います。これも同じ様に4面からの図面を描けばよろしいのでしょうか？」

「いや、これはこのような絵でかまわない。工房を持つものならば理解できると思う。」

「では早速に！」

ジュリーが去り、何時ものように窓から湖を眺める。

トントンと軽くドアが叩かれる。

それを見た時、私はミールが熊を連れてきたかと思った。

毛皮を着込み、弓を背負った大柄な姿・・・熊だな。

「リオ様のお父様達をお連れしました。」

私は彼らを長椅子に座らせる。直ぐにミールがお茶を用意する。

「將軍様、リオが面白い話を持ってきたが・・・」

「ロディでいい。親父殿とその仲間にのみ可能と言える。」

「アドモンだ。聞こう。」

「偵察と奇襲に特化した部隊を作りたい。しかも、相手に気取られること無くだ・・・軍の偵察部隊では無理だろう。」

「確かに向いてるかも知れん。しかし、もし気付かれずに近づけても俺達の武器は弓と槍だ。あまり奇襲の役に立つとは思えんのだ・・・」

「確かに・・・。しかし、200歩離れて金属鎧を貫ける武器があればどうだ？」

「魔道具か？それでも飛んでくる方向は判るぞ。しかも、相手が魔法防護の結界を張っていたら、逆に俺達が皆殺しだ。」

「私が準備してやれるのは、弓の一種だ。今もっている弓より数段威力がある。但し、連射は出来ない。」

「見せて貰えるか？」

「今製作中だ。10日程待つて貰いたい。試射に立ち会って貰う。」

「他には？」

「もし、部隊を作ったら、その時の給料はどうなる。兵隊並か？」

「いや、作戦の都度支払う。危険度の度合いによってその都度決めたいが・・・」

「それでいい。では10日後に来ればよいのか。」

「そうしてくれ。」

彼らが立ち去る。

しばらくすると、ミゲルがドワーフを伴って入ってくる。

このドワーフは・・・確か、火薬を依頼した者だ。

「出来たのか？」

「言われたとおりの物を作ったが、元の材料はあまり使わん物で。こんなものかと適当に作ってきたわい。」

そう言つて、2リットル程の壺を取出した。

壺に手を入れて少量つまみ出す。

指で擦り、粉の均一化の程度を試す。少しざらついた。まだ粉体化が足りないか・・・

「試すぞ。リゲル台所に行き、皿を3枚貰つて来い。2度と使えなくなるから欠けたものでもかまわんぞ。それと、紙を数枚に蝋燭を1本だ。」

「あのうゝ紙はここにありますが。」

部屋を駆け出したミゲルを目で追いながら、ミールが数枚の紙を持ってくる。

私は紙に壺から火薬を取り出し紙縊りを3本程作った。

「ミール。台所に行き小さな壺を貰って来い。」

ミールもミゲルを追って台所に駆け出した。

「何をするんじゃ。」

「まあ、見てろ。」

ミゲルとミールが戻った所で、館の広場に出る。

ナナイが向こうで兵の訓練をしているが邪魔にはなるまい。

一応の断りを入れるべく、ミゲルを走らせる。

「何を始めるおつもりですか？」

私の始めることに、ナナイは興味を持ったようだ。訓練を中止して、ミゲルとともにやってきた。

「先ずは、これだ。」

私は広場の敷石に少し欠けた皿を置き、火薬を入れた紙縊りを置く。

次に着火だが・・・

「誰か、種火を持っていないか？この蠟燭に火を付けて欲しいのだが・・・」

私が・・・とミールが指先を蠟燭に近づけると、指の先から小さな火が蠟燭に移る。

魔法か・・・ここは魔法の世界と改めて認識する。

私は、蠟燭を紙縊りの近づけ、着火させると、ジジジ・・・と勢い良く燃える。

もう一本を試すとやはり同じように燃える。この紙縊りの長さでは約5秒程度か・・・

次に皿に一掴みの火薬を入れて、着火する。

ボオ！！と一時に1m程の火柱が上がり、見学の一行は（ホォー！）と関心した声を漏らした。

「さて、次だ。ミゲル。この壺に火薬を入れて最後に紙縫りを上に出す。この位だ。そして良く押し固める。」

「やってみろ！」

ミゲルが私の言葉の通りに小さな壺に火薬を詰めた。

「これで、よろしいでしょうか。」

「いいだろう。良く聞いておけ。この火薬の特徴は、閉じ込めれば閉じ込める程威力が増す。」

「このようにな！」

壺に付けた紙縫りに火を付け、大空高く放り投げた。

1・・・2・・・3・・・4・・・ドガーン！！

壺は、我々の100m程上空で爆発した。

耳を劈く音と爆風でミールは尻餅をついている。ドワーフは口を開けたままだ。

「・・・・・・」

壺の爆発に誰も声が出ない。

「何事だ！」

男爵が取り巻きを率いて広場に出てくる。

急いでナナイが父親の元に走り何事か話を始めた。おそらく、経緯を説明しているのだろう。

「たまげた・・・おぬし、とんでもない物を造らせおって・・・」

「少し注文を付けたいが良いか？」

「なんだ・・・」

「もう少し、粒径を細かくして欲しい。まだ粒が粗い。」

「分かった。」

「あとで、材料を纏めて届ける。再度試作品が出来たら届けてくれ。」

部屋に戻ろうと館に入ると、男爵が待っていた。

「調合した物で、魔法と同じ効果を得るのですか。それで戦力が覆りますか？」

「いや、火薬と言う代物だが、それだけではだめだ。これのある方法で使うことで大幅な戦力が生まれる。もう少し様子を見てくれ。」

「実は、ナナイと話をしながら考えたのですが、あれはあれで使い道があるかと・・騎馬隊に持たせ、敵兵の前で一斉に投げつける・・どうです。効果的でしょう。」

「それは、私も考えている。そのためには、爆発までの時間を制御出来るようにしなければ見方が巻き込まれる可能性が高い。それも含めて待つて欲しい。」

考えることは同じか・・いや、直ぐに応用を考えられるだけの思考能力を持っていると評価すべきか。

シャープネス男爵・・ただの貴族ではなさそうだ。

ライフフル&クロスボー

1週間程、男爵の館で今後必要となる計画を少しずつ実行に移していった。

そう言えば、この世界の暦は私の世界の暦とかなり類似している。1週間は8日。ひと月は4週間。1年は12月である。春分点を基点として1月から12月とし、今は6月の末、秋の初めである。

この暦によると、春分点が毎年少しずつ後ろに移動するため、3年に1度は閏日を入れて補正する。

皇帝の誕生日の翌日となるのが慣わしのようなのだ。

ジュリーの作成した花の図案は見事であった。

極限までデフォルメされているが、部屋に来る者全てがその絵が何かを一目で言い当てている。

ただ、その時の反応は、將軍の家紋としていささか覇気がない。との具申であった。

図案を基に工房へ製作を依頼する。

裏に花、表に数値、容易に複製が出来ないことが条件である。

通貨については、各種の依頼に対する対価を支払うために、金塊を少し現用の通貨に両替した。

殆どの者が支払いを遠慮したが、ミゲルと相談し相場の倍を支払うことにした。今後、全ての支払いはミゲルに託す。

そんなある日、ミゲルが細長い包みを持ったドワーフを伴って部屋に来た。

「依頼の品じゃ。こんな形になったが、いったいどうするのじゃ。」

「

包みの中には、ライフル銃の試作品があった。

但し、バレル端と激発機構は作られておらず、トリガーはダミーになっている。

トリガー近くのバレル上面には、3mm程度の穴が円錐状に開いている。バレル端との距離は約1cm程度・

「試射したいのだが・場所と鎧を準備できるか？」

「場所は館の広場でいいでしょう。しかし、鎧とは？」

「計算では、300歩離れて鎧を打ちぬく。その確認をするためだ。鎧は頑丈な金属鎧がいい。」

「早速、準備いたします。」

ナナイが急いで部屋を出た。

ドワーフは、私が銅貨を指で楕円状に変形させているのを興味深く見ていたが、ミーナの入れたお茶が熱かったのか顔を顰めている。

「しかし、良くこの穴にリングを彫る事が出来たな？」

「造作も無い。ドワーフの技は想像力の具現化だ。形が想像できれば物は出来る。」

「では、衝撃で高熱を出すことは難しいか・・・」

「そうでもない。魔道石の中にはそのような働きをする種類もある。しかし、何に使うのじゃ。」

「この部分のからくりだ。このトリガーを引くことによってバレルの中に高熱を出したい。」

「うゝむう・・・いま一つ想像が出来んのう。」

如何したものかと悩んでいると、準備が整ったことをミゲルが報告してきた。

地図を指し示す短い棒と火薬壺を持つと、ドワーフを伴い広場に出る。

そこには、男爵、姫、ナナイが興味深そうに私を待っていた。

「今度は、どのように我らを驚かせてくれるのですかな？」

「ちよつとした試射だ。まあ、見ていてくれ。」

館を取巻く低い壁際に、汚れた金属鎧が杭で固定されている。ここからの距離は約150m。まあ、試射には手ごろな距離だ。

ライフル銃のバレルに火薬を詰める。次に指示棒で突き固め、最後に銅貨で作った玉を入れて再度、棒で突く。

火薬を入れた長めの紙縫りを取り出し、ライフル銃を構える。

「ミール。この紙縫りの先に火を付けて直ぐに離れる！」

ミールは言われた通り火を付けると急いで後ろに下がる。

「試射する。耳を塞げ！」

私はジジジ・・・と燃える紙縫りをライフル銃上部の穴に差し込んだ。

ドォーン！と言う音が広場に木霊する。

後ろで成り行きを見ていた者達を手招きすると、目標の金属鎧を確認するために歩いていった。

銃弾は見事、鎧を貫通して裏面の石壁にめり込んでいる。

「こんな魔法は見たことがねえぞ！」

ドワーフが貫通した鎧に指を入れて確認している。

「実は、この鎧は魔法防御の結界を十分に施していたんですが・・・いや、申し分けない。」

「謝罪は無用。かえって都合が良い、おかげで十分に実用に耐える事が判った。」

恐縮する男爵に告げる。

「これを、戦場で使用するのですか？」

「まだ、改良する箇所が多いが、何れその時が来る。」

威力に驚いた面々がそれぞれの意見を互いに交わしているようだ。しかし、実用化にはまだ遠い。

ジュリーをミゲルの呼ぶように言いつけると、ドワーフを伴って部屋に帰ってきた。

「先ほどの試射で判ったとおり、火薬を如何に容易に着火する方法が問題なのだ。」

「確かに、あれは重い。將軍は簡単に持っていたが、兵隊でも片手で持つて、火を付けるのは難しいじゃろうて。」

「ところで、あれには基となった物が在る筈じゃな。それは、どんな形なのじゃ？」

「私の国の古い武器なので詳細を説明することはできないが、おおよそこのような仕組みだ。」

私は、紙にまだ説明していない部分を描く。

カートリッジの構造と激発機構それに安全装置の概念・・・

「それを最初から言っておれば少しは違ったかも知れんわ。」

ドワーフは一番の課題をすんなりと解決した。

カートリッジ底部の起爆用プライマを魔道石の欠片で代用することが出来ると言う。

さらに、カートリッジの挿入後のバレル後部の受金は激発機構の細工で容易に出来るとのこと。

また、受金の中心に穴を開け撃鉄を設け、トリガーに連動したバネの開放により撃鉄がカートリッジの底を叩くと言う機構を提案した。

その場にジュリーが訪れたので、早速図面に仕上げることにした。

「今のお話を形にすると、おおよそこのようになりますが。」

ジュリーの作成した図面を私とドワーフが確認する。

「このこと、ここにこのような形をしたものを取り付けたい。」

「何じゃ？」

「照門と照星だ。狙いをつける道具だな。狙いはこのように付ける。」

狙いが正しい時と逸れた時の変化を説明する。

「なるほど・・・では、この穴の中心と、狙いが正しい時の関係は、これでいいのだな。」

ドワーフはバレルと照門、照星の関係を確認する。

「3日待つとれ。それとこれを借りるぞ。」

図面と壺の火薬を持ってドワーフは帰って行った。

夕方になる頃、リオンが包みを持って部屋に来た。

「図面通りに作らせましたが・・・これは？」

滑車による張力増強型クロスボーは確かに奇異に見えるだろう。

試射を行おうとしてボルトが無い事に気が着いた。

地図の指示棒を30cm程度折り取って、先端に銅貨5枚を使用した鎌を付ける。簡易なボルトの出来上がりだ。

「ミゲル。ライフルの試射に使った鎧はまだあるのか？」

「あのままにしております。」

「結構。それでは館の弓兵の内一番強い弓を引く者を呼んでこい。場所は広場だ。」

広場で待っているとミゲルがナナイと兵1人を連れて来た。

「今度はどんな武器ですか？」

「ただの弓だが・・・どの程度威力が増したか確認したい。」

「使ってみるか？」

ナナイは喜んで承知した。

「先ず、ここからあの鎧に向かって矢を射って欲しい。」

弓兵はナナイの命令を受けると、勢い良く矢を放った。

カッーン！と軽い音がして矢が跳ね返る。

「金属鎧に弓矢は通用しません。鎧の隙間に運よく当たることが偶にあるだけです。それでも致命傷に到る事はあまり有りません。」

次にナナイに試させる。

先ず、弦を引きトリガーの上部の掛口に固定する。そして、滑走面にボルトを置き、ボルトの底を掛口に合わせる。

「ナナイ、構える。的を照門と照星に合わせるんだ。」

「出来ました。」

「トリガーを引け！」

シユタツ！とボルトが飛び出し、鎧がツン！と揺れる。

鎧を見ると金属鎧の前面を打ち砕きボルトの太さの穴が空いていた。

「凄まじいまでの威力ですな。これでは既存の弓を使う者がいなくなります。」

「いや、そうでもない。仮に長弓兵100人とクロスボー100人が対峙した場合、負けるのはクロスボーなのだ。」

「そんなはずは・・威力が全然違うじゃないですか。」

「クロスボーは確かに威力はある。しかし、その威力は限られた距離だけなのだ。そして、真っ直ぐに飛ぶだけだ。」

私の言葉に弓兵は、はっ！と気付いたようだ。

「弓兵は気付いたようだぞ。ナナイこれは宿題だ。」

「リオ！このボルトだが、後ろに羽をつけたものを何本か作らせ、親父殿に試してもらえ。その後親父殿を呼ぶんだ。」

私はリゲルと共に広場を後にした。

新貨幣

朝、本来であれば、朝練、朝食、課業という流れで館の生活が進むのであるが、私の体は何時でも、最大戦闘モードに即時に移行できる状態にある。

よって、人々の課業が開始されるまで、この窓から時間と共に移り行く湖の表情を愛でることが日課となってしまうた。

湖を眺める私にミールが来客を告げる。

男爵、姫そしてナナイがミールの案内で私の前の長椅子に座る。

「最近はどうですか？」

「計画の実を刈取りつつある、というところだ。」

「一つ、私から提案が有ってまいりました。將軍には来客も多く、客間は手狭でしょう。昔、私が立てた家があるのですが・・良かったら使ってもらえませんか。」

それは、私が望んでいたことでもあった。

やがて押寄せる反乱軍への対処、その後の進攻策には、大テーブルと地図、情報集約用の部屋、幕僚の部屋・・ある程度はこの館で対処出来るだろうが、出来れば特化した建物が欲しいところだ。

「確認したい。その建屋から湖は臨めるか？そして大きな部屋はあるか？」

「館は、湖近くの小島にありますよ。それと、小さいながらもパ―ティに使える部屋もあります。」

「御好意に甘えても良いのだろうか？」

「存分にお使い下さい。昔、私が暮らした別邸なので、今は誰も使っておりません。」

「では、有難く使わせて頂く。」

「ミールに準備させましょう。使用人も何人か必要でしょうから。」

「さて、これからは本筋です。これからの計画ですが・・・」
「私の方の準備は大体半分程度だ。武器はほぼ形となったが、その武器を使う民兵の組織はこれからとなる。」

「そこで、反乱軍の進攻を遅らせることに主眼を置く。」
「その手立ては、進攻に先立つ偵察部隊の殲滅と兵站への襲撃だ。」

「うまくいけば1週間後には作戦を開始できると思う。」
「こういう作戦もある。」

私は、布の包みを男爵の前に出した。

男爵が包みを開けると、数枚のメダル状の物が入っている。

「これは・・・？」

「試作品だ。記念に進呈しよう。姫の好きな花は・・・これだったな。男爵夫人は、確か・・・このはず。ミール！これはお前にあげよう。」

そう言いながら、金、銀、銅の試作品を渡す。

各人それぞれに渡されたものを訝しげに見ていたが、はっ！と男爵は気付いたようだ。

姫の持つ物、ミールの持つ物を見てそれが確信に変わる。

「まさか！！・・・これは、貨幣なのですか？」

「姫の持つ金貨1万ドラクム・・・この硬貨に使われている金の比率は1対9・・・最初2対8で作ろうとしたが、重さの違いがはっきり判る比率とした。」

「金貨を標準貨として、男爵の持つ銀貨を100ドラクム、ミールの持つ銅貨を1ドラクムとする。この硬貨以外の硬貨では、この金貨との交換を拒否した場合、商取引はどうなると思う。ちなみに、金貨に含まれる金の値段は9千ドラクムを超える。」

「・・・」

一同声も出ない。

「ほぼ、同じ重さの金と等価と言う事ですか・・・」

「そうだ。墓所からの軍資金・・・譲り受けた分は殆ど硬貨に費やした。シャープネス内の商人との取引にも、既に使用している。」

「市場が混乱しますぞ！」

「どこの市場だ！！」

「それは・・・」

「現在、帝国内で流通している金貨の金の割合はこの金貨に比べ遥かに低い。1人の商人に2人の客があるとする。1人は帝国金貨で支払うと言い、もう一人はこの金貨で払うと言う。さて、商人はどちらに売るのかな？」

「それは・・・より価値の高い方に・・・なるほど。」

「反乱軍の流通経路を混乱させ、兵力の維持を危うくさせることが目的だ。それに、他国との貿易も容易となる。商人は喜んでいたぞ。」

「帝国の方は・・・資産、給与の目減りですか・・・士気を維持するために多大な財力がさらに必要になる。」

「失敗しても、硬貨を鋳潰せばよい。少し減るが問題なかつた。」

「でも、何故に花の図案を・・・硬貨といえば肖像が一般的です。」

「単に不敬かと思っただけで他意はない。姫と奥方、それにミールが好きな花を図案化したまでのこと。」

夕方近くに、リオが父を伴ってやって来た。

ミゲルの案内も気にせず、長椅子にドサッと腰を下ろす。

彼の背にはクロスボーが背負われていた。

「とんでもねえ代物だな・・・これは。」

アドモンはクロスボーをテーブルに置き、それを右手で撫でている。

「試射はした。なるほど簡単に金属鎧を貫通出来た。．．それで、試しに狩猟で使えるかも試してみた。熊を一撃だぞ！信じられるか？」

「十分に使えると言うことで良いのか？」

「十二分に使える。．．こんな方法があるとは思え付かなかった．．」

「では、相談とするか。」

アドモンと特殊部隊の編成について話合う。

5人を基本としたチームは、狩猟の基本だそうだ。よって、そのままこれを分隊とする。

1小隊は2分隊とし、常に片方の分隊を支援できるようにする。分隊は通常の猟師装備が2名、クロスボー3名とする。

「要するに、今まで通りの猟師生活が可能と言っわけだな。」

「通常任務では変わらないと思う。但し、狩猟場所はこちらで指定したい。」

通常は偵察任務と敵側偵察員の排除を主な任務とする。

緊急時には、直ぐに集合し奇襲を可能とする。

「すると、連絡手段が大切になるが．．」

「魔道石を使用することを考えていえるが、まだ、具体化までに至っていない。」

「とりあえずは伝令か。．．足の速いやつを集めにやならんが．．部隊の規模は？」

「シャープネスの周辺．．此処と、此処と、此処だ。」

「．．30人か．．これは、何時手に入る？」

「クロスボー20個を明後日中には送る。それと、ボルト300本だ。」

「では、入手次第行動に移るとする。で、連絡は全てリオでいいんだ。」

「それでいい。」

アドモンはリオを連れ巨体を揺らしながら去っていった。

その日の最後の客は、ミゲルとサラディンそして歳若い娘であった。

「ロディ殿の欲したものは、工房に無事届けましたぞ。」

「それは、助かる。」

「それで、本日伺ったわけはですな・・・」

彼の要求は、支払いを全て新金貨として欲しい事。

新金貨を他の商人仲間にも使用させたい事の確認と、それに伴う商会の結成の是非。

それに私への融資だ。

「融資を受けるほどに現状は窮していない。その他については私は問題ない。男爵の許可が必要であれば別だが・・・」

「事前に男爵の了承は得ております。但し、融資は断るだろうと・・・」

「なら、問題は無い。早速だが、次の依頼を受けてもらいたい。」

「何なりと・・・」

「食料と家屋だ。とりあえず、兵士500人が寝起きする場所を確保したい。場所は男爵の許可次第連絡する。」

「私一人ではお受け出来ませんが、商会としてなら多方面の商人、職人を使えるので問題ありません。」

「当然、代価は新貨幣にするが、もう一つ、兵に与える給与も新貨幣としたい。新貨幣で買える物が出来るようにしてほしいのだが。」

「願っても無いこと。問題はありません。」

「最後に私から、使用人を一人お預けします。ミゲルの妹エルザでございます。商取引は店を任せられるほどですから力になれると存じます。」

「兄が御世話になっております。」

エルザが丁寧な頭を下げる。

「此の儘では、私は金庫番になります。妹に金庫番をやらせて下さい。」

ミゲルの願いは、もっともな話だ。この流れで計画を進めると確かにそうなる。しかし、私がミゲルに望むのは副官としてだ。

「ありがたく、お受けする。但し、近々他の場所に所在を移すので、その時からお願いしたい。」

これが、やがては新帝国の財務長官となるエルザとの出会いであった。

ライフル銃の完成

男爵より用意された館の改装は2日で終了したようだ。

元より別邸としての機能は常に維持された状態であったことから、改装は大部屋への大型テーブルの設置と当座の食料の買い込みで済んだらしい。

この部屋の最後の来客は、ライフル開発を担当するドワーフだった。

数名の弟子と共に来室した彼は、依頼通りの物が出来た事を自信を持って言った。

リゲルが弟子の持つ箱を開けさせると、5丁のライフル銃が入っていた。

1丁をテーブルに載せるとドワーフは説明を始めた。

「形は問題無いはずだ。激発機構は・・・ほれ、このようにコックを引くことにより内部のバネが引かれる。トリガーを引くと、バネの固定が外れコックが勢い良く戻る。この時、コックの下にあるハンマーが撃針を叩くのじゃ。」

「それと、これじゃ。」

ドワーフは1本の棒を取り出した。

「將軍の言ったカートリッジじゃ。薄い銅筒の後ろに魔道石の破片を埋め込み、撃針が当たると高熱が出る。すると、銅筒の中の火薬が爆発して、先端に付けた弾が飛出る仕組みじゃ。」

なるほど、ドワーフの技能は想像がきちんと出来れば形になると言うことか。しかも精度が極めて高い。

「暴発の心配は、この仕掛けを使う。照門の前に邪魔板があるじやろつ。それが内はいくらトリガーを引いても撃針は作動しない。それを横に回すようにずらすと照門で狙いを付けられると同時に

に撃針が動けるようになるのじゃ。」

「弾をバレルに入れるときは・・・このようにトリガーの上の突起を押し込めると・・・ほれ！2つに折れてバレルが出てくる。この出っ張りは、その時中に入っているカートリッジを取り出す仕掛けじゃ。」

ライフル銃の完成である。機構及びカートリッジといい、特に問題となる所は無い。

「良くぞ形になったものだ・・・感謝する。」

「なに、面白いものをこちらこそ作らせてもらった。わしこそ感謝したいくらいじゃ。」

「後は、数が欲しい。3千丁・・・カートリッジが30万発。大至急作って貰いたい。」

「それもさして問題無かろう。あるとすれば材料じゃ。手配できるか？」

「期間はどの程度になる？」

「他の工房に応援を頼んだとして・・・1週間で500丁というところじゃな。」

「では、よろしく頼む。」

ミゲルと2人部屋に残る。

「ところで、民衆の平均的な暮らしは、どの程度の金額が必要なのだ？」

「そうですね・・・町に暮らすとなれば・・・一月で銀貨数枚といったところでしょうか。独身と既婚で上下しますし・・・」

「衣食住は此方持ちで銀貨3枚であれば人は集まるか？」

「それならば、2枚で可能でしょう。家の手伝いをしている次男、三男が大勢いますから。」

なら、戦がある月は上乗せできるか・・・

「例の3人を呼べ。いよいよ軍を立ち上げる。」

ミゲルと3人が長椅子に着いたところで話を切り出す。

「お前達の軍が使う武器が完成した。いよいよ軍を立ち上げるが、前にも言った通り、シャープネス軍にはお前達に与えられる兵は無い。」

「よつて、民兵を募集する。お前達1人で10人先ずは募集しろ。募集する兵は、頑強で、長時間の行軍に耐え、尚且つ、物覚えの良いものに限る。」

各自、簡単にメモを取るのを見て、話を続ける。

「先ずは、各自10人を揃える。次はその10人に10人を集めさせる。その次も同じように集めさせれば、総勢3千人の兵力になる。」

「それと、武器については心配させたが、これからお前達に試射をしてもらう。威力はあるが用兵上は難しい使い方となる。先ずは性能を各自確認することだ。」

広場に出て、試射をすることにした。

先ず、普段の持ち方と射撃時の構え方を私がやってみせる。

次に3人に銃を渡し、真似をさせる。射撃は膝撃ちの姿勢だ。

狙いのつけ方と安全装置の関係を説明し、各自にカートリッジを渡す。

バレルを開放し、カートリッジを入れる。

中折れした銃を基に戻して、構える。

安全装置を解除して、照門と照星で狙いを金属鎧につける。

そして、トリガーを指で引く・・・

バババーン！！と音が響く。

次弾発射の準備をする。トリガー上の突起を押し銃を中折れ状態にすると、カートリッジが自動的に取出され、下に落ちる。

続けて、カートリッジをバレルに押込む。

元に戻して、トリガーを指で引く・・・

バババーン！！と同じように弾が発射された。

4人でのになった金属鎧を確認する。

前の試射で穴が開いた鎧であるが、今回の試射でさらに穴が増えている。

「打つ時の衝撃は厳しいものがありますが、結果を見れば十分に満足できます。」

「銃の操作は理解できたか？」

「はい。」

「では、早速各自10人を集めて来い。」

部屋に戻ると、ミールが大きな包みを持って待っていた。

引越しの準備が全て整ったらしい。

玄関に馬車を待たせているとの事。

ミゲルに彼女の荷物を持たせ、ミールと共に男爵の下に向かった。

男爵の部屋には姫とナナイが滞在していた。

「別邸を賜り、有り難く思う。」

「しばしの別れですな。なに、目と鼻の先です。これからもお邪魔するつもりなので、こちらこそよろしく。」

「お邪魔する機会が多いと思います。今後とも帝国国民のために・
・・」

姫が丁寧な礼を言う。

「ところで、男爵殿。2つ程願いがあるのだが？」

「どのような内容ですか？」

「少し土地を貸して貰えないだろうか。民兵の募集始めるに当たり、訓練場所を確保したいのだが。それと、ジュリー夫人だが、長期間専属で図面等を書いてもらいたい。婦人は元々別の用でこの館に来た事は理解しているが・・それでも、婦人の技量が必要なのだ。」

「先の願いはたやすい事。別邸の周囲は自由にお使いください。婦人については、本来の依頼は既に終わっているのですよ。妻が話相手にたまたま帰りを延ばしていたに過ぎません。改めて婦人と契約されてはどうでしょうか。」

「ありがたい。それではお邪魔した。」

玄関に出ると、確かに馬車がある。ミールを乗せて、別邸に向う。2頭の馬が引く馬車は、大人4人がちょうど良い大きさであった。湖の辺を墓所と反対方向に走らせる。

男爵の館が入り江の影に入って見えなくなると、別邸が見えてきた。馬車で1時間もかからない距離である。

別邸は入り江に浮かぶ島を丸々使った建屋だが、島そのものが小さいことから、建屋が湖に浮んで見える。

さらに進むと別邸へと至る橋があり、橋を渡ると小さな広場がある。馬車が玄関に止まるとドアが開き、エルザが出迎えてくれた。

「おかえりなさいませ。」

我々は、拠点を手に入れた。後に、この別邸に設けられた戦略情報本部は【鷹の目】と呼ばれ、各国に恐れられることになる。

地図を作るには

別邸の造りは、男爵の館を2回り程小さくしたものであった。

元々は男爵が新婚時代を過ごした館だとか・

それでも、客室が10室もあり、主の部屋が広いこととパーティーも開ける程広い談話室は有効に活用できる。

私は、主の部屋に隣接したメイドの控え室を自分の部屋にする。主の部屋に廊下に出ずに出入り出来ることと、ベッドを取去れば少人数の会談に最適である。

また、この部屋からの湖の眺めも素晴らしい・男爵館は森の影に隠れ、景観の邪魔にならず、遙か湖の彼方に墓所の彫像がおぼろげに見える。湖に張り出した館であることから、まるで船に乗っているような錯覚を感じる。

客室は1階の4室をミゲル達に使わせることにした。広い客室なので、2室を5人で使うようだ。

2回の客室も同じ様にミール達が使用する。但し、エルザの部屋は単独とし金庫を搬入するように言いつける。

事前の指示に従って、1階の談話室は一旦全ての家具を取去って、大型テーブルと壁際の長椅子を運び込んだらしい。

館の中を歩いていると、ミールが来客を告げた。

1階の客室に行くとジュリーと弟子がいた。

テーブル越しに席を薦めて、婦人への依頼を告げる。

「男爵より、將軍から長期に渡る依頼があると聞いたのですが。」

「そうだ。今回、ジュリー殿に作成して頂いた図面の出来が高いことから、工房での作業が大幅に捗っている。ついては、今後とも図面の作成に力をお貸し願いたいのだが・」

「かまいませんが・・・そうならば弟子の仕事が無くなります。」

「それについては、お弟子殿には別の依頼をするつもりだ。ところでお弟子殿は、読み書きと計算は出来るかな？」

「読み書きは問題ありませんが、計算は・・・加える、引くは出来ますが・・・」

「掛ける、割るはどうであろうか？」

「聞いたことはありますが、どのようなものは・・・」

「なら、覚えるが良い。お弟子殿に依頼するのは、図面には違いないが数学に裏打ちされたものなのだ。」

「書くために数学が必要となる絵とはどのようなものなのでしょうか？」

「地図だ。前に依頼した地図の模写は見事であった。しかし、私が望む地図はこの間の地図とは異なる。例えば、この館と男爵の館の距離はあの地図で判るか？・・・あの地図はこの辺にこのような物があることはわかるが、方角、距離、規模等は判らない。また、土地の高低差も不明だ。これらを全て網羅した詳細な地図を作成するには数学が必要なのだ。」

「そして、地図の作成には道具がいる。道具ができるまでに、ある程度の数学は私が教えよう。」

「私の仕事は、地図造りの道具の絵というわけですか。」

「其れだけではないが、先ずそれを先にしたい。」

「道具と数学と地図が、今1つ結びつかないのですが・・・」

「紙と筆記用具はあるか・・・それでいい。」

私はジュリーから筆記用具を受取った。

紙に三角形を書く。そして、各辺に正方形を書く。

「三角形には面白い性質があつてな。この辺を一边とした正方形の面積はこの辺の面積とこの辺の面積に等しいのだ。」

「このように三角形の性質を利用して、辺の長さを順次測ると正確な地図を作成することができる。」

「正確な地図は国造りの基本となる。用水路を造る場合でも、掘る長さ、深さを計算できることから予算や工期までも正確に把握できる。」

「このための道具は色々あるのだが・・・まずは角度を測る機械を考えている。」

「角度を測るのですか？」

私は紙に円を描く。そして垂直線と垂直線を引く。それは円の中で交差したものだ。

「この円の上部の垂直線の交点を（0度）とする。右回りに、水平線との交点を（90度）、（0度）の反対側を（180度）そして、ここは（270度）とする。丁度円一周は360度となる。」

「これを、角度の単位とする。」

「どの程度の精度で測ればよろしいのですか？」

「この角度は90度だ。この間を90等分したものが1度となる。私が測りたいのは1度の二十分の一の精度だ。」

「地図造りにはこの程度でいいだろう。」

「とんでもない精度じゃないですか。」

「本来は更なる精度が必要となる。しかし、最初の地図としては問題ない精度だ。」

「いつから、仕事を始めればよろしいでしょうか？」

「明日からお願いしたい。それとおもちゃの製作に近いのだが・・・歩兵、騎兵、魔道師等の簡略化した立像をお願いしたい。」

「わかりました。よろしくお願いします。」

ミールを呼び、2人の部屋に案内を頼む。

地図はかなりの難作業になるだろう。しかし、今後の帝国の発展には欠かせない。

道具はトランシットに類似のもので良いと思うが、その製作過程で問題が1つある。

望遠鏡だ！この製作は自然科学を発展させる上で極めて効果があるのだが・・・

ミゲルが部屋に来たので確かめることにした。

「確認したい事があるのだが。」

「何でしょう？」

「この世界に宗教はあるか？」

「宗教は色々ありますよ。要するにどんな神を信じるのかって事ですよね。大概は種族、職業等によって信仰する神は違ってきます。」

「多神教か・・・例えば、お前が信仰する神と他の神の関係はどうなるのだ。」

「どうなるといっても・・・どうにも成りませんよ。いろんな神があつて、信じる人がいるわけだし・・・」

「要するに、神は同列であるということだな。では、唯一絶対神を信じるものもいると考えてよいか？」

「アガルト神ですね。確かに、あの神を信じるものは他の神は邪神として迫害の対象としますが・・・何か問題でも？」

「問題だ！帝国内でのアガルト神の帰依者は多いのか？」

「全く無い訳ではありません。」

「最後に聞きたい。この世界はどのような形をしている？そして世界の中心は何処にあると考えている？」

「世界は平面です。海の向うは大きな滝となつて地獄に落ちていきます。世界の中心はこの世界です。それは毎日太陽や月がこの世界を回っていることから判るはずですよ。」

「地動説の世界か・・・もう1つ、その話に宗教が絡む事はないのだろうか？」

「昔から言われていることで、特に宗教は絡みませんが・・・」

「ありがとう。絵師の弟子にやらせたい仕事に少し支障があることが判った。」

どうやら近い内に男爵や姫と相談したほうが良さそうだ。

望遠鏡と算盤

宗教と自然科学はある意味で相反する観念を持つ。

リゲルの話では、この世界の宗教は多神教であり、一つの観念に固着する者は少ないと思われるが、彼の世界観は私の世界での中世と呼ばれる時代での世界感に類似している。

自然科学の発展は、ある意味で神を否定する事になりかねない。

次の朝、男爵の館に馬車を飛ばし、男爵との面会を求めた。

男爵の私室に案内を受け、しばらく待つと男爵、姫、ナナイが現れる。

「本日はどのようなお話ですか。」

「少し、面倒な話で相談したい。それは宗教と世界感だ。」

文明と同時に宗教は発展したとも言える。それは、心の安らぎを求める上で必要だ。

しかし、戦争と宗教が密接に結びつく場合がある。

敵兵を斃す事が宗教によって緩和される内はまだ良いが・・・宗教によって人を斃すことになった場合は問題である。しかし、その宗教を信じている以上それは是となる。

この世界の宗教が外交的か内向的かは早い段階で確認しておきたい事項であった。

さらに、外交的な宗教であれば、己が教義以外を根本的に拒否することが考えられる。科学的考え方への導入により、従来の教義を否定された場合、その宗教を指導する立場の者はどう動くかは火を見るより明らかだ。

「この世界の宗教は、ロディ様の言う多神教で良いと思います。」

私の信じる神、男爵やナナイの信じる神は異なりますが、互いに干渉することは有りません。神も人もです。」

「但し、將軍の話の中の一神教に相当する宗教もあります。」

「非常に排他的な宗教であり、他の宗教を認めておりません。そして、その宗教を広めるべく画策していることも確かです。」

「確かに私達は地動説の世界感を持つと言えるでしょう。しかし、これはそのように考えたほうが自分自身納得しやすいだけで、違うという根拠が明確であれば、簡単に考え方を変えることが出来ます。」

「

測量器に付属する望遠鏡は、測量でのみ使用されとは限らない。それを惑星に向けた時、地動説は覆えされる。

かつて我が惑星で生じた宗教裁判等断じて在ってはならない。

「再度念を押すが、世界観が変わることは余り人心に与える影響はないと考えて良いのだな？」

「信じる神が違えば、世界観も変わります。それは個人個人に起こるものであり社会にまで影響を与えることは無いと考えられます。」

「

「但し、アガルト神の信奉者については注意が必要です。彼らを持つ世界観は他の神の世界観を全て否定します。」

「この帝国にアガルト神の信者は多いのか？」

「いえ、殆どおりません。」

なら、とりあえずは問題が無いということか。

「しかし、朝早くから宗教の話とは・・・將軍らしからぬ相談ですな。」

「帝国の詳細な地図を作ろうと思う。しかしこの地図にはちよつとした道具が必要となる。その道具を別な使い方をした時に世界観

が変わる可能性があるのだ。だから、作成する前に宗教上の危惧があるか否かを確認したかった。」

「今までのお話で納得出来ましたかな？」

「納得した。問題ないと判断した。・・・この礼に後に玩具を1つ男爵に進呈する。」

急いで別邸に戻り、測量器具の設計に入る。

「トランシットの大まかな形はこのようになりますが・・・2、3質問があります。」

ジュリーの質問とは、やはり望遠鏡のことである。筒とガラス玉の関係が理解出来ないようであった。

「丸いガラスを断面が紡錘形になるように加工し、これを2個使うと遠くのものが大きく見えると言うことで納得して欲しい。」

「副尺は目盛の等分率を変化させたものだ。これを使用することにより、二十分の一まで目盛を読むことが可能だ。」

質問は、水準器、三脚、基準棒にまで及ぶ。

その都度、補足を繰り返すことにより、大まかな図面を作成した。その図面をミゲルに持たせ、工房都市の工房を訪ねさせる。早ければ3日程度で形になる。

私の部屋でミールの入れたお茶を飲みながら数枚の絵をジュリーは取出した。

「前に依頼の有った絵ですが、このような物で良いのでしょうか？」

絵は、兵の種別毎の立像デッサンである。

騎兵を馬に特化した像、それはまるでチェスのナイトである。また、騎兵像をミニチュア化した像もあった。

私はこれを戦略を検討するための道具として扱おうと考えている。

ならば、数と兵種が判れば良いのであって、観賞用ではない。

「この簡略化した方が望ましい。それと、台座の高さを1段、2段の2種類があるとよいのだが・・・」

「了解しました。兵種についてはミゲル様と調整します。」

「それと、彫像の色は2種類・・・いや3種類欲しい。白、黒、緑だ。」

敵は必ずしも一国ではない。

しかし、戦略検討用の駒としてのみ使用するのには少し惜しい気がする。

平和が見えてきたならば・・・チェスを作っても良からう。

「すみません。少しよろしいですか？」

其処に現れたのは、エルザだった。

エルザは、我々の金庫番・・・尋ねてきたからには支払い上の問題でもあったのか？

私は席を勧めてエルザの話を聞くことにした。

「ここを訪ねた理由なんですが・・・この頃、工房と商会の品物の遣り取りが多いものですから・・・支払い確認が滞る恐れがあります。可能な限り支払おうとは思いますが伝票類が多いので計算するのが大変なんです。人数を増やす事は出来ないでしょうか？」

我々が圧倒的に不利な状態において協力を惜しまない者達に報いることが出来ないとなれば・・・考えたくもない。

私は直ぐに了承した。そして1つ疑問をもった。

「この世界に計算を助ける機械はあるかな？」

「エッ・・・そんなものは、ありません。書き損じた紙や石板で計算するんです。」

「とりあえず、人数は増やす事だ。それと、後でいいものをやろう！」

エルザは怪訝な顔であつたが人を増やすことが了承されたことでほつとしているようだ。

「ジユリー殿。このような形を図面にして貰えるかな。」

私は簡単な算盤の絵を描いた。

「変わった物ですね。何に使うものですか？」

「エルザの様な者には是非とも必要な計算をするための機械だ。」
「では、これを最優先させましょう。」

2日後に簡単な算盤が完成した。桁数にして10桁の算盤であつたが、操作方法をエルザに教えると、その便利さに常に携帯するようになった。

やがて、商人達の噂に上り、帝国に急速な普及を見たのは思わぬ誤算であつた。

作戦本部

月日の流れは早いというが・・・この惑星に降りて一ヶ月が過ぎ去ろうとしている。

今日は、珍しく朝の散歩を一人楽しんでた。

館の広場には、真ん中に何時の間にか小さな花壇が設えてある。

そして、花壇の真ん中にはこの国の測量の基点となる「一等基準点」が設置してある。この館より南に200mの地点に更に「一等基準点」があり、この2つの基準点を三角形の1辺とした測量がジュリーの弟子、ケイムによって成されている。

彼一人では何年掛かるか判らぬが、何れ、ケイムと共に測量に参加している若者達がそれぞれ独立して作業を開始するだろう。そう、遠くない時代に地図は形となり、ケイムの業績は歴史に残るに違いない。

館の門である石橋に立つと遠くに兵舎が見える。最終的には3千人を収容することになるが、現在は500名程度であり、兵舎の建築は現在も継続している。その奥にある土堤防は、射撃訓練用のものだ。跳弾対策に民兵に作らせたものだ。

館に戻り、1階の作戦本部に向う。ここはパーティ用の大広間を改造したものだ。

中央の大テーブルには、帝国の地図を広げているが、何れケイムの地図に変わることだろう。

地図にはジュリーの作った作戦駒がマナル市の南にあるマナル橋の両岸に沢山置かれている。

反乱軍の数は約1万5千こちらは3千だが、突破口はマナル橋に限られていることから睨み合いが続いている。

2階に戻ると情報室から若い女性の声が幾つも聞こえる。

魔道石による相互通話は1対1の通話に限定されているため、沢山の魔道石がこの部屋の棚には置かれている。連絡のあった魔道石は光るため直ぐに判る。あいての話をメモし、取り纏めるのはミールの仕事だ。部屋の女性はミールの友達だと言っていた。

歩みを進めると今度はパチパチと言う音が聞こえてくる。

金庫番、エルザの部屋だ。あれからミールと同じ様に商人の友達を引き連れて今の仕事をこなしている。

戦術室に入るとミゲルがアレスと地図上に駒を並べ議論している。「一斉攻撃にライフルで対抗した場合、ライフル隊までの到達時間で撃てる弾は精々3発。相手の数によっては防ぎ切れません。」
「そこで、横から騎馬を突っ込ませる。これで余裕ができるのでは？」

もっと、いい方法があるのだが・・・しばらく議論させるのもいいだろうと私の個室に足運ぶ。

「失礼します。」

ミールが、なにやら抱えて入ってきた。

「出来ましたのでお召し替えを・・・」

言いながら、私のマントを脱ぎ始めた。今度はこれです。と言って新しいマントを広げて見せる。

そこには、前に私の家紋だと教えた菊水の紋章が金糸で刺繍されていた。

さつさと私に着替えさせる。

「立派です。騎士の家紋が花なの？って皆言っていましたけど・・・似合いますよ。獣の紋章なんかより高貴に見えます。」

ミールは自分の事のように喜んでいいる。
ありがとうと礼を言うておく。

「ところで、熊太郎、熊次郎から連絡です。先ず、熊太郎（狼の群れは20程で子は居ない）、熊次郎（狼は獲物を二匹連れ帰る）・これって、暗号ですよ。聞くだけじゃなくて、何を言ってるのか教えてください！」

たしかに、聞くだけでは何だか判らぬだろう。将来のことも考え教えることにした。

「熊太郎と熊次郎は知っているな？」

「この間の熊みたいな獵師さんのことですか？」

「そうだ、彼らは10人づつ2つの部隊に別れて、トルタナ山脈に入りサザーランドからの偵察部隊を見つけ次第襲撃している。さっきの太郎の部隊は20名の潜入部隊を抹殺したと言う報告だ。次郎の方は、抹殺した人数は不明だが捕虜を2名てに入れて連れ帰ると言ったことだ。」

「そうだったのですか・・判りました。」

「獵師仲間の暗号は我らに理解できないものもある。リオを彼らの上に付けているのもその理由だ。リオに尋ねればもっとよく教えて貰えると思うが。」

部屋の窓から湖を眺める。

季節が変わったのか、しばしば湖に霧が現れることが多い。今日は、霧も無く対岸の彫像が日光に透され眩しく光っている。

しばらくボンヤリと時を過ごしていると、ドアのノックとともにミゲルが木箱を抱えた兵を伴って入ってきた。

「失礼します。兵が工房より戻りました。工房に図面を届けて、この荷を預かってきました。」

そう言つと兵に木箱を開けさせた。

そこには、布袋に入った筒状の物が10本。小型のライフル銃が20丁。そして、皮のケースに収まった、更に小型の銃が10丁入

っていた。

「このライフルは我々が使うものと違うようですが・・・」

「騎馬隊用に試作したものだ。片手で打てる様にグリップの後ろの肩当が無い。それにバレルも短くした。当然威力は落ちるが、騎馬隊の俊敏さを生かした使い方があればと作ってみたが・・・ナナイに使うて貰おうと思っている。」

「この小型の銃は？」

「護身用だ。2発が連発できる。士官用に作ったので、お前達に1丁つつ与える。残りは部屋の隅においておけ。」

「これは・・・」

「あけて見る。その小さい方から覗いてみる。丁度、湖越しに彫像が見える。」

私は戸惑っているミゲルに使い方を教え、遠くの彫像にピントを合わせさせた。

「・・・!」

「どうだ？」

「近くに見えます。まるで、直ぐそこにあるようだ・・・」

「偵察用に作らせた。それも、士官用に1個つつ渡そう。但し、絶対に太陽を見ないこと。約束してくれ。」

「さて、土産も出来たことだし、男爵を尋ねるか。」

「その儀には及びません。先ほど、こちらを尋ねる旨の連絡を頂きました。」

「そうか・・・では、待つとするか。」

「ところで、先ほどライフル部隊の運用を検討していたようだが、良い手立てを見つけたか？」

「いえ・・・数で圧倒的に不利な場合に、騎馬隊の突撃を食い止めることが出来ないと判断しました。」

「それは、間違いだ。良い方法があるぞ・・・」

私は、3段構えの策を教えた。兵を3隊に分け、前列、中列、後列とする。前、中、後と順々に打つ事により、打った後の時間に余裕が出来る。この時間を利用して次弾を装填する。この方法を取ると、常に弾を撃っている状態になるので、たとえ大軍であっても近づくことは困難となる。

彼は、明日にでも試してみることにしたようだ。

そんな用兵に関わる基本事項をミゲルに教えていると、ミールが男爵の来訪を知らせてきた。

ミゲルを下げて男爵を待つ。

ミールに案内されて、男爵一向が入室した。男爵、姫、ナナイである。

「將軍は以外と質素ですな。まさかメイド用の部屋を自室にするとは思いませんでした。」

「私に睡眠、食事が必要なければ、一人で思考が出来る場所さえあればよい。」

「ははは・・・そうでしたな。ところで今回来所した目的はですな・・・」

「明日、再度墓所に参ります。その報告と現在の状況についてお話をしたく参りました。」

姫が話しをつづけた。

「現在、マナル橋を挟んで両軍は膠着状態・・・しかし大軍を相手にしているせいか、わが軍の士気消耗が激しい状況です。他の地域は現在目立った動きはありませんが、マナル橋の現状を見ると何かしらの手をつたはうがよいのではとナナイが・・・」

「民兵の状況は現状で500。来週には千を越えると考える。来

週後半には、とりあえず訓練が出来た者を中心に千の軍を派遣することが可能だ。なんとか、来週後半まで現状を維持して欲しい。」

「千の民兵で可能でしょうか。相手は1万5千。15倍ですぞ。」

「初期に2千程度斃すことが出来れば士気は途端に落ちる。兵器の差、突入路が橋であることを考えれば、無傷で2千を倒すことは可能だ。」

「それと、他の情勢だが、サザーランドが偵察部隊をトルタナ山脈越しに何度か送り込んでいる。大軍勢でまた峠越えを図られてもまずい。少し、狼の巣穴を増員しておいた方が良いでしょう。」

「しかし、どのような方法で全体を把握しているのですかな？ 参考までにお教え願いたいものです。」

「ミールに案内させよう。この館を少し改造させて貰った。この館は今後の戦いの作戦本部として十分機能する。」

「それと、男爵殿に言っていた。土産が届いたので。貰って頂きたい。姫とナナイの分もあるので使って頂きたい。」

ミールに部屋の隅から望遠鏡と護身用の銃を持ってこさせ、各自に渡すと、使い方を一通り教える。

早速、男爵は窓から望遠鏡で景色を覗いてみた。

「・・・！・・・なんと、なんとということだ！」

小さな筒を覗く事によって、遠くの景色が真近に迫るのを見て驚いたようだ。

姫やナナイも試してみると同じように驚き声も出ない。

「その贈り物ですが、1つ約束願いたい。太陽は見ないこと。見れば目を焼かれ二度と物を見ることが出来なくなります。」

3人は尚、景色を眺めつつ私の言葉に頷いた。

護身用の銃についても念を押す。2発しか弾が出ないこと。コックを引かねば打てないこと。しかし、撃てばその威力は金属鎧を貫通する事等だ。

最後にナナイに騎馬用のライフル銃を渡した。

使い方は通常と同じだが威力は少し劣る。そこを踏まえて利用価値があれば使って欲しいと伝えた。

彼は、男爵館の広場で試射を見たときから、騎馬での運用を考えていたようだ。早速ためしたいことがあると言っていた。

墓所への来訪は3人で行くとのことであった。更に軍資金が必要かを私に尋ねたかったようだが、それはエルザに聞かねば判らない。エルザの部屋に行った時に確認したいと伝えた。

その姿は女性騎士

その日は朝から戦術室で、ライフル部隊の図上訓練を実施していた。

すでに、民兵の数は2千を越えておりライフルの取り扱い、射撃については申し分無い状態である。

しかし、兵の速度は正規軍と比べ遥かに低い、この状態を如何に打破するかを研究するためである。

圧倒的多数の攻撃を如何に撃退するかについて、ミゲル、アレス、トロア、ヘイムを集め、マナル橋を事例として演習中を行っている。

「ライフル部隊を3段に設ける意味はよく判りました。しかし、この橋の道幅は広く馬車3台分もあります。騎馬部隊の襲撃は撃退出来ても歩兵の突入までは・・・無理なのでは。」

「歩兵の損害を一切無視した突撃は防ぎようが無い。これはライフルと言えども立て続けに撃つことが出来ないことにある。10発！これが1回の戦いで使用できる弾の数だ。よって、千人が10発で倒せる数以上に相手が攻めてきた場合は阻止できないことになる。」

「それは、バレル内の火薬除去が必要だからですね。では、その時間を交互に取りその間他の部隊で代わりに戦う方法が取れると思います。・・・このように！」

トロアは部隊を4つに区分し、3段と1段に組み替える。

少しずつ戦術が練られていく。このまま行けば、今日中に結論が出るであらう。

トントンと扉が叩かれる。扉が少し開き、ミールがちよこつと顔を出す。次に手が出て私を招く・・・どうやら何かあったらしい。

4人を残し、部屋をでると、ミールが頭を下げて非礼を詫びた。

「すみません・・姫様とナナイ様がお客様を連れてロデイ様に会いたいと申しております。」

「1階の客室でお待ちです。」

数日前に墓所に再び向った時には、至急の用向きは無かつたはず・

・

それとも、マナル橋で変事があったのか・

私は客室に急いだ。

客室に入ると3人の客がいた。姫、ナナイ、そして見知らぬ女性騎士、彼女は金属甲冑を纏っていた。

「お忙しい中、お呼出ししまして申し訳ありません。」

「それはいいが、どのよな用向きだ。・・マナル橋の急変かと驚いたぞ！」

「実は・・この者についてお願いがあります・・。」

（久し振りじゃな。）

突然、私のエーテル観測器官が悲鳴を上げる。このエーテル変動の数値は墓所で見たあの結晶体が持つもの・

（何を驚くことがある。私の理想であり我が縁者の願いでもある民草のあるべき姿・・それを実現すべく動くものを真近で見たいと思うは心情であるう。それに、お主の体は、その思考構造体は極めて我に似ておる。我も似た形態を執れぬものかと考えこのような姿で合間見えた次第。）

なんと、私と類似体・・鎧の中は結晶体ということか・・・としたら、鎧はどうやって動かすというのだ。

（鎧は、私の観念動力により動いておる。）

観念動力・・サイコか。ひょっとして、超能力という非科学的

と言われた数々はエーテルの利用だというのか・

異形であれば確かに、たとえそれが初代皇帝の思念体としても傍に置くわけにはいかないか。

「わかりました。お預かりします。」

「・・・え！私は何もお話しておりませんが・・・」

「初代皇帝陛下とは念話で交信が可能です。概要はわかりました。」

「

「お願い致します。私も、なるべくお相手致しますから・・・」

また、先日の墓所より持ち帰った金塊は金貨に鑄造して私に送る
との事。およそ2千枚程になると言うことだった。

そう、言って姫は去って行った。

（そう、畏まるな。普段通りで良い。）

（と言ってもな・・・しかし、その鎧は女性用だぞ・・・なんて呼べば言いのだ。）

何分ここは魔法世界である。念話が出来るものは多分に存在する。
（思念体となる前は男性だが、結晶体に上手く合致する鎧が無かつたのだ。仕方あるまい・・・サリアと呼べ。我が妻の名だ。）

（了解した。それと、私は食べる事は無い。また寝る事も無い。
サリアは如何なのだ？）

（同じだ。思念体に食事はいらぬ。結晶構造を保つ方法は結晶体に刻まれている。）

それでは、と私は席を立つ。扉を開けると、ミールがそこに立っていた。

ミールを部屋に通し扉を閉める。

「よいか、この婦人は私によく似た所から来た者だ。今日から此処に住む。但し、私と一緒に食事は必要としない。」

「それと、彼女は念話のみ可能だ。魔道具以外で直接念話が可能

な者がいたら彼女の付き人にしたいのだが、心あたりがあれば紹介してくれ。」

ミールは少し考えているようだったが、ぱつと顔を上げた。

「1人、心当たりがあります。それと、失礼ですがお名前は？」

「サリアという。」

名前を聞くとミールは玄関の方へ駆け出した。

多分、心当たりの人物を連れて来る心算なのだろう。

サリアを釣れて2階の自室に戻ることにした。

自室前の戦術室では、ミゲル達がマナル橋防衛の最終確認を行っている。

テンプルの傍を通る時に何気に地図を見ていたサリアが作戦駒の1つをポンと動かす。

「うーむ・・・」

駒の兵種と数そして置かれた位置を見た途端、思わずうめき声をあげる。

それは、歩兵、千人、そして川の渡河を示す。

「確かに、相手側としては容易に実行可能だ。・・・再度配置を見直すぞ！」

「失礼しました。・・・？」

振り返ったミゲルは、私の隣のサリアに気が付いた。

「サリアという。私と似たような存在だ。ただし、話を聞くことは出来るが、話すには少し支障がある。今、付き人をミールが探している。」

「判りました。しかし、我々の配置案を一見して見抜くとは・・・」

「協力できる場合もあろう。その時はよしなに頼む。」

4人を後にして、自室に戻る。

（此処が私の部屋だ。湖の眺めが一番良い所だ。）

（わたしも、お前の隣を所望したいが・・・）

（後で椅子を用意しよう。）

（サリアが直接念話を相手にした場合、思念波が強力過ぎて相手を気絶させないとも限らない。今、ミールが仲介者となる付き人を探しているから、それまでは館内の者との交信はなるべく避けてくれ。）

（了解した。さすれば、私の当座の仕事は、隣室での戦術立案指導としよう。但し、付き人が着てからだ。）

ミゲルが部屋に入ってきた。

私に一礼するとサリアに体を向ける。

「先ほどは失礼致しました。」

「もし、叶いますならば、我らのご指導をお願いたく伺いました。」

「それは、可能だ。・・・サリアもそれを望んでいる。しかし、サリアの思念波は強力であり、直接お前達がそれを受けた場合、気絶する恐れが多分にある。付き人が見つかり次第だ。」

「ありがとうございます。」

一礼し部屋を出ようとするミゲルに、椅子を1脚持参するよう命じた。

大砲

「今回はどのような御用なのでしょうか？」

私は、ナナイに相談したい旨の連絡を行った。

「仕官を1人紹介して欲しい。但し、女性だ。シャープネスの軍に1人位いるだろう。男勝りで実力はあるが男共から一段下に見られているような者が。」

「はあ・・・、探してみますが、ご希望が通るような者がおるかどうか・・・」

「変った注文ですね。」

ミゲルが我々の会話に加わる。

「そうでもない。実力があるにも関わらず、その才能を出し切れない者は何処にでもいる。」

「そうではなくて、女性限定とした所ですよ。」

「男共は最前線で使いたい。しかし、その直ぐ後ろで戦うのは男でなくともかまわん。少なくとも危険性は雲泥の差だ。」

「しかし、そういう女性仕官では輸送部隊では満足しないと思いますよ。」

「いや、輸送部隊は民兵組織の延長で編成する。彼女達には別の任務を与える。」

作戦本部の扉を開けると、サリアと彼女の付人エリーヌがヘイムと共に帝国地図を睨んでいた。

作戦駒は、マナル橋付近に展開している。現在はシャープネス正規軍に替わりアレス、トロアの率いる民兵2千を2つの3段の布陣で展開し、更に橋の上流、下流側にそれぞれ5両の6輪馬車を使用した機動ライフル部隊を展開している。

「どうだ・・・少し状況に変化は？」

「今の所変化なしです。しかし、相手側の陣容がある程度判明しました。」

ヘイムはそう言うと言いつつ指揮棒を取って説明を始めた。

マナル橋の正面に展開する反乱軍の指揮は「サイラス・フォン・ドロイア男爵」。

兵力は騎馬兵5千。歩兵1万。そして魔道師が200。

「当初においては、商人の通行を考慮し、橋の完全封鎖は行いませんでしたが、現在は完全封鎖しております。封鎖点は橋の此処と此処の2段で行つと共に、万が一に備えて橋の手前にも柵をしつらえました。」

「防御に徹すればばらくは持ちこたえられるか・・・」

「しかし、現状維持をこのまま続けた場合は、反乱軍に既得権益を与える事になるとサリア様が申しております。」

エリーヌがサリアを代弁する。

エリーヌは水の神殿にいた神官見習いだが、念話の力が強いことから先輩達に疎まれていた所をミールに見出された。ミールの幼馴染だとか・・・

「まだ、攻勢には出られないだろう。周辺状況が不明である事と此方の兵力も足らん。」

「橋に対峙しているからこそ、この兵力で対応できるのだ。守備よく相手を破つても、この先の平原では兵力差が物を言う、また橋に逆戻りとなる。」

「たしかに・・・ここは、我慢ですか・・・」

攻勢に出るには兵力不足・・・

このため、兵器と機動力により補う事を考え、ライフル銃を開発したが、黒色火薬のため10発程度撃つと、バレル内の滓を除去しなければならぬ。この除去時間が1つの問題だ。

機動力については、兵士輸送用の6輪馬車を用いる事により、迅速移動が可能となった。現在10両で運用しているが更に20両を調達する予定である。

そして、今・・・大砲の作製を開始している。口径80mm、射程3km程度ではあるが、爆裂弾を遠方に投射できれば莫大な戦力を手にする事が出来る。

最大の課題となる火薬原料の調達は商会と新金貨により輸入が容易に行われている。

後は、この大砲を運用する部隊の創設だ。

その夜、1人の女性仕官が私を訪ねてきた。

「セリーヌと申します。ナナイ様に將軍の手助けをするよう仰せつかりました。」

「うむ・・・セリーヌには申し訳ないが5人の部下を調達してくれ。ナナイの了解は得ている。」

「5人・・・ですか。」

「とりあえず、5人でよい。・・・基本事項を5人に教授する。その後、その5人に10人を調達させる。最終的には70名程度の部隊指揮をセリーヌに任せたい。」

「了解しました。ところで、兵種は・・・騎馬ですか？それとも歩兵？」

「全く違う。5人で歩兵100人以上の働きをする兵種だ。明日、物が届くから5人を集めて午後に来い。」

次の日の朝早く、ドワーフ達が大きな荷馬車で館を尋ねてきた。

「ロディ様、荷が届いたようです。」

ミゲルの知らせで、広場に出ると、荷馬車から小さな荷馬車に似た物を降ろしているところであった。

小型の2輪馬車に鉄の筒が3本乗っている。短い筒は細く、その筒の上にもう1つ筒が載っている。

後退機を持つ80mmの大砲だ。

「試射はどうするか?」

「午後に為らぬと、これを扱う者達が来ない。兵舎の西に運んでくれぬか、あそこなら少しぐらい目標から外れても被害は無いだろう。」

「承知した。昼飯ぐらいは出るのじゃろ。」

「ミゲルに手配させる。午後には試射の場所に集合だ。」

ミゲルがドワーフ達と大砲を馬で引いて行く。

どうやら、馬2頭が運搬に必要らしい。

(なにやら、とんでもない物らしいの。)

(ああ、大砲だ。一発で1小隊を殲滅することも可能だ。)

(これが攻勢の切り札か?)

(あと9門・・・それだけあれば攻勢が可能となる。)

サリアも理解できないようだ。広域魔法による攻撃が可能なのは、世界には、魔法以外での広域攻撃は理解できないのかも知れない。

しかし、大砲は、魔道師の攻撃魔法よりも遠くから攻撃することが可能である。この意味する所は大きい。

午後になってセリーヌが5人を引き連れて来た。金属鎧の騎馬武者姿で・・・

大砲操作に鎧はいらぬ。客間で軽装にさせた後、兵舎の西に皆で歩く。

「これは・・・」

初めて大砲を見たセリーヌの感想である。

当然、この中で大砲を理解しているのは、私と製作者のドワーフ達だけである。

私は、大砲の車輪と後部の木台が固定されている事を確認した。この固定が不完全だと、発射時に反動で動き出すため危険である。

「固定はいいようだな。射高と射角は調整出来るのだな。」

「水平から45度、左右15度が調整範囲だ。それ以上は全体を動かさねば為らん。」

「それでよい。では準備するか。」

ドワーフが細長い布包みを持つてくる。そして、大砲の発射口から布包みを押込み、さらに木の部で強く中に押込んだ。

次に、丸い金属の球を大砲の中に入れて、また木の棒で同じように押込む。

大砲に手元の上にある小さな穴に金属棒を押入れ、最初に入れた布袋の上部に穴を開ける。

そして、小さな穴に火薬を充填する。・・・これで発射準備完了だ。

小さな松明・・・大砲の着火装置だ。それを持つとセリーヌを呼ぶ。「この松明をあゝ筒の上にある穴に触れてみる。」

セリーヌは松明を受取ると恐る恐る大砲に近づいた。そして、私の方を振り返り、私が頷くのを確認すると、着火薬に点火した。

「ドッゴーン・・・」

大砲の砲口から盛大な炎と煙が舞う。

「ドカーン!!」

遙か彼方に爆煙が上がる。

距離約4km・・・飛距離は問題ない。また手作りとは言え信管の作動も問題ないようだ。

「これが、お前達の武器だ。鎧は要らぬだろう、この距離では弓矢も届かん。」

セリー又始め、試射に立ち会った者全て無言だった。
戦に為らぬ距離からの一方的な破壊・・・それが可能な武器だった。

西からの強襲

一ヶ月半・・・攻勢の準備がほぼ完了となった。

シャープネス男爵の兵500。騎兵1000、騎馬ライフル兵500、弓兵900、魔道師100、そして歩兵2500。

民兵が3100。ライフル兵2500、機動ライフル兵500、80mmキャノン砲12門の砲兵100。

合算しても、1万に満たない兵で反乱軍を殲滅する。

それが可能なのは、弓の射程および攻撃魔法の飛距離を遥かに凌ぐ兵器の投入に他ならない。

ライフル銃の射程は単純に見て、弓の1.5倍、魔法の2倍となる。

また、大砲はキャノン砲に近い弾道を描き、その最大射程は5kmを越える。

反撃開始を真近と見た私は、商会のサラディン、獵師のアドモンに対して傘下の者達に帝国内の様子を探らせた。

それによれば、帝国内の反乱軍に対し敵対する勢力をほぼ制圧しているとの事であった。また、シャープネス及び隣のアルクテューについては攻勢の準備をそろえつつあり、兵力を順次2つの男爵領へ向けて移動しているとの事である。

反撃はマナル橋の完全掌握を目標とし、皇帝直轄領内に橋頭堡を築く。橋頭堡を確保することにより、アルクテュー男爵領への干渉を弱めると共に、アルクテュー軍の進出を容易にするためだ。

橋頭堡はマナル橋より南に約4km、タミール市との中間地点である。地形は畑作が中心となった丘陵地帯である。

現在、作戦の最終段階、決行日時の調整を作戦本部に姫と男爵を迎えて行っている最中である。

「決行日は明後日で問題は無いかと・・時刻は夜明け前ではいかがでしょうか。敵を撃破終了時刻には日も昇ることから陣地設営が容易に行えます。」

「夜明けを前の奇襲ですな。対峙する軍の規模は此方の2倍には届かぬかと・・奇襲による戦の優位性を考えれば十分に勝算がごございます。」

「將軍はどうお考えですか？」

男爵の問いにサリアはマナル橋に対峙するシャープネス軍歩兵千人を示す駒を男爵館に移動した。

続いて、騎馬ライフル兵100人を砲兵部隊の右に移す。

「シャープネスを留守には出来ん。ライフル兵の一部は遊撃隊として機能させたい。」

「そして、決行は深夜に行う。」

「『エエ！』」

「理由をお聞かせ願いたい。」

「単純な理由だ。兵を失いたくない。この先反乱軍の鎮圧には更なる戦が続くのだ。初戦で兵力を減らす訳にはいかん。更に、敵はこちらの兵力が少ないのを既に知っている。我々の奇襲を知り背後を突かれても困る。」

「次に深夜の攻撃だが・・もし、我々が相手軍であつたならと想定する。深夜に原因不明の爆発が自軍内で発生したら、どんな行動を取る？」

「現状維持なら、見方の負傷者は増加するばかり、反撃しようと

も相手がわからない、少し頭の切れる者なら後退して様子を見るだろう。しかし、反撃には至らない。何故なら敵の場所が不明だからだ。」

「この後退距離をなるべく取らせることで、無血状態で橋頭堡を確保できると考えるが・・・どうか？」

「では、砲撃だけで、橋頭堡が確保出来ると・・・」

「出来ると考えている。」

「今でも、橋の対岸には2千程の兵がおりますが・・・」

「本隊が攻撃された場合、前線部隊はその場に残るか？多分本隊を迂回するように退却すると思うが・・・」

「・・・」

「誰か意見のあるものは？・・・よろしい。その案で行きましょう將軍！」

男爵の了解が得られた。

ダダダ・・・と通路を走る音がして作戦本部の扉がバタンと開けられる。

ミールが顔を蒼白にしながら大声で告げる。

「大変です。アルクテュー男爵領から反乱軍が向ってきます！！」

「アルクテュー軍が敗退して居城に入ると、アルクテュー軍を無視して此方に向っているようです。」

「ナナイ、ミゲル後を頼む。」

私はそう言うと言戦本部を後にした。

通路を走ると、広場に出る。警備兵のハルベルトを取り上げると半重力装置を作動させる。

「どちらへ？」

ミゲルが息を整えながら尋ねた。どうやら慌てて私を追ってきた

らしい。

「レニ河に架かるスザン橋だ。あそこなら大軍を食い止められる。」

「お1人ですか？」

「私なら間に合う。後から兵を頼む！」

私はイオンクラフトを最大出力で水平移動を開始する。西へ、西の街道の要衝スザン橋へだ。

時速100km程の速度で街道を走りスザン橋に辿りつく。

まだ、反乱軍が見えない所をみると、危機一髪で間に合ったようだ。

橋の中程に立ち、対岸を見据える。

しばらくすると対岸の街道の先に土煙が舞い立ち、みるみる此方に近づいてきた。騎馬部隊である。

私は体を50cm程上昇させ、ハルベルトを構えた。

数百騎の騎馬は対岸の端の袂で停止した。その内の1騎がカツカツと蹄鉄を石橋に打ち付けながら私に近づいてきた。

「これは、これは勇ましい・・・シャープネスは穴に簞つた鼠ばかりと思っていたが、たった1人で我が軍を阻止しようとは・・・」

「しかし、それは蛮勇と言うもの、我が軍の前にひれ伏すが良い！」

口上を述べ行き成り長剣を抜くと私に打ちかかる。

バシュ！ハルベルトが翻り騎士の体が両断される。

それが合図となったのか、敵の騎馬が一斉に突っ込んでくる。私は素早くハルベルトを先頭を走ってくる騎兵に投げつけた。

騎兵の鎧を付きぬけ重いハルベルトの慣性で後ろにドタッとふきとばされる。

それに驚いた馬達が前足立ちになった。

その僅かな隙について腹部の装甲板を開きプラズマ・ソードを出す。と両方の柄を合わせ両端にプラズマの光条を持つ杖を作り出す。プラズマ・ソードを風車の様に回しながら騎馬武者の中に切り込んで行く。

シュン、ヒュン・・・という乾いた音が響き渡る。そして静寂が訪れる。

反攻開始

橋の上に敵兵の遺体が累々と横たわる。

目を上げると、彼方より後続の部隊が遠くに見える。

私はハルベルトを敵兵から引き抜くと、再び橋の中央に再び立つた。

敵はどうやらマナル橋を挟撃するために騎馬による奇襲を目論んだらしい。

後続の部隊も、先鋒と同様に騎馬隊である。

後続隊は橋の袂で急停止すると、此方を伺っている。

先鋒部隊が唯1人により全滅しているのを見て、たじろいだようだ。

一騎が橋を渡って来た。

「我は、ドロイア男爵の配下にて、騎馬を預かるケーニスと申す。この働き、シャープネスにてさぞや名のある御方とお見受けする。御名を名乗られたまえ。！」

「我は、ジュリアーナ皇女の客将にて、ロディと申す者。この橋、渡らんとするは全て冥府に落ちるものと心得よ！」

「しかし、先鋒の亡骸を収容する分には手出しはせぬ。」

私は体を騎士に向けたまま、数十cm程体を上昇させ、イオンクラフトの水力を絞りながら橋の手前まで移動した。

「かたじけない。」

彼が左手を上げると、10騎程が橋に入り、先鋒の亡骸を馬に乗せる。彼らが袂に戻ると、次の1隊が橋に来る。

先鋒の亡骸を全て收容し終えたことを見届けて、私は橋の中央に移動する。

「さて、ケーニス殿。決断は如何に？」

「先鋒の300騎を1人で倒す御仁に無駄な戦はせぬ。何れ戦場で合間見えん！」

後続部隊は橋を後に走り去った。

（首尾は如何に・・・）

サリアより念話が届く。

（とりあえず、騎馬隊は去った。マナル橋に変化はないか？）

（無い・・・反攻作戦は延期か？）

（いや、予定通り実施する。例の件は？）

（案ずるな・・・リオが予定通りに尾行している。もうすぐ援軍が着くはずだ。帰って来い。）

後方から騎馬の音が近づく。どうやら援軍の到着らしい。

スザン橋の守備を騎兵500騎に任せると、急いで作戦本部に急行した。

私が作戦本部に入ると、居合わせた人々が一斉に顔を向けた。

私が何も告げずに出かけた理由はミゲルが説明しておいたのだから、余程不安だったのか姫の顔色は青ざめている。

「サリア様が作戦の再確認をしたいと申しております。」

サリアを見ると、私に向って軽く頷いた。

私も、軽く了承の合図を送ると、作戦地図に近づいて、指示棒を手を持つ。

「さて、予定外の攻撃を受けた為、スザーン橋に騎馬隊を500取られた。」

ミゲルが騎馬隊の駒を5個、スザーン橋に移動する。

「しかし、騎馬隊は速さが武器、あまり夜間の戦には役に立つまい。よって、攻撃時間は明日夜半とする。」

「「ええ！！攻撃開始は明後日では？」」

突然の決行日の変更本部内は騒然とする。

「明後日では遅すぎるのだ。その日は敵が手薬煉引いて我らを待ち兼ねているだろう。」

「先の打ち合わせの後、今此処に居ないものは誰か？」

本部内の者達がお互いの顔を見合わせる。

男爵が気付いた。

「先ほどまで居た、ソロンとギネスは何処に行った？」

「西より強襲の知らせを受けた後は姿を見せませんが・・彼らの事です。スザーン橋へ向ったものかと。」

仕官の1人が同僚の不明について私見を述べた。

「私は、援軍500騎以外の騎馬を見ておらん。彼らの行った先は此処だ！」

私は指示棒で黒の森を指した。

「彼らは我等を売ったのだ。彼らは大砲の攻撃力を知らん。すると売るべき情報は唯1つ。攻撃の決行日と時間だ。」

「敵の防御準備が整わない明日の夜に攻撃を開始する。」

突然本部の扉が開き、ミーナが息せき切って入ってくる。

「將軍。森の熊さんから連絡です。（子犬2匹は豚に着いて行く）

です！」

「諸君。上手く事が運びそうだ。2人は反乱軍と接触し、彼らの軍に入った。」

私の言葉に本部内の者は言葉も出ない。

「しかし・・・將軍。そこまで考えて行動するのですか。たとえ知られたとしても此れだけの準備があるのです。勝利は間違いないと思いますか・・・」

部下の内通にショックを受けたのか、部下ではなく私への叱責とも取れる発言である。

「私は、見方を失いたくないだけだ。その為には、疑う必要の有るものは全て対処する。」

「では至急準備せよ！！！」

仕官達が次々と席を立てて各々の部隊に帰っていく。

「さつきは済まなかった。私としても部下の命は大切だ。しかし、ソロンとギネスは未だ若い・・・何とか無事だと言いのだが。」

「それは、彼らの運次第。彼らの選んだ道を間違いとするのは如何なものか・・・あるいは彼らにも義があるのだろう。」

「そうですね。では、明夕刻にご一緒しましょう。」

サリアと共に戦術室に行く。そこにはセリーヌ達砲兵隊の仕官が戦術の最終確認の最中であつた。

彼女達はコンパスと分度器で、複雑な幾何学模様を地図に描いている。

事前の三角測量で敵の配置位置は判明している。初弾は一斉射撃で敵中心部を叩くが、その後の攻撃目標については、敵の分散を予測出来ないため、予め複数の攻撃目標を定めランダムに攻撃する事を考えているようだ。

「セリーヌ。敵の位置がわかれば攻撃は可能か？」

「将軍がどのような意味で言っておられるかはわかりませんが・
・現在地と攻撃目標までの角度、距離がわかれば、一斉射撃での散布界に目標を入れることは可能です。」

散布界か・・確かに弾着が同一では意味がない。多数の同時砲撃で、ある程度バラつく弾着により目標を叩く、このバラつきの範囲が散布界だ。

彼女達は全体攻撃魔法の効果範囲と言うような認識を持っているが、その例えは極めて近いものだと思っている。

「実は、此处に2名ほど砲撃観測が可能な者が忍んでいるのだ。」

私は、敵の陣地の2kmほど東を指差す。

「丁度、私達の陣と半分ほどの距離で、しかも三角形を形成できる！・・将軍。私達に情報を提供してください！！」

「では、ミールに頼むと良い。この者たちの情報は全てミールが束ねている。ミールと連絡する手段を確保すれば、彼らを利用する事を許可する。」

「ありがとうございます。」

セリーヌは仕官の1人を直ぐにミールの居る情報室に走らせる。

（それで、サリアはどうするのだ。）

（われは、眷属とともにこの部隊に居るつもりだ。）

（エリーヌはどうする？）

（連れて行く。見習いとは言え神官職。弔いの真似事ぐらい出来るよう。）

（後で、ミゲルに護身銃を届けさせる。）

「セリーヌよ。この部隊の後見者として姫とサリアそれにエリーヌを同行差せて貰いたいのだが。」

「姫様がですか？・・よろしいのですか。あの武器は物凄い音が

しますよ。」

「かまわない。姫の近衛ナナイの部隊は騎馬100で付近に待機する。」

「我々の武器はあれ以外にはこれだけですから安心できます。」
彼女はそう言って、腰つけた護身銃を叩いた。

次の日の夕刻、私とサリア以外は日のある内に夕食を取り、馬車にてマナル橋に向った。

途中で男爵の馬車と合流する。マナル市は厳戒態勢は取っており、今夕は早くから市の門を閉ざすよう衛兵に伝えている。

所定の場所で私は別行動となる。サリア達砲兵部隊の所定の位置はマナル橋手前1km。その右側にナナイの近衛騎馬兵100騎が整列する。

私はミゲルと共に機動ライフル部隊に合流する。
早速、ミゲルにアレス、トロア、ヘイムを集合させ最終調整を行う。

全ての準備が整った事を確認し、ミゲルに合図を頼む。

ミゲルは我々から離れると、腰から大型の拳銃を取り出した。

彼は、大きく深呼吸をすると腕を頭上に高く掲げて銃を撃った。

バン・・・・・・・・ボォーン！

銃から放たれた低速弾は、頭上100m程上昇した所で破裂し大きな花火となった。

「合図だ。発射！」

ドドドドォーン！

セリーヌの命令で12門のキャノン砲は一斉に火を噴いた。

数秒の間があり、遠くで火柱が上がる。やや遅れてドドオーンと炸裂音が我々に届いた。

「次弾装填準備！」

1門辺り6名の女性兵士が忙しく次弾の発射準備を整える。

（ミール。次の目標は何処？）

（現在確認中・・・次は、左1度、距離200。）

「目標修正。左1度、距離200。繰り返す、左1度で距離200だ！」

砲手が目標を指示に従って修正する。

「準備次第、各個に撃て！」

ドン・・・ドンドン・・・ドン・・・

12門の砲が散発的に発射される。

「次弾装填準備！」

セリー又は次第に高ぶっている自分に気が付いた。この反乱軍への攻勢の初撃は私達の部隊によるもの、そして私の命令によるもの・・・それだけで、いままでの冷遇された騎士生活を忘れることが出来る。これからは、私達の時代が来ると。

夜襲と橋頭堡

夜の大地遙か遠くに爆炎が上がる。

しばしの静寂の後、再びそれは繰り返される。

遠く、近く・・・右に、左に・・・

「発射！」

ドドドオーン！！！！

セリーヌは、射撃の回数を左手の指で数える。

開いた指が全て閉じ、そして全て開いたことを確認した。

「砲撃止め！・・・信号弾用意！」

セリーヌの従者が信号銃に信号弾を装填する。

「信号弾発射！」

従者は右手を頭上に伸ばし、信号銃を発射した。

「次弾装填開始。目標修正、距離500、左10度」

ヘイムは爆炎の上がる大地を見ずに、ずっと橋の右手後方を見ていた。

そして、彼への合図となる花火を確認した。

「行け！」

短い命令に従い、20人程の黒装束の民兵が木箱を抱えて橋へ走る。

橋にある馬車等の障害物に木箱を据えようと、木箱から伸びた火縄に着火して立ち去った。

「乗車！銃剣付け！」

あらかじめ、機動ライフル兵は馬車に乗車していたが、この命令

は心の準備のためでもある。そしてライフルのバレル先の銃剣を確認する。

銃剣は必要時にのみ取り付けできるよう筒の先を槍状にしたもので、バレルの先に被せてねじで止めるようにしたものだ。

そして、マナル橋は爆炎と炎に包まれた。

すかさず、橋の左側より、アレス率いるライフル部隊が一斉射撃を繰り返す。

「行くぞ！」

ヘイムの命令一喝、機動ライフル部隊は馬車をマナル橋に走らせた。

ガラガラ・・と馬車がマナル橋を通過する。

アレスの部隊は最初の馬車がマナル橋を通過する直前まで援護射撃を続けていった。

「射撃止め！」

その命令は、従者の持つ松明が大きく振られる事で、各隊を指揮している士官に伝えられた。

300人を3段に構えた陣の射撃がぴたりと止まる。

「バレル清掃急げ！」

各隊員は次の行動に備え、一斉にライフル銃の点検を開始した。

先頭の馬車に乗ったヘイムは、馬車が橋を通過する前に従者に信号弾発射を命令した。

橋の真上高く上がる花火を待っていたのは、セリーヌである。

「発射！」

殆ど水平角度で発射された弾丸は、ヘイムの部隊を掠めるように敵陣に飛び込み盛大な火柱を上げる。

弾種は火炎弾である。爆発力よりも火災を誘発させるための弾丸であるが、爆発後しばらく周囲に粘着質の火炎が継続する特徴持っている。今回は、夜間の照明用に用いたのだった。

「攻撃開始！」

ヘイムの機動部隊は火炎弾の明かりを頼りに敵陣に突入する。マナル橋の圧力を掛けるためマナル橋後方300m程の所に築かれた敵陣の手前で一斉に降車し、ライフルを構えて突入する。

バン！・・・バンバン・・・バン！

敵兵に対し無慈悲に銃弾を浴びせながら敵陣を蹂躪していく。

「死んでいる事を確実に確かめろ！動いているものには銃弾を浴びせろ！・・・倒れているものは槍で突け！」

夜間の襲撃である。しかも見方は民兵。反撃を無くす為にも、確実に殺す必要があった。

火炎弾の炎が燃え尽きるころには、敵陣を確保する事が出来た。しかし、機動歩兵の損害もあった。今回の襲撃にあたり、優先的に銃剣を配布したのだが、剣と銃剣の戦いではやはり剣に分があるようだ。

幸いにも、深手を負ったものの死者が出ていない。

従者に見方への合図を送らせる。そしてミゲル達は次の作業にとりかかる。

「総員、かれ！」

隊員は馬車から杭、ロープ等を降ろすと、馬車列の前に低い柵を作り始める。敵の騎馬隊を阻止するためのものだ。

敵陣の機材も有効に使わせて貰う。

橋の対岸奥に上がった花火を合図に、トロアの部隊が進軍する。
ヘイムの部隊の右側に斜めに布陣を完了すると、ヘイムの部隊から信号弾が上がる。

その信号弾を合図に進軍したのは、アレスの部隊である。
アレスはヘイムの左側に、やはり斜めに布陣する。
そして、アレスの部隊も布陣終了の信号弾が上がる。

また1つ、対岸に火炎弾が炸裂し、続いてライフルの射撃音が木霊する。

「どうやら、マナル橋向うの陣は手に入れた模様ですな。」

「此处までは、計画通り。後は、橋頭堡作りに移る。」

「それは、我が軍で行いましょう。あそこで睨みを利かせてくれるなら、容易に出来ると考えております。」

「お任せする。橋頭堡が出来れば、アルクテュー軍への圧力が弱まる。」

未だ明けない空を眺めながら男爵と打ち合わせを行う。

昼はシュペール軍が主役だ。今夜の首尾を見て彼らの興奮する様子は手に取るように判る。

男爵の命令一過、騎馬隊はなだれ込むだろう。

既に、騎馬隊は準備を整え、男爵の合図を待っている。

更に、その後ろには歩兵2千が拠点構築の機材を満載した馬車を率いて待機している。

東の空が白み始め、モノトーンではあるが遠方の見通しが可能となった時に、男爵の命令が下る。

「進撃！」

「ウオォー……」

男爵の低いが良く通る声を聞き、全軍が歓声を上げる。

たちまち、騎馬隊は橋を渡ると民兵軍を迂回し、前方に掛けていった。威力偵察を行うためである。

歩兵は馬車と共に歩みだす。安全が確保されているのでその進軍速度は比較的早い。日が昇り出す頃には橋頭堡を築く目標地点に到達した。

馬車より資材を下ろし、素早く橋頭堡を築き上げる。

橋頭堡は、簡易な居住区画を中心とした平城である。城ではあるが、土塁は壕を掘った土を持っただけであり、土嚢で高さ増している。それを3方に造り、後方は移動柵でシャープネス領との補給路を確保している。

壕の前には低い柵を2段に設けて騎馬の突撃を防ぐ手立てとしている。

橋頭堡の作成は歩兵が行い、その間の守りはライフル騎馬隊が周囲を睨んでいる。

私は板を組み合わせただけの居住区画の1室に移動した。

そこには、男爵が仕官数人と地図を広げていた。

「此処までは、完璧に進んでいます。騎馬の報告では、敵の姿はこの範囲には見かけないとの事です。どうやら退散したものかと判断しますが・・・」

男爵は地図を指で示しながら説明する。

「この橋頭堡も後しばらくで完成するでしょう。・・・ところで、1つ確認したいのですが、・・・周囲の柵が壕より大分離れているように思うのですが、これは如何なる目的があるのですかな？」

「単純に、柵に近づいたら撃て！と命令するためだ。ライフル兵と柵までの距離は250m。弓も魔法も届かない。届くのはライフルだけだ。」

「目印でしたか・・・」

「橋頭堡が出来次第、キャノン砲を移動する。姫も砲と同行する

手はずだ。」

「了解しました。それと、救護所に医者が到着次第、先鋒の負傷者の手当てを行いますので連絡をお願いします。」

「了解した。ミゲル。ヘイムへ連絡頼む。」

居住区より外に出ると、見張り櫓を兵が立ち上げている。

柱を3本三角形にくみ上げた極めて単純な構造だが、敵兵までの角度を計測出来ればそれで良い。

この櫓を頂点に簡易櫓を更に2箇所設置する。3箇所の櫓の距離と角度をあらかじめ計測することにより、敵に的確な打撃を与える事が可能となる。

昼近くに橋頭堡は完成し、姫を迎えることが出来た。

キャノン砲部隊は、橋頭堡の後方に砲を連ねる。丁度、昨夜築いた仮設陣地との中間地帯だ。

そして、橋頭堡に来客が訪れた。アルクテュー軍の騎馬隊だ。

騎士が3人、居住区の作戦室に入ってくる。

我々に礼をすると、来訪の目的を語り始めた。

「反攻開始の緒戦を飾り、おめでとうございます。今回の勝利のおかげで、スザーン橋の敵兵が後退しました。我々はスザーン橋の出口に陣地を築き、再度の侵攻を防ぐつもりです。」

「スザーン橋の防衛は此方からも協力できる。共に反乱軍を叩こうぞ！」

「男爵も、直に歩兵2千を率いてスザーン橋に参る手はずです。今後の手筈はその時に。では、失礼！」

「何故に、スザーンを引いたのか・・・」

「簡単だ。この橋頭堡とスザーン橋のアルクテュー軍に挟撃され

る。しかも理解出来ない攻撃を、だ。」

「では、昨夜の砲撃に恐れをなしたと・・・」

「多分。しかし、先を見る事が出来る士官が居る。ということだな。」

「昨夜の砲撃はそれほど効果が有ったのでしょうか？」

「少なからぬ損害を出したと思っている。問題は敗走した反乱軍が何処に行ったかだ。マナル橋の対岸に布陣した軍隊とスザン橋対岸の軍隊、どう見ても4万は下らない数だ。昨夜の砲撃と夜襲で3千は潰したとしても、残り3万5千以上の兵が居る。その行き先を知らぬ内は此処から動けん。」

「それで、このような多重防護を・・・」

「そうだ。民兵が出来たぐらいだ。軍隊が出来ない筈がない。・・・今夜来るぞ。」

今、働いているのはシャープネス軍だ。民兵達は後方でテントを張り休憩している。彼らが起きるのは日暮れ過ぎになる。

夜襲に備えて今は眠る。

敵の夜襲（１）

騎馬兵が周回探索から帰ってきた。日暮れ前の最後の探索である。昨夜の夜襲の後、ぶつとりと反乱軍の消息が途絶えている。念のために、タミール市に潜伏したりオの部下に市内の反乱軍の様子を調べさせた。

それによると、今朝早く2万程の兵士が多数の負傷者を連れて帰還したとのこと。

では、残り2万の軍勢は何処に行つたのか・・

「將軍。シャープネス軍と防御陣の交換は終了しました。」

ミゲルが橋頭堡の陣を一回りして報告に来た。

「篝火の準備は？」

「指定の場所に設けました。火薬を塗してありますので、火矢で着火可能です。」

「地雷は？」

「3方向に1個づつ仕掛けてあります。」

「本来は、何千個と仕掛けるのだが・・今回は警報機代わりだ。夜襲の方向が判るだけだ。」

「それでも、従来にはなかった仕掛けです。十分役に立ちますよ。」

「とりあえず、兵を3つに分け順番に休息させろ。夜は長い、気が持たん。」

私は仮の作戦室を出ると、今夜橋頭堡内にいる唯一のシャープネス部隊の指揮官に合った。

「本来は休息なのだが、迷惑を掛ける。」

「いえ、將軍の作戦を真近で見ることが出来、光栄に存じます。」

「20名ほどであるが、問題ないか？」

「経験と技量で部隊の中からよりすぎた者達です。問題ありません。」

彼らの出番は襲撃時に襲撃方向の篝火を火矢で着火することだ。篝火迄は150m程ある。夜間の遠矢の腕の見せ所ではある。仕官と合図の確認を行った後、後方の砲兵隊に足を伸ばす。

セリー又達は、砲列の後方に多数の天幕を張り其処で休息していた。

その中の大型テントに彼女達の司令部がある。警備兵が私の来訪をテント内の告げる。

「状況の共有に来了。此方の準備は？」

「4門づつ3つの分けて待機中です。個別、集中どちらも実施可能です。」

「連絡は？」

「リオ仕官配下の監視兵が方角を知らせてくれます。私の部下がの角度を距離、方角に換算し直します。」

「では、1隊を川下方向にあらかじめ指向しておけ、水平砲撃で弾種はブドウ弾だ。」

「黒の森！」

「そうだ。騎馬偵察隊は丘陵地帯を重点に搜索している。しかし、森には近寄っていないのだ。」

「それと、全員に護身銃を持たせておけ。近接戦闘ではキャノン砲は役にたたん。」

「了解しました。……姫様は橋頭堡にお移した方が宜しいかと。」

「それには、およびません。……魔法も使えますし、ここでお役に立てると思います。」

（案ずるな……私が居る。）

（期待する……）

セリー又はただちに部下を使って、砲兵達の護身銃の確認をさせるとともにカートリッジを多めに配布させた。また、急ぎ4門の砲を黒の森方角に方向の修正を行った。

陣営を一回りして作戦室に入った。

ミゲルとミゲルの配下が集まっている。

地図に橋頭堡と現状の民兵の配置を駒を使って再現する。

「黒の森はほぼ確定だ。しかし、それだけでは無いはず・・・」

「森へ兵を隠すことは良くあることです。でも、伏兵程度でしょう。多くは隠す事が困難です。」

黒の森に敵の駒を1千を配置する。兵種は多分騎馬兵だろう。狙いは後方かく乱・・・とすれば、連動して動く部隊は・・・
橋頭堡の正面に歩兵2千を配置する。右に2千、左に2千・・・

さて！・・・タミール市に戻ったのは2万と少し、昨夜の戦闘で3千減ったとすれば、不明な数は約一万五千。

今、地図上の敵兵は7千・・・

「ミゲル・・・あまり嬉しくないが、敵の意図がおおよそ判明した。」

「敵は、4方向同時攻撃を時間を空けて2回実施する腹だ！」

「そんなことが可能なのでしょうか？連携攻撃を夜間実施することは極めて困難です。」

「だが、我等はそれを実行し、今此処にいる。彼らに出来ない事は無い。」

「この陣形で耐えられますか？」

「可能だ。ナナイに知らせる。黒の森側の強襲を防御できる体制を組め！」

「スザン橋方向には機動ライフル隊を配置しろ。ヘイムの残りの部隊は、予備として、アレス、トロアの軍を援護させる。」

ミゲルの指示で部下達は連絡に走る。

（面白くなってきたな）

（面白いものか・そこは、河の上と下から挟撃される。機動ライフル隊を増援に送ったが、一番の激戦区になるぞ。）

（望むところよ。ところで、後ろの男爵への連絡はどうする？）

（ナナイから連絡が行くだろう。しかし、敵は後方ではなく此处を狙ってくる。）

飯の作戦室を出て居住区画の屋根に上る。

そこに設えた第2の見張り台に上る。周囲は板で囲われており、流れ矢にもある程度耐えることが出来る。また、周囲の土塁等が低いため、周りの見通しもよい。

ここを、司令部とすべくミゲルと数人の配下を回りに置いた。

聴音機能をMAXにする。大勢の兵が草を踏む音が騒音に混ざりながら聞こえる。しかも3方向からだ。

視覚を赤外線に切り替える。兵の体温が重なって赤い帯が遠くに見える。

いよいよか。

「ミゲル。夜襲が始まる。全員に戦闘準備指令を出せ！そして、命令次第全ての篝火を火矢で点火するよう弓隊に連絡せよ！」

ミゲルの指示で、2人が急いで司令部を降りていく。

距離はおおよそ2km程度、現在ゆっくりと近づいている。

更に近づく、およそ500m・・・

「ミゲル、来るぞ！」

ウオオオオー！！

喚声が3方向から上がる。直ぐに地雷の紐を敵が引っ掛けて信管を作動させる。

ドン！

地雷が爆発し周囲を火炎が照らす。この地雷は火薬の下にタールを入れており少しの間周囲を明るく炎が照らし出す。

バン！・・・バン・・・バン！

アレスとトロアの3段構えの銃列が規則的に弾丸を打ち出す。

そして、流星のように火矢が飛び、篝火を点火させると・・・

そこは敵兵の海だった。

バン！・・・バン・・・バン！

ライフル銃は敵兵に的確に命中していく。

ドドドン！

前方500m程に火炎弾、炸裂弾が炸裂する。

そして、敵兵の奥が見える。そこには誰も居ない。・・・密集陣形による攻撃だ。

「ミゲル、各方面に連絡。敵は密集体形、奥が無い。今を乗り切れば終了だと！」

また、ミゲルの部下が走っていく。

バン！・・・バン！

銃撃音に間隔が開く・・・バレルの清掃だ。これはどんな時でも10発撃てばしなければならない。

この間の射撃はヘイムの軍が担当するが数は一気に10分の1に

なる。

この間も、セリーヌの砲列は火炎弾を周囲に炸裂させ、敵兵を闇から浮かび上がらせている。

このままで大丈夫だろう。と考えた途端、後方のセリーヌ軍が気になった。

私は指揮をミゲルに預け、セリーヌ軍の状況を確認すべくハルベルトを掴み、屋根を飛び降り後方に走った。

砲列に近づくにつれ、ライフル銃の音とそれより小型の銃が発する音等が入り混じった喧騒が響いてきた。

そしてキャノン砲の発射炎でそれが明らかになった。

挟撃状態をナナイとヘイムが必死で防いでいる。

敵の上空には魔法の光の球が何個も浮んでおり、その下の騎馬隊を照らし出している。

その敵に向って銃を発砲しているのだが、彼らは3段構えで応戦しているのではなく、1段発砲組みと個別発砲組みに分かれて発砲しているのだ。

集団には集団で、個別に切り込んでくるものには個別に・

それは、この場では有効に作用している。

そして、遠距離攻撃方法を敵が持っていないことも幸いしているようだ。

セリーヌを見つけると、この戦闘が終わると直ぐに次が来るぞと念を押して、再び仮の司令部に急ぎ戻る。

「將軍。ほぼ敵の夜襲を食い止めたようです。見方の損害はありません。」

「よし。次が来るぞ。急ぎ銃のボルトの掃除を行い、カートリッジの補給を行え！」

「それと、お前達も、護身銃を持っているな。カートリッジも有

るだけポケットに入れておけ。」

部下が命令伝達に走り去るのを眺めながらミゲルを近くに呼ぶ。

「女供は上手くやっておるぞ。得に魔法による照明があるとは知らなかった。次の襲撃は地雷が使えない。篝火もだ。弓兵による火矢が唯一の方法だが、如何したものか・・・」

「照明ですか・・・我々にも魔道師が必要ですね。しかし、今の状況では・・・」

そこに部下が木箱を持ってきた。

「ミゲル様。信号弾のカートリッジをお持ちしました。」

「！・・・それはもつと有るのか？」

「今回の作戦では木箱2つ。仕官の持つ信号銃に10回分です。」

「この仕官は3人か。では全部配って戦闘時に打ち上げる。無いよりましだ。それと、篝火の残りで急ぎ松明を作れ。」

「了解しました。」

さて、次の攻撃はどの程度後に行われるのか。

直ぐか・・・それとも油断させるために夜明けか・・・

敵の夜襲（2）

ミゲルが闇の奥をずっと見据えている。

まだ薄明には遠く、満天の星空は淡い銀河を映し出している。その中には我が同胞がトカゲとの絶滅を掛けた戦闘を続けているはずだ。

しかし、私は今、この世界の反乱軍を撲滅させるための戦いに参加している。規模は小さいが戦う意義は同じだと思っている。

「どうした。まだ敵は来ぬ、張り詰めると気疲れするぞ。」

「いえ・・・はい。でも、待つのは疲れますね。」

「そうだ。それが敵の狙いでもある。」

「でも、何故敵は攻めて来ないのでしょうか。もう、随分と立っていますか・・・」

「私も、それが判らんのだ。此方の隙を突くならば、もうとつくに戦闘に突入している。・・・我々の気を読んでいるとしか思えん。」

（気付いたか・・・）

（何がだ。）

（相手がこちらの覇気と呼んでいる事に・・・）

（そんなことが可能なのか？）

（可能だ・・・ここは、魔法世界。お前の常識と我らの常識は少し異なるようじゃ。）

（では、敵が攻勢に出ないのは、我々が迎撃準備を整えて待ち構えているのを知っているというのか？）

（そこまでは、判らぬだろう。しかし、我らの陣に気が立ち込めているのは判るはず。よって、攻撃すれば熾烈な迎撃を受ける事が判るのだ。）

（では、朝までこのままか・・・）

（夜襲を受けたいか？）

（出来ればある程度の決着を付けたい。倒せるものは倒せる時に倒す。）

（判った。・・では我が一時的に結界を張ろう。直ぐに結果が出るぞ！）

「ミゲル・来るぞ！皆に知らせろ。それと、セリーヌの合図で前方に信号弾を発射しろ！」

「はい。」

「私は姫の所に行く。あそこはヘイムの機動ライフル隊とナナイの部隊しかおらん。ここは、一応二千の部隊がいる。指揮を頼むぞ。」

「判りました。気を付けてください。」

私は仮司令部を飛び降りた。ミゲルも部下に指示を飛ばしている。ミゲルはどちらかと言うと慎重派だ。防戦の指揮は十分に取れるだろう。

セリーヌの陣に行くと、キャノン砲の列は3つの方角に向けられていた。

川上、川下、そして正面だ。

「將軍。間も無く始まると聞きましたが・・」

セリーヌが私を見るなり問いかける。

「ああ、始まるぞ。弾種は？」

「河の側面はブドウ弾。正面は火炎弾です。」

「それでいい。全員に護身銃は持たせたな。」

「確認しました。万が一を想定し、姫様にもお持ち頂いております。・・でも、サリア様は・・」

「サリアは良い。十分に戦える。」

ヘイムは、500人を2段に構えた陣形を組んでいた。

馬車を即席の障害物として横たえており、今までの時間を利用して簡単な柵を前方に作っていた。

馬車の合間からキャノン砲が首を出せるようになっている。

「ヘイム。兵を100ナナイに付けられるか？」

「判りました。サムズお前の隊をナナイ殿の援軍に回す。いそげ！」

兵達は後ろ側に走り出す。

「すまん。その代わり、彼女達は最初の1撃の後、その場で援護してくれるはずだ。銃の威力は小さいが連発だ。」

「それは頼もしい。後で軽く打ち合わせときます。」

ヘイムに砲兵達の面倒を頼むとナナイの騎馬隊に足を向ける。

ナナイ達は馬を後方にまとめ、低い柵を2重に組んだ後ろに地面を掘り下げて陣を張っていた。

彼らの持つライフルは片手撃ち用だ。持ち回りはし易いがその分威力は落ちる。

乱戦になる覚悟で全員が長剣を装備している。

サムズの隊はキャノン砲を中心に陣を張っており、着剣も済んでいる。

砲列の前に立ち前方を見る。

視覚を赤外線モードに変更する。さらにサーマルモードを選択する。

視界がモノトーンになり、更にカラーに変化する。しかしこの色は温度差を色に修正したもの、僅かな温度差を鮮やかに表示する。視界の奥に、赤に点が無数に現れる。

「敵襲！」

私の声にセリーヌは持っていた信号銃を頭上に掲げ発射した。

バシュ！・・・ドォーン！

それを合図に信号弾が5箇所から発射される。

ドォーン！

花火の爆発で一瞬周囲が明るく照らされる。

バン！・・・バン・・・バン！

橋頭堡から規則的にライフルの発射音が聞こえてくる。

3段構えの発射音だ。

ドドドォーン！！！！

セリー又達が橋頭堡からの指示でキャノン砲を発射した。

前方遙かに火炎が立ち上る。間を置いてバァーンっと言う破裂音が聞こえてきた。

不意に上空に光球が舞い上がる。1個、2個・・・5個そして、

2方向に飛び去り、川上と川下側を照らし始める。

姫達の魔法だ。これで、銃の照準が容易になる。

そして、その時が来た。

ウワァー！！という叫びと共に、何百という騎馬が突進してくる。

最初の騎馬が低い柵に足を取られ落馬する。

「発射！」

ドドドドォーン！！

キャノン砲の水平射撃しかも、ブドウ弾だ。名前は美味そうだが、散弾を葡萄のように束ねたことからでた言葉で近距離での威力は絶大だ。

散弾を横薙ぎに受けた騎馬が一斉に吹き飛ぶ。後には、馬とも人とも判らないほどに損傷した遺体だけだ。

キャノン砲を盾にして砲兵達の護身銃が火を噴く。

30名程の砲兵だが2連銃であることから連射が利く。敵を怯ませる位の事は可能だ。

続く騎馬の群れに、ナナイとサムズのライフルが火を噴く。

バン！・・・バン！・・・バン！

兵の数が少ないことから、2段構えで応戦するため、弾の間隔が少し開く。

後方が騒がしい。

後ろを見ると、男爵の軍が動いたようだ。

ライフル騎馬隊を前方に展開すると、歩兵を楔型に前進させている。

敵の夜襲部隊が我らの後方に回り込むのを、ライフル銃で牽制している。

しかも、我らに流れ弾が飛び込めよう、ライフル隊を斜めに配置して、統一射撃をせずに個別に発砲させているようだ。

ライフル部隊の全体がつかめない様にする手立てを咄嗟に良く考えたものだ。

そして、ついに騎馬の一団が柵を破って陣内に飛び込んできた。

私は、素早く走りこんで馬上の騎士より高く飛びあがり、ハルベルトを一閃する。

ズン！という手ごたえと共に騎士が鎧ごと断ち切ったことが判る。そして、次の騎馬に走り寄る。

周りでは、槍と剣の剣戟がウワァーという音の中で響き渡る。

パン、パン・・・パン

砲兵の護身銃が発射される。至近距離では金属装甲をも貫通するだろう。

ドバーン！

騎馬の群れに火炎が襲い掛かる。

遠くでサリアが片手を翳している。彼女の魔法か・・・助かる。

私は彼女にハルベルトを掲げると、さらに騎馬の1人を馬ごと断ち切った。

橋頭堡の方から喚声上がる。

我が方の陣でも発砲音が散発になってきた。

防ぎきったか・・・空も薄明になる。もう直ぐ太陽が昇るのだろ
う・・・

ナナイ、とヘイムがやって来る。

「將軍・・・どうやら夜襲を防ぎきったようです。」

「ご苦労だった。至急点呼を取り、負傷者の手当てに当たれ！」

「はい！」

2人は別々に走って行った。

私はセリーヌの状況を見に行った。

そこは、砲兵隊というよりも仮設救護所と言った状況であった。

セリーヌの指図で負傷者が次々に運び込まれている。どうやら敵兵も混じっているようだが、戦闘終了後であれば見捨てるわけにもいくまい。

姫はエリーヌとサリアと共に魔法による簡単な治療を施していた。サリアと言えども全体治愈魔法は使えないように見える。一人、1人確実に治療を施している。

そんな彼女達に目礼して別れ、橋頭堡の作戦本部に士官達を集合させた。

「我々は敵の夜襲を2度跳ね除けた。」

「しかし、損害もある。よって、この橋頭堡を堅固なものとし、

敵の攻撃に耐えながら次の攻撃を図る。」

「各士官は再度点呼をした後、周囲の敵兵の損害確認せよ。また、黒の森の手前に穴を掘り、死者の塚を築け。以上だ。」

士官達が退席したことを確認して、ミゲルに告げる。

「ミゲル。・・ジュリーを此処に呼べるか？」

「可能ですが、なにか？」

「今回の戦訓を元に兵器の製作する。そのためだ。」

「了解しました。他になにか？」

「エリー又は神官見習いだったな。今回は兵の救護に非常に役立ってもらった。彼女のような治癒魔法の所持者がいれば数名欲しいのだが・・」

「私も、そう思って、既にミールに手配を依頼しております。では失礼します。」

昨夜の敵の夜襲により、敵を数千倒し、私は数十人を失った。

シャープネスより築城に必要な物資を運び込み橋頭堡を拡充する。

これは手間が架かるだけ我らの安全を高める。

そして、3日後、男爵を交えて反攻第1戦の戦いで戦死した者達を弔った。

死者に敵見方は無い。供に帝国の為に戦ったのだから・・・

北からの亡命者

あの夜襲から、2週間が過ぎると橋頭堡も単なる野戦陣地から城らしい様相を成してきた。

土を盛り上げただけの土塁も杭と土留めにより補強し高さは1mを超える。この上に分厚い松のような木材で壁を作り、至るところに狭間を設けてある。

橋頭堡の中は、本部となる2階建ての木造建屋と兵舎となる平屋を中央に設置し、見張り台は3箇所を設置した。

入口はシャープネス方向に設置し、内部への突入は大きく回りこまねば不可能とした。

現在、民兵が駐屯して、次の戦いの準備を着々と行っている。

今、橋頭堡の仮設本部のテーブルには、シャープネスの首脳が集まっている。

シャープネス男爵、姫、ナナイ、アルクテュー男爵、それに私とサリアだ。我々の後ろには士官達が詰めている。

「今回の反攻作戦はとりあえず成功したと考えている。この橋頭堡とマナル、スザーンの両橋を押さえれば我々への侵略はほぼ不可能と言える。」

「しかし、我々の軍は反乱軍の規模と比較して甚だ心もとない。そのため、ライフル、大砲を使用したか、今後を考えるとこれらの台数が少ないのが現状だ。これらの調達と習熟に2週間ほど攻撃を待ちたいのだが。」

「我々の軍は元々弱小な軍として評判でした。そのため一時はスザーンを奪われてしまったわけです。幸いにも將軍の助けで領内の蹂躪を避けることが出来ましたが、現状装備のままではあまりお役に立つとは思えません。」

アルクテュー男爵は30過ぎの若い風貌ではあるが、その言動は慎重派と言って良いだろう。

シャープネス男爵も似た所がある。この2人だけでは、何れは反乱の波に飲まれたはずだ。

「しかし、この度の、ライフルと大砲は目覚ましい働きですな。とても、民兵が操作したとは思えませんでした。」

「是非とも、我が軍に欲しいものです。」

「製作次第順次引渡しを約束する。しかし、操作の習熟に民兵を手本とした場合、軍人との軋轢が生じるやも・・・」

「その心配は無用です。もし民兵を教練の師とすることが出来ぬ輩は、軍よりはじき出す所存であれば。」

その時、ミゲルが来客を告げた。

ドワーフ達である。彼らには新兵器の製作を依頼しておいたのだ。どうやら仕上がったらしい。

「出来たのか？」

「うむ。片方はの。もう一方はもう少し時間が掛かりそうじゃ。

なんせ、試行錯誤の繰り返しだからの。」

「では、機動砲の試射は可能なのだな。」

「出来るぞ！玉も用意しておるしの。」

短い会話をした後、首脳の面々に向う。

「新しい、大砲が出来た。現在、セリーヌ達が使っている物ではなく、移動と速射を重視したものだ。試射が出来る、立会うか？」

「それは、是非！」

橋頭堡の外にその大砲は置いてあった。鉄の車輪を持った架台に横に2本の大砲が並べてある。

大砲自体は口径が6cmと小さく、長さも両腕程度である。また、

砲退機構は持っていない。

「これは、如何いう目的のもので？」

「素早く移動し砲撃を行う事に徹したものであり、ブドウ弾の連続発射を可能とするもの。為に飛距離は最大で2 k m程度。測量等を省いて直接照準で発射する。」

ドワーフ達が早速発射準備を行う。砲が小さい事から2名で容易に実施できる。

「発射せよ！」

バオン！・・・バオン！

南に向けて発射された弾丸は、1・5 k m程先に着弾して爆炎を上げた。

すかさず次弾を装填する。

掃除、装薬押込み、弾押込み、上部火口よりの火薬補給・・・

慣れればライフルを2発発射する時間で可能だろう。

「次弾発射！」

バオン！・・・バオン！

次の弾も同じ様に前方で爆炎を上げる。

「移動！」

ドワーフの弟子達が馬を2頭連れてくる。

馬の頸木に大砲の架台後方を押し上げて組み付ける。そして、手綱をとってゆつくりと周囲を移動する。

「発射用意！」

馬の頸木から架台を下ろして、また装填の容易を始める。

「発射！」

大砲から火炎と黒いものが飛び出していく。

「今のが、ブドウ弾だ。千個の鉄片が前方に飛び出す。騎馬突撃を容易に撃破可能だ。」

2人の男爵は声も出ないようだった。

「この大砲を各々の軍に6台ずつお渡しする。操作はセリーヌの隊が教えるので、早急に代表者をセリーヌまで出向けられたい。」

男爵達は、機動性に満足したのか互いに運用を確認しあいながら去っていった。

再び、仮設本部に入る。

「エルザと連絡を取り、火薬原料に入手に問題が無いか確認しろ。それと、ミールの方に変化が無いか確認しておけ。」

ミゲルが席を外すと同時にサリアが部屋に訪れた。

（やはり、魔道との戦いは不慣れであったか。）

（気配だけでなく、姿まで消せるとは思わなかった。）

（偵察を専門に行う部隊を設けるのだな。その中に、魔道師を入れるのだ）

（騎馬隊による偵察だけでは不足だと・・・）

（然り、魔道の行使は魔道師のみが察知できる。されど、魔法の種類別までは判らぬだろうがな・・・）

（それでも、無いよりまし・・・）

（姫経由で男爵より数名回して貰う・・・編成をして置けよ。）

その夜、ミール経由で、サラディンから至急の連絡が入った。

姫を伴って至急会談したい件があるとのこと。

ミールに館で待つよう連絡すると共に、姫、ナナイ、サリアを伴って夜の街道を馬車で急いだ。

橋頭堡の指揮はミゲルに任せてある。大打撃を受けた敵の反撃には未だ十分の間がある。

館の客間にはサラディンとつれの女性達が私達を待っていた。私達の来室に席を立ったため、まずは着座を促した。そして私達も座る。

小さなテーブル越しに互いに向き合う。

「実は・・・將軍に是非ともお願いしたい事があります。」

この大陸を舞台に国家間の柵を巧みに操りながら商売を続ける商人とは思えないような言葉である。

「男爵には知る由も無い事と思いますが・・・2日ほど前、サザーランド王国に政変が起きまして・・・」

「叔父上殿、私が話そう。・・・將軍、久方であったな。」

女性の1人がそう言って被り物を取った。

そこには、狼の巣穴で対峙した、サザーランド王国第2師団を統括するマリア將軍の姿があった。

「まずは、聞こう。」

「うむ。事の発端は父、サザーランド国王の急変だ。臣下との宴席で杯を傾けた途端苦しみだした。王宮の寝室でのその後は判らんが、直ぐに兄である第一王子が事態を收拾すべく動き出した。しかしその動きは、国政に発言力を持つ者達への襲撃だった。」

「大臣級から一族皆殺しの殺戮が始まった。兄からは私の軍へも協力要請が何度か来たが断った。そして今朝早く、私の館は兄の軍に囲まれた。私は、妹のテレジアと乳母の3人で近衛が切り開いてくれた血路を逃げ出てきたのだ。」

話終えたマリアはテレジアが震えているのに気がついた。

「どうした。ここならとりあえず安心できるぞ。いざとなれば私

が何とかしよう。」

どうやら、ただの震えではなさそうだ。その目はサリアを凝視・この娘は目が見えないのか。虚ろな眼差しではあるが、しっかりとサリアを見据え、そして震えている。

（娘よ・・・我を感じたか・・・しかし、臆するでない。我は害を与えん。）

（貴方様は・・・貴方様は・・・）

（どうかしたのか？）

（この娘の思念の強さは常人を遙かに凌ぐ。古の賢者級・・・である。よって、我の正体に気付いたと見える。さて、どうしたものか・・・）

「マリア將軍。あの時の対応見事であった。將軍が引かねば、私は更なる殺戮を行ったであろう。」

マリアは震える妹を抱きしめながら、私の言葉に顔を上げる。

「これから話すことは、サラディン殿も知らぬこと。しかし、妹君は卓越した能力で我らの秘密を知ったようだ。しかし、それは、私も理解できる。理解の範疇を越えるものは不気味に写ろう。」

「よって、此处で、我らの正体を明かしておく。驚きめさるな。」

私はそう言つて、胸部装甲板を開いた。

金属鎧が自動的に開き、その中を見たマリアが思わず口に両手を当てる。

「サリア。お前も甲冑の一部を開放しろ。」

サリアは事もあるうに、己の頭を取外した。そして、ヘルメットの中を3人に見せる。

「サリアは思念体だ。初代皇帝の思念を受け継いだ結晶体が腹部に収められている。そして、思念で周囲の甲冑を動かしているのだ。」

「マリアよ。妹君は我らを恐れているのではなく、初代皇帝の威光に臆しているのだ。」

「それに、サリアは妹君を賢者級と言って讃えているぞ。決して殺意を持っているのではない。」

「なるほど・・・一瞬で魔道師達を葬ったのも納得できる。しかし、テレジアがそれに気が付くとは・・・」

「目が見えずとも、見ることは出来る。」

「そうだ。不思議と周囲が判るようだ。」

「サリアも同じだ。目が無くとも判る。」

少しづつ妹の震えも納まってきたようだ。

「では、話を元に戻す。」

「我が陣営への亡命の意思ありと認めて良いのだな？」

「我は、妹共々將軍の元に亡命を希望する。」

「では、私はマリアとテレジアの亡命をここに認める。」

（我も、助けとなるう）

3人は、ほつと胸を撫で下ろした。

タミール市攻略（１）

私が亡命を了承したことで、室内にほっとした空気が流れる。

ミールが用意したお茶を飲む様子を見て、ふと疑問に感じた事を聞いてみた。

「失礼だが、確認したい。先ほどマリア將軍が貴方を叔父さんと呼んだ理由だが・・・」

「それは、マリア將軍の乳母が私の姉だからです。私は、今でこそシャープネスに住んでいます。元はサザーランドの下級貴族。政争に破れ・・・いや濡れ衣を着せられ国を追われ商人となりました。帝国、特にシャープネスは身分をそれほど重視しません。ですから私のような者が結構厄介になっておりますよ。」

「なるほど・・・能力主義か・・・しかし、この反乱は身分制度の復活だ。」

「それは、なんとしても阻止しなければなりません。」

姫の言葉に、マリア達は納得しただろうか？

しかし、この戦いに有能な指揮官は喉から手が出るほど欲しいことは確かだ。

「マリア將軍。私の元で１軍を指揮願いたいのだが。」

「それは、かまわぬ。もはや身内と呼べるものは妹のみ。ところで、妹の処遇は？」

（我の元に、置くがよい。・・・救護要員として我の知る全てを教授しよう。）

「わかりました。ご指導をお願いします。」

「テレジア・・・誰と話しておる。我にはまるで聞こえぬぞ？」

「サリア様の念話です。姉さま。」

「すると、我と妹は離れ離れとなるのか・・・」

「いや、戦闘時を除けば極めて近い。私はマリア將軍を機動砲兵部隊の指揮官として起用したいのだ。砲兵の通常勤務は部隊後方。そして、サリア達の砲兵部隊も後方だ。」

「すると、先程の救護要員とは・・・」

「戦闘終了後の砲兵達が今は実施している。なるべく早く独立させたいのだが・・・」

「所で、話は変わるが・・・サラディン殿、火薬の原料はつつがなく入手出来ているのだろうか？今後の戦いは大量の火薬を必要とする。何としても確保したいのだが。」

「問題ありません。いや、問題も生じないほど上手く事が運んでおります。それというのも、將軍・・・貴方のおかげなのですよ。」

「どういうことだ？」

「例の金貨です。あの金貨でなら想う物が手に入ります。反乱軍の貴族どもは慌てふためいておりますよ。今までの取引が一気に倍近い値段になりましたからね。」

「さらに、金貨を用意している。今後ともよろしく頼む。」

「さて、姫の了承は得られたと考えてよろしいですな。」

「もちろんです。今後の国のあり方を含めて、私はロディ將軍にお任せしております。」

「では、私の願いは聞き届けられたわけだ。マリア様、テレジア様、なにかありましたら私を頼ってください。」

館での会談は終了した。

私は優秀な人材を2名手に入れることが出来たわけだ。

1月後、装備の更新と軍の編成を実施した。

我らの軍は、3つの軍団に分けられる。

第1軍団はシャープネス男爵が指揮する軍団で、元々男爵が持っていた軍隊である。

ライフル騎馬隊が1千、ライフル歩兵が1千、通常歩兵が2千、そして、機動砲6門を持つ機動歩兵が300。

第2軍団はアルクテュー男爵が指揮する軍団で、同じように元々男爵が持っていた軍隊である。

ライフル騎馬隊が500、ライフル歩兵が1千、そして、機動砲6門を持つ機動歩兵が300。

第3軍団は姫は名目の指揮官だが実質は私が指揮する民兵軍団である。

ライフル歩兵が2千、機動歩兵500、キャノン砲12門を持つ砲兵150、機動砲12門を持つ機動砲兵が500、そして騎馬近衛が300。

その他に兵を約1千つつ両男爵領を守備するためにそれぞれの所領に配置している。

また、これらの軍団への補給は初戦で得た捕虜の内、我らの理想に賛同した者達、約500名によって編成した補給部隊により行うこととした。

2週間程、各軍団毎に銃の習熟を目的とした訓練を繰り返す行い、その武器の特性を十分に理解させる。

今夜は、橋頭堡の仮設本部にて次の目標となるタミール市攻略の軍議を行う。

集まったのは、各軍団長とその士官そしてサリアだ。

ミゲルが作戦地図のタミール市に敵兵力の駒を置き、続いて見方軍団の概略位置に作戦駒を置く。

タミール市には、約1万近い市民が生活している。そこに約2万の反乱軍が立て籠もっている。

反乱軍の主力は歩兵であり、若干の魔道師も確認されていた。

今回の戦闘では、可能な限り市民に犠牲を出さずに反乱軍の攻略を行う事が重要となる。

まず、私案を示し他の反応を見ることにした。

「タミール市は周囲を石壁で囲んだ城壁都市だ。一番簡単な方法は、周囲から大砲を打ち込み敵を殲滅することだが、この場合、市民の犠牲は多大なものとなる。」

「反乱軍兵士のみを殺傷する手段で最も容易なのは、城壁から中に入り乱戦を行う手段がある。但し、こちらの犠牲は多大となる。最悪、再起は不可能となるだろう。」

「もう1つの方法としては、飢えさせる手もある。市内の人口は約3万・長期的に籠城することは困難だ。しかし、これも市民の犠牲が大きい。」

私はテーブルの面々を見渡した。

「誰か、案はあるか？」

ミゲルが片手を上げた。

「差し出がましいですが、よろしいですか？」

私は先を促した。

「要するに、敵を市内から追い出せば良いんですね？」

「でしたら、この配置は不味いと思います。」

現在、タミール市の4つの門には、我らの軍団が遠巻きに取り囲んでいる。

ミゲルは、南門を睨んでいる軍を取り除く。

「この状態でしたら、彼らも逃げ出しやすいと思いますが・・・」

「では、此処にいる機動砲兵をこの場所に移す。ここなら、市内の見張り塔からも見えずに、逃げ出した敵兵を一気に叩けるぞ。」

「追撃用の騎馬隊はこの林になりますね。」

「しかし、どうしたら反乱軍を市内から逃げ出させるのだ。」

「簡単だ。安心と不安を同時に与えればいい。」

私は立ち上がると作戦地図を指揮棒で示しながら作戦を説明する。
「これは、心理戦と呼ばれる作戦だ。相手の心の動揺を突く形となる。」

「まず、わが軍の配置は先ほどの変更で問題ないだろう。」

「次に、相手に安心感を与える。これは、リオの部隊に任せる。
・・・」

此方に疫病が蔓延したと相手に思い込ませる。これは、現状の囲みを手薄にすること、南門の軍を移動することで信憑性を持たせる。それを敵に知らせるのは、リオ配下の猟師だ。

戦を気にせず黒の森で猟をした獲物を売りにタミール市に立ち寄る。その売買で、市の周りの囲みが薄く、南は開いている事を敵に知らせる。

理由は、疫病とすればいい。直ぐに市内に知れ渡る。

此処までが安心感を与える作戦となる。

次に、間を置いて、タミール市への砲撃を行う。城壁近くにだ。場合によっては城壁を攻撃してもよい。また、精度を得られるなら、市内の間者から反乱軍の位置を確認しての攻撃も可とする。但し、この砲撃は夜、昼を問わず行うのだ。

これが敵に不安感を与えることになる。

3日を待たずして南門を出るであらう。

タミール市攻略（2）

仮設本部で計画を詰めた夜。タミール市の南門付近に布陣したヘイムの機動ライフル部隊とマリアの機動砲部隊が馬車の音を響かせて後退した。

タミール市の明かりが全く見えなくなると、音を立てずに所定の位置に移動する。

この後、ヘイムとマリアの部隊は保存食だけの食事となる。煙を上げず、音を立てずひたすら待つのだ。

次の日、タミール市の3方から兵を少しずつ後退させる。残す部隊はキャノン砲部隊と機動砲部隊、それに砲兵達を防衛する部隊のみだ。

後退させた兵は橋頭堡まで下がらせる。

そして、十分な休息を与える。

後退した部隊の中で、特に射撃の腕が良い者を選抜し、タミール市の城壁にいる見張りを倒す。嫌がらせ程度ではあるが、目を取り除くことは出来る。

この精密射撃は昼夜を問わず継続する。反乱軍が逃げ出すまでだ。

そして、2日目。

リオ配下の獵師部隊より獵師を2人、獲物を持ってタミール市の南門に行かせた。

タミール市の南には誰も居ない。黒の森の薬草取りが大勢入って獵にならん。シャープネス軍に疫病が蔓延しているらしい。

この3つを市内に広めるためだ。
望遠鏡で成り行きを見ていた観測者より、無事に市内に獵師が入ったと連絡が入る。

そして、獵師が手ぶらで市内を出たことを確認する。

夕刻より、砲撃を開始する。

但し、直接市内は攻撃せずに、城壁を狙う。攻撃は集中せず、散発的に実施する。

そして、反乱軍がたむろする場所には、正確な距離を計測して、精密射撃を行う。

砲撃は間を空けて実施した。砲弾の節約と敵の恐怖心を揺さぶるのが目的だからだ。眠らせない程度の砲撃を継続する。

3日目になっても、見張りの射撃と、嫌がらせの砲撃を継続する。そしてその夜。・南門が開き、騎馬の群れが南方を目指して走り去った。

あえて、騎馬隊を無視する。

しばらくすると、歩兵部隊が周囲を警戒しながら門を出てきた。続々と門を出てくる。

「今だ。信号弾を上げる！」

ミゲルは頭上高く信号弾を上げる。その花火が夜空に開いた時、キャノン砲が一斉に3方の門を攻撃する。

市内中に炸裂弾の音が鳴り響き、門が崩れ落ちると、反乱軍は先を争って南門から逃げ出していった。

シャープネスの騎馬隊とアルクテューの騎馬隊が一斉にタミール市の門に入り、銃を打ち鳴らす。

まだ、市内にいた反乱軍は見方を押しのけるように南門を目指す。南門は阿鼻叫喚の有様だった。

力の有る者が列を無視して前に出るため、力を持たない魔道師達は転び後に来るものに押し潰されていく。

市内に突入した我が軍の騎馬隊はタミール市の北から少しづつ反

乱軍の掃討を行っていく。

恭順するものは、武器を取り上げて一箇所に纏め、抵抗するものはライフルでの一撃が待っている。

少しづつ、少しづつ南門に近づき、最後に南門を閉じる。

タミール市離れた反乱軍は戻る事が出来ずに、逃げてくる部隊と合流して混乱が増していった。

騎馬隊が必死に隊列を整えさせる。しかし、浮き足立った部隊はますます混乱していった。

そんな部隊をジッと見ている部隊があった。マリア率いる機動砲兵隊である。

12門の機動砲は砲身が2つある。炸裂弾と火炎弾を装填した機動砲の散布界に敵が入るのをひたすら待っていた。

「・・・発射！・・・次弾装填急げ！」

ドドドドオン！！

機動砲が一斉に発射される。その24発の弾丸は敵集団の中に万遍無く降り注いだ。

バアババアーン！！

口径が小さいことから、キャノン砲並の威力は無いが、1発の火薬重量は3kgを越える。たちまち、100人近くが爆散し、それに倍するけが人が出る。

「・・・発射！・・・緊急撤収！急げ！！」

ドドドドオン！！

機動砲が再度放たれる。

バアババアーン！！・・・前と同じ様に敵集団が爆散していく。その様子を見ることも無く、機動砲の砲架を馬の頸木に繋ぎ、大

急ぎで次の襲撃点に向う。

砲撃点を視認した敵の騎馬隊が一斉に襲い掛かるが、鼓動砲の防衛部隊のライフル一斉射撃により、バタバタと斃れてしまう。

敵はますます混乱しながら敗走していく。

その群れに襲い掛かったのはナナイ率いるライフル騎馬部隊だ。本来は近衛騎馬隊だが、両男爵軍よりそれぞれ200騎を借受け、自軍と逢わせた500騎で敵に襲い掛かる。

車が卦かりに敵に接近し、ライフル銃で一撃を与えた後、急いで後ろに下がりながらライフルにカートリッジを装填する。これを2度、3度と繰り返す。相手は騎馬の数さえ判らずに倒されて行く。そして、襲撃点を変えることにより少しづつ、ヘイムの機動ライフル部隊の方向に誘導していく。

ナナイ達の騎馬隊が去った途端。間段無いライフルの攻撃が始まった。

500の兵を2段に構え、順番に射撃を繰り返す。各兵が10発の弾丸を撃った後は、素早く馬車で後方に移動する。

そして、次の襲撃点に移動したマリアの機動砲砲撃が繰り返される。

今度は必用に砲撃を繰り返す。何騎かの砲兵隊への突撃は砲兵銃で打ち倒す。

敵の集団がその動きを止めた時、再度ナナイの騎馬隊が敵兵を蹂躪するために突撃する。

西から東に横隊で敵集団を横断した時、もはや動く敵兵はいなかった。

朝を迎えた。

タミール市のボロボロに崩れた石壁を朝日が照らし出す。

市内は両男爵軍の兵が、残党の調査を行っている。南門からは、反乱軍の亡骸が点々と南に連なっている。遙か先では1万近い死傷者が朝の大地に横たわっているはずだ。

南の待伏せ部隊が馬車と馬を連ねて帰ってきた。

橋頭堡の仮設本部で、今回の戦闘に参加した指揮官達の帰りを待つ。

（2ヶ月で4万を下したか・・・）

（反乱軍の総数は十数万と聞いている。まだ敵には余裕がある。）

（たしかに・・・しかし、何時までも無傷とは行かぬぞ）

（敵が2方面作戦に出ない限り心配はない。）

（正面の敵ばかりとは限らぬ。）

（サザーランドか・・・狼の巣穴が心配だな）

今回の功労者が続々帰還してくる。皆慢心の笑顔だ。無理も無い、兵を1人足りとも失わずに2万の兵を打ち破ったのだから・・・

「いやー・・・真に素晴らしき作戦です。市民を巻き込んだ乱戦を予想していましたので・・・こうも作戦が上手く運ぶとは夢にも思いませんでした。」

アルクテュー男爵の言葉は、この場にいる全ての者を代表した意見だろう。その言葉に皆頷いている。

「だが、これからが大変だ。いよいよ敵は本気になって攻めて来る。」

「そして、敵は反乱軍だけとは限らない。サザーランドもきな臭いのだ。我々は、攻撃を一時中断して、今後の対策を練ろうと思う。その為にも、タミール市と橋頭堡の防備を固めることにしたい。出来れば、アルクテュー男爵をお願いしたいのだが。」

「私にですか？・・・もちろんですとも。兵力は少ないですが、ラ

イフルと機動砲があれば、防御はたやすいでしょう。しかも直ぐ後ろには將軍率いる精銳がおられますれば問題ないと思います。」

「私には、別件があるのですか？」

シャープネス男爵が私に聞く。

「ああ、男爵には次の攻撃の準備を手伝って欲しいのだ。それと・
・狼の巣穴が気になる。」

「あそこは、天然の要害。たやすく落ちる事はないと思いますが。」

「私もそう思う。しかし、突破されると厄介なのだ。三つ巴の戦いになる。」

次の日、ミゲルに橋頭堡の指揮をまかせて、我々はシャープネスの館へも帰路についた。

サザーランドとザイン城

椅子を回して、大きく開いた窓より湖を望む。

ふと、脇を見ると同じように湖の波のざわめきを見るサリアの姿があった。

（自然とは良いものだな）

サリアの思念が届く。

（ああ・・・変らぬ所がいい。）

私はサリアに同意した。

「此処においででしたか。男爵様達が作戦本部でお待ちです。」
ドアを開けて顔だけ出したミールがそう告げた。
我々は腰を上げると階下の作戦本部に急ぐ。

「遅くなってすまん。失礼した。」

「それは、かまいませんが・・・私達との話とは何なのでしょう？」
「？」

男爵が身を乗り出して聞いて来た。

「2つある・・・」

1つは、サザーランドの動向だ。政変後の動向が今ひとつ理解できかねる。

王子の王国掌握後は数多の有能な人材を誅殺している。よって、国として機能するには同じような能力のある人材を探す必要がある。しかし、リオ配下の調査ではそのような話も無いが、ひたすら軍を増強しているとの事である。

もう1つは、次の目標だ。タミール市の先には王都を守る3つの要塞の1つ、ザイン城がある。しかもザイン城は交通の要衝で

もあり、東西、南北の何れの街道にも面しており、容易に救援軍を送り込むことが可能なのだ。

その攻略は、かなりの奇策を用いることになるだろうが、その前にザイン城の指令について良く知る必要がある。

「最初の話は、私に判る範囲でお話しましょう。」

マリアが亡命前後のサザーランドの話始めた。

それによると、国王と王子の間で宗教上の対立が此処しばらく続いていたとの事。

王子の崇拝する宗教はアガルト教典型的な排他的宗教だ。対して国王は多神教。あまねく神を信仰していたらしい。

「という事は、神官クラスが国家運営を行っていると考えて良いだろう。なら、難なくこなせるはずだ。」

「でも、神官が国家を動かすなど出来るものなのでしょうか？」

「男爵は前に教皇が居ると言っただけではないか。そこで国家運営を学んだ神官が多数サザーランドに乗り込んでいるはずだ。」

「では・・・何れは帝国にも？」

「必ず触手を伸ばす。」

「次のザイン城については私がお話します。」

男爵はお茶を一口飲むと静かに話し始めた。

ザイン城は兵力1万から3万までその城に駐屯できる。城には4箇所の門があり、それぞれ街道に繋がっている。

城は石造りで望楼を2つ持っており、周囲は数十m幅の堀で取り囲まれている。門には橋があるが、戦闘時には収納されてしまう事など・・・

「王都の城壁は優美さを持っておりますが、ザインは防御を重視しており無骨です。しかし丈夫です。」

「城に市民はどの程度滞在しているのだ？」

「市民は居りません。通行は可能です。」

「それと、今の司令官はヨアヒムです。南の領主の息子ですが、ナナイと近衛隊長の座を最後まで争った男です。」

「優秀で部下にも慕われているということか・・・」

私は作戦地図を見渡す。

現在シャープネス軍は全軍を領内への移動を終了している。

装備の更新と部隊の再編成を行うためだ。しかし、その前に狼の巣穴を補強する必要がある。これは、サザーランド軍の増強がかなり進んでいる事をリオからの連絡で知ったからだ。

マリア將軍に倍する兵力であれば峠を越える事は至って容易であろう。その時にシャープネスへ横槍を入れられないためには、巣穴の補強は必要であろう。

編成は、打撃力と機動力を重視する。

機動砲6門を狼の巣穴に移動する。そしてライフル兵500をもつて、巣穴を守る。場合によっては関門の放棄はやぶさかではない。新たに、キャノン砲を6門男爵軍に増強する。そして、一般歩兵2千のライフル化を実施する。また、先のライフル兵1千は機動ライフル部隊とする。

「最終的には全ての兵を機動化したい。速さはそれだけで武器なのだ。」

「それと、持久力に自信の有る兵を100名程分けて欲しいのだが・・・」

「いいでしょう。ところで、どうするのですか？」

「山岳獵兵を作る。現在、サザーランドとの国境であるトルタナ山脈に展開し、サザーランドからの浸透攻撃を防御する。」

「失礼します。大きな荷物を持ったドワーフさんが尋ねてきたんですか・・・」

すぐに、ドタドタとドワーフが弟子を連れて部屋に入ってきた。

「できたぞ。將軍の言うとおりに造ったわい。・・・試射するか？」

我々は、館の外の兵営に移動する。

兵営裏の広場で、ドワーフが木組みを行い、一本の鉄の管を取り付ける。

「5本作ってきたが、これで良ければ量産が出来るぞ！」

私は試射を見に来た男爵達を後ろに下げさせた。

「では、発射しろ！」

私の合図で弟子が鉄管の後方に松明を近づける。

シュウーシューッと音がして白い煙を鉄管が吐いた途端、シュパー！と鉄管が飛んでいった。

遙か彼方でドドーンッと爆発音がする。

「これは？キャノン砲では無いですね。砲身が飛んでいきましたから・・・」

「ロケットだ。簡単な発射台にて打ち出す事が出来る。走る馬車からでも撃てるぞ。但し、キャノン砲と違い狙いを正確にあわせる事が出来ない。為に、一度に沢山のロケットを飛ばし点ではなく、面で攻撃するのだ。」

「マリア。これの運用を任せる。」

作戦本部に戻ると、再度地図を睨む。

ザイン城への、東と西の増援部隊に対する攻撃は比較的容易だ。街道を睨む形で機動砲、キャノン砲を展開すれば良い。

しかし、南についてはその動きを監視する方法が無い。しかも、平坦な土地であることから山の尾根から監視する手も使う事が出来

ない。

「南を監視する方法はないものか・・・」

「着弾観測ですか？」

「そうだ・・・観測部隊は攻撃目標となる。なにか案はないか？」

「ここで直ぐに結論を出さずとも良いでしょう。観測する・・・近づく・・・方法を考えましょう。」

「確かに・・・では今日は、此处までとしよう。また、明日打合せる。」

サリアと部屋で湖を見る。睡眠、食事を必要としない我らの唯一の楽しみだ。

「よろしいでしょうか？」

と言いながら、ジュリーが入ってくる。

「將軍の要求は入れたつもりですが・・・」

彼女の差し出した絵は、民兵の軍服だった。機能性重視、飾りは必要なし。色は周囲の景色に溶け込む事。材質は綿。

数種の中から選んだのは、迷彩服だった。ポケットが4つあり、靴は皮の半長靴。

ヘルメットは使用せず、帽子を採用した。また、全員に小さなベルトに吊るバックと水筒を持たせる。

「この形で良いだろう。数が多いが大丈夫か？」

「冬のご婦人方の内職になります。大丈夫ですよ。それから、これですが・・・」

それは、ボルトアクション式のライフル銃だ。現在の中折れ式より格段に操作性が増す。しかも、カートリッジはクリップで5発まとめて銃に収納される。ボルト操作だけで5発発射できるのだ。

しかも、これには、低倍率ではあるがスコープが付けられる。また、銃剣もつける事が出来る。

「全体の形はこれで良いが、何か問題でも？」

「いえ、特にありませんわ。後の詳細はドワーフ達に任せます。」
「時に話は変わるが、ジユリーの知り合いに賢そうな娘は居らぬか？」

「知り合いは沢山ありますが・・・なにをなさるおつもりですか？」

「教育のシステムを構築したい。・・・何歳だったら何を習わせるか。そのためにはどうするか・・・等を検討して、具体化させるためのものだ。」

「今も、学校はありますが・・・」

「それだけでは不足だ。広く、深い知識を望むものに与える。与えられない場合は一緒に考える。学びたいものに学ばせるのは施政上必要な措置だ。」

「皆が学びたいと望みませんか？」

「私のような怠け者もいる。それでも多いようなら選抜する。」

「私の妹が私塾を開いております。一度伺わせることに致します。」

「

調停を図る者

狼の巢穴に対する戦備の増強に2週間程費やした。

基本は巢穴の砦を守る事に徹し、関門は最悪突破されることも想定の内だ。

このため、関門には多量の火薬壺を石垣の中に埋め込んである。関門突破時にはこれを爆破し、砦との通行手段を無くすこととした。また、通常の峠からの砦への入口は跳ね橋があることから通行阻止は容易である。

巢穴の守備兵は300名と削減したが、機動砲6門と守備兵のラiful化により、籠城は容易いものと判断している。

外で、爆発音が響く。

マリアのロケット砲部隊の機動演習が続いているらしい。

彼女は直ぐにロケットの利点に気が着いたようだ。ドワーフ達へ発射機構の修正を依頼し、その修正が容易であったことから、機動ロケット砲を昨日手に入れている。

ロケット砲の発射台から発射されるロケットは試作品より小型化されたが、その威力はキャノン砲の炸裂弾に匹敵する。飛距離は最大3km程であるが馬車に乗せられたロケット砲は12連装式となっている。

単体、半数、全数の発射が発射機構についているレバーで選択出来ると共に、発射方向と発射角度を調整するためのクランクも付属している。

彼女としては、この機動ロケット砲を数台入手したいらしいが、それには暫し時間がかかるだろう。

部屋にミールがやって来た。

「將軍。ミゲル様から至急の連絡がありました。」

私がミールより魔道石を受け取ると同時にミゲルよりの念話が届く。

（將軍。困ったことになりました。アガルト教の神官が来ております。用件は内乱の調停と言うことですが・・・」

（追いつ返す訳にもいかぬか・・・なるべく穏便にこちらに来て貰ったほうが良からう。）

（では、直ぐにでも館にお連れします。）

「客が来るようだ・・・男爵と姫の都合を確認してくれ。相手はアガルト教の神官だそうだ。」

「畏まりました。」

ミールが退室する。

橋頭堡からだど此処まで馬車で半日というところか。多分来るのは夜になるはず、その前に姫と男爵の考えを確認しておくことが必要だろう。

慌しく通路を走る音が聞こえる。

男爵達が到着したようだ。

「アガルト教団が調停ですと！」

男爵は部屋に入るなりいきなり声を上げた。

「そうだ。神官が調停に入るそうだ。その前に此方の考え方を整理し、確認したい。」

後から、来室した姫とともに先ず着座するよう促した。

ミールがお茶を運ぶ。男爵はお茶を飲むと少し落ち着いたようだ。

「アガルト教団の神官は魔術者でもあるのです。その説得には誰もが応ずると昔聞いた覚えがあります。」

「私も聞いたことがあります。どんなに反対意見を持った者でも、彼らの説得に掛かると応じざる得ないと。」

「なるほど・・・」

（洗脳）

（かもしれない。見抜けるか？）

（それが魔法であるならば・・・）

「言葉巧みに相手を思いのままに操る。その技が有るには有る。しかし、人の意思をも操ることは邪道でしかない。」

「サリアは魔術ではないかと疑っている。」

「・・・！ では、我々は応じる他無いと・・・」

「いや、私は・・・私の体は、生体部品を持たない。多分問題ないだろう。それに、サリアは賢者クラスの魔道を使う術を持つ。ここは、私とサリアで相手をしようと思う。」

「それでしたら・・・」

「会見の前に、我々の意思統一を図りたい。この反乱は鎮圧で良いな。調停による現状維持は論外と・・・それで良いな。」

「はい。旧来の貴族社会を無くすための戦いです。此处で止まる事は有りません。」

2人の意見は当初から揺るぎない。

2人と別れ、私とサリアは階下の客室に移動した。
しばし、客人の到着を待つこととする。

神官達が館に到着したのは深夜のことであつた。

館のメイドが彼らを客間に案内してきた。

「將軍。アガルド教団の方々をご案内してまいりました。」
メイドはそう言つと神官達を部屋に入れる。
私とサリアは席を立たずに彼らを向かえた。

「遠路、ご苦勞である。なにやら提案があるとか。着座願いたい話を聞く。」

私はぶつきらぼうに席を勧める。
着座したのは1人の老神官だった。彼の供である3人の修行者風の者達は老神官の後ろに立つ。

「無礼であらう。アガルト教団の教皇に最も近いサルト二枢機卿である。会見では甲冑は外さずとも兜を取るのが武人の礼儀であるに、何ゆえ兜を取らぬのか。」

「わたしは、素顔で会見に臨んでいる。脇のサリアは顔と声がな。どうしても取れと言うならサリアは可能だが、顔が無いものを無理に取れというのがアガルトの教えなのか？」
枢機卿は笑みを浮かべながら供に対して片腕を上げることとで諫めた。

「戦で顔を無くした者達を私は沢山見ております。ご無理をなさる必要は有りません。」

その言葉と同時にサリアが私を向いて頷く。
私のエーテル検知器も微妙なエーテルの変流を確認する。
コヤツ、最初から我らの洗脳を図るつもりだ。

「ところで、用件に入ろうではないか。夜も遅い。早く片付けるに限る。」

「はい。將軍の不思議な武器により、サンドロス軍は惨敗しております。しかしながら、兵力の差は歴然。この辺で有利な条件で兵を引く事をお勧めにまいりました。」

「有利な条件とは？」

「現状位置での停戦。停戦に関わる条件はありません。」

「それは、無理だ。我々は1年以内に反乱軍鎮圧を目論んでいる。ここで、停戦することは考えられん。」

「そうですか・・・残念です。」

どうやら、相手もこちらが承知しないことを最初から判っていたらしい。あっさりと引き下がった。

しかし、周囲のエネルギーは変流を超えて乱流を起し始めた。いよいよ、本格的な洗脳による説得が開始されるらしい。

「ところで、將軍は慈悲の心を持っておいでかな？」

「相手と場所による。」

「將軍の持つ慈悲とは？」

「武器を持たぬ相手に与えるものと思っている。もっとも武器を持たずとも攻撃の意志を持たぬものと拡大解釈して欲しい。」

「相手が武器持つている時または攻撃の意志を持つている時は慈悲とは無縁であると・・・」

「そのように心がけている。」

「將軍のそのようなお考えは、どのような神の元になされるのでしょうか・・・」

「私の行動の前に神はいない。神は私の行動を見るだけだ。」

「私は唯一の神を信じております。しかし將軍のように割り切って考えることは出来ない。」

「信じるものは救われる・・・そう言った者がいる。それでいいではないか。」

「では、將軍は神を信じるのですか？」

「信じるとはその者の心の問題だ。かつて、私が幼少であった時、新年に祝う神と親が死んだ時に祈る神とは異なった。しかし、それが私の故郷の習慣であり生活の一部でもあったのだ。その時に一番心の平安を得る事が出来る神に祈る。それが私の信仰なのだ。」

「唯一神ではないのですか。」

「神は何処にでもいる。そして私を見守っている。私は多神教となるのだろつ。」

「多神教は文明によって淘汰されるもの。おのずと神は淘汰されるものではないでしょうか。」

「神に序列はない。誰が序列を決めるのだ。」

「私は將軍にアガルト教の布教を認めていただくために、調停を申しでたのです。サンドロス卿は布教の許しを下されました。將軍はどうなのですか？」

「我々は宗教の自由を保障する。しかし特定の宗教を優遇する考えは持っていない。」

「布教は許さぬと・・・」

「布教せずとも人は己の神を見出すことが可能だ。」

突然、今までにも増してエーテルの動きが激しくなる。

言葉巧みに操ろうとしても無駄と思つてか、力技に切り替えたようだ。

しかし、エーテル流は私に何の変化ももたらすものではない。

（・・・調停に合意せよ！・・・布教に合意せよ！）

エーテルの流れが意志を持って迫ってくるようだ。しかし、私の感覚器官では魔道石による言語習得のおかげでかろうじて意志を持つとわかる程度であり、それによって思考回路の変調をきたす恐れは微塵も無い。

（・・・無礼であろう！！）

私のエーテル感覚器官がリミットに達し次々と回路を遮断していく。

サリアの怒りの噴流だ。

枢機卿の後ろの3人は倒れ伏し、枢機卿は頭を押さえて蹲る。

（魔術による人心掌握は禁じられた技。・・・古く帝国で定められた法律であり、今でも有効なはず。それを將軍に使うとは・・・）
押さえてはいるが、枢機卿の数段上に行くエーテルの乱流だ。

「サリア殿は・・・賢者でしたか・・・」
やつのことで頭を上げ、目的が叶わぬことを知った枢機卿は、
供を引きつれ館を後にした。

（やはり、使ってきたな。）

（ああ・・・これで、敵が増えた。）

（何れ、敵になる。少し早くなっただけだ。）

この会見をもって、我々は、反乱軍とアガルト教の2つの敵を持つ事になる。

反乱軍は目の前・・・アガルト教は、まだその姿を現してはいない。

ザイン城攻略準備

アガルト教団と会合を持って1週間程経ったとき、男爵の訪問を受けた。

男爵はナナイを伴って部屋に入ると、挨拶もそこに1枚の絵をテーブルの上に広げる。

「この前の話を私達なりに考えてみたのですが、このような物はどうですか。」

「これは・・・」

男爵が提示したのは、移動式砦であった。

砦と言っても、周囲を板で囲んだだけのもので、防御力はかなり低い。しかし、この砦の最大の特徴は移動できるという点にある。

移動は砦全体が動くのではなく、砦の外壁を幾つかのパーツに分割し、それに車を付けて移動する。

夜間に移動し、組み立てれば次の朝には砦が出来上がるという使い方になるだろう。

「この台車の移動は馬車で行うのか？」

「近くまでは馬車、最後は人力を考えております。」

「砦の外壁構造は理解した。しかし、この台車は何だ？」

中央の構造物は、台車4台を組み合わせた上に、台車2台を乗せている。

「物見櫓ですよ。凡そ5m程の高さになります。さらに丸柱と組み合わせて、物見を7m程迄配置することも可能です。」

「やってみたのか？」

男爵達は主要な台車を馬車を改造して作ってみたようだ。

それを並べて、或いは組み上げて、迅速に展開でき、且つある程度の防御が可能な移動砦の概念を固めたようである。

トライ・アンド・エラーの繰り返し・・・それを図面化したのであれば実用性は十分である。

図面を良く見ると、ライフル用銃眼場仮でなく機動砲用の銃眼まである。

外壁を構成する台車の数を変更するだけで、砦の規模も変更可能だ。

「どうですか？」

「十分に実用が可能だろう。しかし、良くこのような改造を思い立ったものだ・・・」

「どちらかと言うと、兵士の案です。機動部隊の馬車に装甲があればそのまま戦闘が出来るだろうというものでした。」

確かに、それは私も考えた。しかし、馬車を移動する馬を装甲板で防御するわけにもいかず、機動力のみを馬車に求めている。

しかし、このような使い方であれば、途中までの移動は馬で可能だ。

「しかし、兵を100名以上常駐させるとなれば、どれだけの台車が必要とするのだ？そして、それは間に合うのか？」

「馬車を100台程台車に改造する必要があります。しかし、豪華な馬車を作る訳ではなく、どちらかと言うと農家が使用するような荷馬車ですから、1月程度で可能でしょう。」

「では、この移動式砦が完成次第、次のザイン城攻略を開始する。」

「それでは、工房に通達を急いで出しましょう。」

急ぎ、自分の館に戻ろうとした、男爵を私は呼び止めた。

「まだ、何かありますか？」

「先ほどの改造の元となった兵士だが、今後のことも考え何らかの褒美を考えたのだが・・・」

「褒章金を出すことは私も考えております。」

「いや、それもあるが、私はその兵士に名誉を送ろうと思う。」

訝しがる男爵にサリアが小箱を差し出した。

小箱を受取り、箱の蓋を開ける・・・そこには、金に縁取られた銀色の小さなメダルが入っていた。

「これは？」

「勲章という。優れた功績を讃えるために作ってみた。功績の内容により種類を絵柄で変えてある。また功績の大きさによってメダルの材質を変えた。これは工芸・技術・発想を讃えるもの。そして、最上位の功績を讃えるものだ。」

「これを、男爵の率いる全軍の前で姫から男爵が受取り、それを今回の兵士に与えれば、彼の名誉は軍の中で高まることになる・・・土気も高まる。」

「なるほど・・・わかりました。面白い方法ですな。早速試してみましよう。」

勲章を受取り、男爵は帰っていった。

（使えるのか？）

（使えることは使える。しかし、防御がな・・・）

（火矢と攻撃魔法を防ぐ術が無いということか？）

（そうだ。）

（攻撃魔法は防御魔法で相殺出来るが、全体を纏めて行う事は出

来ぬか・・・台車毎に行うとなれば時間がかかる。）

（火矢を防ぐ魔法は無いのか？）

（それは無い。）

（火矢を防ぐ事が出来ないのであれば火矢を受けても延焼しない又は素早く台車を交換・・・交換か！）

（見つけたか？）

（ああ・・・台車毎交換して、皆の中で消火する。）

早速ナナイに連絡して、戦闘状態での台車交換方法についても改造する上で検討するように指示を出す。

また、台車が完成した後、サリアに魔法防御の魔法を1台毎にかけてもらう事を付加えた。

ザイン城の攻略は、短時間で行う必要がある。

アガルト教が動いたとなれば、なおさらである。幸い、サザーランドとシャープネスの間にはトルタナ山脈という天然の要害があることから、いまのところ直接的な攻撃は無いが、時間の問題ではある。

（サリアよ、我が軍は、女子供を殺す事が出来るであろうか・・・）

（攻撃手段を持たぬ者を惨殺することは・・・私が許さん！）

（そうではない。・・・見た目で・・・殺す事を戸惑うことは無いと思うか？）

（・・・そういう意味か・・・それは、判らぬ。多分、殺さぬであろう。）

（では、我が軍はアガルト教との初戦に敗退する！）

（何故だ。例えば子供でも武器を持って攻撃すれば我が軍は容赦はせぬぞ！）

（相手は、多分武器を持たない。魔法攻撃で来る。しかも自分の限界以上の魔法をぶつけて来るぞ。）

（それでは自滅ではないか？）

（そうだ。戦闘で死ねば天国が約束される。彼らには聖戦なのだ！）

（アガルト教は自爆攻撃をするというのか？）

（間違いなく奴らはやる！）

（だから、巢穴の防衛方法を変えたのだな。）

（ああ、彼らを責めることは出来ないだろう。負けるなら損害は少ないほうがいい。）

コツコツと控えめなドアを叩く音がした。

私の入れ！の声に応じて部屋に入ってきたのはリオである。

「館で將軍が待っている聞き、やってまいりました。」

「役目苦勞をかける。他の4人と違い、リオには特殊部隊を任せた。他の4人は表に出るが、お前は常に裏を歩く。申し訳ないがこの戦続く内はこのまま部隊を率いて貰いたい。」

「それは、十分承知しております。それで、今回の任務を早く知りたいのですが、あの新型ライフル銃を早く実戦で使いたいと皆申しております。」

「今回の任務だが・・・」

リオの現時点の任務は、トルタナ山脈を越えて浸透するサザランダの偵察部隊及び黒の森からの反乱軍偵察部隊の殲滅とトルタナ山脈のサザーランド側の村落の動向調査、並びに反乱軍占領下の町村等の潜入調査などである。

また、キャノン砲の遠距離攻撃時には、弾着観測も手がけている。しかし、リオの部隊は元獵師を主体としており、隊員数も限られたものだ。今回、シャープネス軍より屈強な兵士を100名得られたことにより、彼の部隊を再編することが出来る。

リオに告げた、部隊の再編は、山間の偵察任務に特化した部隊と潜入と破壊工作に特化した部隊に区分し、各特化部隊を4隊作るも

のである。

「役割を明確にするのですね。判りました。しかし、良く軍が増員に応じましたね。」

「サザーランドが攻めてくる。それと、反乱軍への攻撃がいよいよ本格化する。その為に、サザーランドからの横槍を極力避けたい。それと、攻撃対象となる反乱軍の動向調査、場合によっては破壊工作が今後は非とも必要となる。」

「それでは、軍からの増援はサザーランド対応に、獵師達は反乱軍に振り分けましょう。」

「軍の奴らに山を教えられる者を付けるのだぞ！」

「判っております。それでは・・・」

（あと一月か・・・）

（そうだ。それで、準備が整う！）

何時しか、湖は夜の闇を映していた。トルタナ山脈の山並みの上には星空が広がっている。

サリアと私は、偶に思念を取り交わしながら朝を待った。

ザイン城攻略（１）

一月が経ち、ザイン城の攻略準備が整った。移動砦を構築するための台車は馬に引かれてシャープネス領を昨日発っている。

我々も本日中には、この館を離れる。しかし、その前に将来を見据えた事業も開始する必要があった。

「姉から、將軍を尋ねるように言われましたが・・・」

私とサリアの前にはテーブルを挟んで妙齡の婦人が座っている。少し、緊張しているようだ。我らの容姿が通人と異なれば仕方ないのかもしれないが・・・

「頼みがあるのだが、聞いてもらえないだろうか・・・」

「私のような者に頼みとは？」

私は、アカデミーの計画を話す。学びたい者の向学心を満足させるための拠点となるもの。しいては帝国の宝となる学問の殿堂を。それは、因習を駆逐し科学的な文化の基本となり、将来には星の海にも人々を導くであろうことを。

「將軍がそれにお気づきになられたのは、地図を作るときだったのですね。」

「そうだ、地図を作るには高度の数学を必要とする。また、測量には正確な角度を測る道具が必要なのだ。しかし、その道具を他の目的で使用したときに因習との相違を見出す。その時、自分が正しいのか判断に苦しむ事態が生じる。これを回避するためには因習に負けない、科学的な思考を行う事が出来る人材を作る必要がある。そのための教育でもある。」

「なにを教えれば良いのでしょうか？」

「疑問を持つ心が育つ教育をして欲しい。」

「とりあえず、教育科目を考えて見ます。」

「出来たら、ミールに渡して欲しい。それで私に届く。」

（いよいよ取り掛かるのか？）

（そうだ。戦で未来は手に入れることは出来ん。未来を手に入れるには人材の育成だ。）

（確かに・・・）

彼女が部屋を出ると、入れ違いにリオが入ってきた。

「將軍。部隊配置は出来ました。山岳獵兵部隊は、父が直接指揮しております。また、私が指揮します諜報部隊は將軍の示した町村への浸透を終えております。」

「準備完了だな。リオにはすまぬが、しばらく館に留まって貰いたい。部隊との連絡を密にしておけ、それと、朝と夜には必ず私に状況を報告せよ。」

「了解しました。」

リオは先を急ぐように部屋を出て行った。

（面白い部隊を作ったと思ったが、機動的な戦には必要なのだな・
・）

（そうだ。・大体において、敵を知らずに戦うつもりは私には無い。）

（敵を知るなら戦えばよかるうに・・・）

（それでは遅い。・敵を知らば100戦危うからず・私の世界の有名な兵法だ。）

（なるほど、敵の規模、作戦等を知っていれば敗れる事はないということか・真理よのう・他にもあるのか？）

（風林火山・私の理想とする軍のあるべき姿だ。）

（意味は？）

（動く時は風のように速く、静まるべき時は林のように静かにし、侵略する時は業火のように、そして、敵と対峙し動かぬ時は山のようになだめということだ。）

（理想的だが・・・今の民兵軍団は少し、それに近くはある・・・たしかにあるべき姿よのう・・・）

突然ドタドタと通路を走る音がしたかと思うと、ドアからミールがちょこつと顔を出した。

そして、サリアの姿を見つけると部屋の中に入ってきた。

「サリア様出来上がりました。間に合って良かったです。」

サリアの元にサササーっと近づいて彼女を立たせる。そして羽織っていたマントを脱がせると、新しいマントを彼女に着付ける

「さて！・・・その家紋は私の家紋ではないか！」

（そう、睨むことも有るまい。器量を問われるぞ・・・）

（いや、そんな問題ではなく、サリアも家紋があるだろうが？）

（今更、私に皇帝シンボルを付けると・・・その方が問題だろう。

お前の家紋が気に入っただけだ、気にするな。）

「あのう・・・サリア様がこれがいって言いまして・・・」

「わかった。悪かったな。わたしが驚いただけだ。」

ミールは少し怪訝な顔をして部屋を出て行った。

昼過ぎに部屋を訪れたのはマリアだった。

「馬車の準備が出来ております。我らの部隊に乗り遅れては歩いて参加となりますよ。」

「それは、困る！」

我らは席を立ち、マリアの準備した馬車に乗り込んだ。

「どうだ、問題なく使えそうか？」

「問題ありません。ただ・・・次発装填に時間がかかるのが難点ですが・・・」

それは、諦めるほかあるまい。

それでも、12台の機動ロケット砲の3射分のロケット製作が間に合ったのは幸いだった。

1台当たり6発のロケット弾それが12台で発射されるのだ、1斉射で72発が同時に発射されるその威力は被害半径を1kmと想定している。

発射後の機動ロケット部隊は無力ではない。彼女達が持つ砲兵銃は2連装の護身銃を大型化したもので、威力こそ歩兵の持つライフル銃より落ちるが、従来の護身拳銃よりもはるかに威力がある。

彼女達の人数からだと、数十発の弾丸が連続的に発射されるのだ。それだけで脅威である。

マナル橋を渡り、橋頭堡に向う。

周辺にはシャープネス部隊が展開しているのだろう沢山の天幕が張られており、篝火が無数に点されている。

橋頭堡に入ると急ぎ仮設本部に向う。

そこには既に、軍の首脳が地図を前に作戦を練っていた。

「これは、將軍。お待ちしておりますぞ。」

男爵は私に気付くと立ち上がり、私の手を取って来訪を喜んだ。

他の士官達も一斉に立ち上がり私に敬礼を行う。

私は姫の隣に着座すると、テーブルの地図を見た。

「敵の状況に変化は無いか？」

「有りません。徹底籠城する覚悟のようです。」

「彼らが、籠城を決意するのは、援軍の展開が容易であるという事に他ならない。そこで、援軍は何処から来るかということになるが・・・」

「街道は4方向。北は我々がいますから。後の3方向が援軍の来る方向となります。そこで、シャープネス軍が東方向。アルクテュール軍とヘイムの機動ライフル部隊が西方向。そして、アレスとトロアの両部隊が援護するセリーヌのキャノン砲部隊がザイン城を攻撃します。」

士官は地図上配置された駒を指揮棒で示しながら説明した。

「さて、問題の南側からの援軍だが・・・」

私の言葉に、男爵が頷くと指揮棒を取り駒を配置する。

「シャープネス軍は、ここに砦を築きます。そして、この砦からの着弾観測で、セリーヌ部隊のキャノン砲で援軍を叩きます。」

「このような場所に砦を築く前に、敵に叩かれますぞ！・・・無謀です。」

「確かに無謀だ。・・・誰もがそう思うだろう。しかしだ、もし此処に砦を築けたら・・・ザイン城は落ちる！」

「では、決行は明後日早朝とする。明日は英気を養え。では、解散だ。」

私は、男爵を呼び止めた。移動砦の状況を確認したかったのだ。

「問題ありません。しかし、敵に気が疲れると厄介です。」

私は陽動することを約束した。

姫の退席を待っていたセリーヌを呼び止める。

「明日の夕刻より、機動砲を適当に城に打ち込め、炸裂弾は温存し、なるべく火炎弾を使用してな。」

「目くらましですか・・・朝まででよいですね。」

「ああ、それでいい。」

セリーヌの話が終わるのを待っていたようにマリアがやってきた。

「私の出番がないようだが・・・」

「サリアとともに居れ、出番は直ぐに来る。機動力が要なのだ。」
姫は私にお休みを言うつと、サリア達と共に砲兵部隊の天幕に去っていった。

次の日、仮設本部にナナイがやってきた。ミゲルに彼を呼び出して貰ったのだ。

「何の用でしょうか？・・・父の手伝いをお願いしていたのですが・・・」

「それも大事だが・・・少し頼まれて貰いたい。」

「内容にもありますが・・・」

「ナナイにしか出来ぬことだ。・・・直ぐにザイン城に向かい降伏勧告を行え！」

彼は吃驚したようだ。しばしキョトンとした表情であったが、

「直ぐに行つて参ります！」

彼は部屋を飛び出し走っていった。

「ナナイ様は如何したのでしょうか？」

「彼は、古い友に会いに行ったのだ。多分最後の別れとなるだろう・・・」

その日、ザイン城の前に白い布を巻いた槍を持った騎士が訪れたと、後に城の生存者は話したという。

そして、夕刻になった。

バコン！！

セリー又は機動砲を城に向けて発射した。

「次弾装填！・・・しばし待て。・・・発射！」

バコン！！

適当に間隔をあけて火炎弾を発射する。発射後は三脚に乗せられた望遠鏡で着弾を一々確認する。

時間は長く、火炎弾は限られている。ゆっくり、確実に・・・

私はミゲルと城が見える場所まで行くと状況を観察する。

城に火炎弾が命中する。機動砲の口径は小さく威力は無い。しかし、敵を欺くには適した武器だ。火炎弾が着弾する度に兵達が躍りになって消火作業に励んでいるだろう。

東を見ると、馬車の列が私には見える。暗がりの中をゆっくりと進む馬車列は移動式砦の構成部品そのものだ。

明日の朝、が楽しみだ。

ザイン城攻略（２）

薄明の中に、移動砦が黒く浮かび上がる。

東の街道より、南に下がった場所にそれは立てられた。

西に視線を移動すると、ザイン城が薄い煙を上げている。砲撃は止んでいるが、昨晩は１００発以上の火炎弾が城に打ち込まれているのだ。まだ消火できていない箇所があるのだろう。

「・・・出来ましたね。」

ミゲルの言葉に頷くと、シャープネス男爵軍に馬車を走らせる。

男爵は天幕の中で、士官達を交えて休息を取っていた。

「どうです。見事に完成しましたぞ。」

「ああ・・・あの位置であれば問題ない。しかし、援護の体制は整えておいて欲しい。」

「それも、万全に出来ております。そして東からの増援部隊は、我らと砦で挟撃が可能です。」

「ザイン城攻撃は、正午にキャノン砲の一斉攻撃で開始する。今の所予定通りだ。」

それでは、と男爵軍を離れ、サリア達の待つ砲兵部隊へ馬車を走らせた。

サリア達の天幕はキャノン砲の砲列を少し離れた丘の上に作られていた。

傍らには、観測班が距離計測用の機器を展開している。

大きめの天幕に案内されると、そこには姫、サリア、セリーヌ等の関係者が集まっている。

「昨夜の砲撃はご苦労だった。無事、砦が完成した。砦の観測班

との連絡に問題はないか？」

「問題ありません。砦からは、南門の楼閣まで視認出来るそうです。ここから、南門の砲撃も可能です。」

「それは、何よりだ。予定通り、正午に攻撃を始める。．．最初は城内何処でもかまわん。城を更地にする気で打ち込め！」

「解りました。最初から炸裂弾でいきます。それと、現在地からの攻撃範囲ですが、．．この地図の範囲です。」

「城の南、2 km 迄を含んでいれば問題ない。この地図に砦の機動砲の射撃範囲を記載しておけ。後で役に立つ。」

「それと、可能性は殆ど無いが、タミール市の南を迂回してこの陣を攻撃する可能性もある。砲兵達へ銃とカートリッジの携帯を徹底しておけ。」

「マリアの軍だが．．ヘイムの後方．．この位置に展開しろ。ロケットの使用箇所は流動的だ。」

「攻撃目標は、城では無いと．．」

「敵増援の集結地が目標だ。作戦地図の我が軍の配置から一番手薄なのは、城の西方向．．すると、この付近に集結した後にヘイムの部隊を強襲することが考えられる。」

今朝のリオからの報告では、各地方に目立った動きは無い。ザイン城周辺の村、町ともに目立った軍の展開は無いということであった。

最も近い村までの距離は凡そ30 km。昼の攻撃に応じて援軍を派遣するのであれば夕刻迄には十分間に合う。しかも、彼らの位置が村や町に知られていないということから更に近い場所で待機していることは明白である。

砲兵を指揮して、陣の周囲に簡易な柵を作る。杭をロープで繋いだだけのものだが、騎馬の突撃を少し押さえるぐらいは可能だ。

「発射！！」

太陽が南中したことを確認して、セリー又は砲兵に号令をかける。

ドドドオーン！！！！

12門のキャノン砲が一斉に火を噴く。

全てのキャノン砲から薄い硝煙が立ち昇るのを確認して次の号令をかける。

「次弾装填・・・急げ！！」

発射された12個の弾丸は約2km程の距離を飛行し、ザイネン城に落下した。

キャノン砲の弾丸1個には凡そ5kgの炸薬が入っている。その弾丸が城の屋根を突き破ったところで炸裂したため、粉塵とも爆炎ともつかない黒い煙が城から上がった。

少し間をおいて、ゴオオオーン！！と一塊になった炸裂音が届く。

「発射！！」

装填終了を示す赤い旗を全てのキャノン砲の砲長が高く揚げたことを確認して号令する。

ドドドオーン！！！！

キャノン砲の一斉射撃を4回繰り返すと、セリー又は別の命令を下す。

「キャノン砲、冷却開始！」

棒の先に、布切れを幾重にも巻いた大きなタンポンを水で濡らして、各キャノン砲の砲身に突っ込みゴシゴシと擦る事により、装薬で焼けた砲身を冷却する。

しばし間を取った後、再度キャノン砲の攻撃を開始する。
最大射程の半分以下の距離で行う砲撃は散布界も小さく、全弾ザイネン城に命中している。

突然、ザイネン城の北門が開かれ、騎馬隊が我らに向って突撃してくる。

規模は約千騎というところだろう。

しかし、我らまでの半分の距離を騎馬隊が進んだ所で、アレス、トロアのライフル部隊に撃退される。

半分以下に減った騎馬隊をザイネン城の北門が飲み込み、その門を硬く閉じた。

（ザイネン城の反撃は無謀か・・・）

（本来であれば、有効と思う。しかし・・・武器レベルが違いすぎる。私なら、サツサと南へ逃げ出すよ。）

（虚しいの・・・）

（ああ・・・しかし、兵力が10倍以上で勝利するとすると、一方的な殲滅戦を行う他に手が無い。）

その間も、キャノン砲の一斉射撃は続く。

10射したところから、キャノン砲の弾丸に火炎弾が混じる。破壊された城の建材に火を付け火事を誘発するためだ。

次第に、ザイネン城は黒い煙に覆われていった。

「將軍！敵襲です。西の街道より約1万の軍がザイネン城に向っています。」

ザイネン城を眺めていた我々に士官が報告する。

「分かった。しかし男爵と皆で挟撃することが可能だ。男爵軍と連絡を密にするだけでよい。」

（来たか？）

（来たが・・・1万ではシャープネス軍を抜く事は出来ん。殲滅される。）

「報告します。西から敵部隊が接近してきます。数は約3万。歩兵部隊です。」

「報告します。砦より連絡。南より敵軍多数、3万を遥かに凌ぐ以上です。」

2人の士官が敵の来訪を知らせてきた。

ミゲルが作戦地図へ敵の概略位置を示す駒を素早く配置する。

「ヘイムの軍は足止めするだろう。しかし敵を殲滅するには兵力が足りん。」

「増援しますか？」

「いや。援護でよいだろう。セリーヌを呼べ！」

直ぐにセリーヌが訪れる。その間もキャノン砲の砲撃は続いている。

「セリーヌ。攻撃目標の変更だ。キャノン砲9門で砦の観測結果を元に南の敵軍を叩け。残りの3門は西の敵を叩け。ザイン城の攻撃は機動砲6門で継続しろ。後の半分の機動砲は現状で温存する。」

「了解しました。」

セリーヌが戻り、しばらくすると砲撃音に変化が生じたのが解る。9門と3門に分かれて砲撃が開始されたのだ。さらに、バコン！つと言う乾いた音が聞こえる。軌道砲の投入によるものだ。

各部隊の状況をミゲルが逐次確認し、作戦地図の駒の配置を微妙に変化させていく。

不貸しの敵軍は南南西に進路を変えて砦の南方を通り、南の軍と

合流を図っている。西の部隊もじりじりと南に下がっている。
南の部隊は陣形を大きく崩し、現在南に少し下がつて軍を再編中である。

「シャープネス男爵より連絡です。東方よりの敵部隊は南に敗走。

」
連絡士官がミゲルに報告する。

（どうやら、意図する形に近づいたな・・・）

（夕刻には決する可能性が高い。）

「ミゲル。砦とヘイムに連絡。南に下がった軍の再編場所を確認せよ。だ！」

2箇所から得られる目標への角度。それが判明した時に、最後の攻撃が行われる。

現時点での目標位置精度は凡そ3 km程度。これを、1 kmまで精度を上げる必要がある。

ザインン城攻略 (3)

ザインン城が夕闇の空に黒いシルエットとして浮かび上がり始める。

最終攻撃は、夜の闇について行うことになりそうだ。

「皆からです。終結地点の方位確定しました。」

「同じく、ヘイムの観測隊から、方位確定の連絡がありました。」

私への連絡と同時に、仕官たちは終結地点の距離と方位角を計算する。

「マリアの部隊に連絡。ヘイム部隊の観測班位置へ前進！」

ロケット砲の射程は3 kmだ。概略位置であつても少し遠いためマリアの部隊を前進させる。

「終結地点座標確定完了！」

「直ぐに、マリアに座標を連絡。発射の指揮はマリアに任せる。」

「皆より緊急連絡。城からの攻撃部隊と応戦中。魔法攻撃で負傷者多数！」

「アレス部隊より、兵500を支援に回せ。シャープネス軍は迎撃しているのか？」

「シャープネス軍からです。敵の魔法攻撃は従来よりも距離が大きい。ライフルで防ぎきれず、機動砲で対応しているとの事です。」

（気が付いたか・・・）

（どう言う事だ。）

（多重魔法で攻撃しているのだ。通常の火炎弾の上位魔法でも、100 mがせいぜい。その魔法弾を風の魔法でさらに飛距離を伸ば

している。」

（出来るのか？）

（現にやっておるではないか。しかし、射程が狙い通りいかぬのであまり使用される機会はないがな・・・）

（砦は魔法防御がなされているのでは？）

（あくまで、台車だ。砦の内側は無力だ。）

「セリーヌに連絡！ 城の攻撃を一時停止して、砦からの連絡目標を攻撃せよ！ 機動砲の予備をシャープネス軍の援護にまわせ！」
「ヘイムに連絡！ 機動砲準備せよ。敵はライフルと同等の射程で魔法攻撃を実行可能！！」

私が立て続けに指示を飛ばす中、ミゲルは慌しく作戦地図の駒を動かす。

ヘイム軍が手薄だ。しかし、予備兵力は無い・・・

その時、かすかなシュウ・・・という音が連続する。

天幕を飛び出し、ザイン城を見ると、南西が紅蓮に染まる。一瞬にして広範囲に同時に火柱が立ち上がったのだ。ズズズンと地に響く振動が伝わる。

「リゲル。ヘイムの観測班に状況を確認させろ。砦も観測が続いているなら報告させろ！」

リゲルは天幕に走っていった。

「シャープネスより報告です。砦を放棄。砦の残存部隊はシャープネス軍が確保。」

「セリーヌに連絡！ シャープネス軍と連係を取りキャノン砲で攻撃。」

「了解しました。」

報告を終えた士官は私の指示をセリーヌに伝えるため丘を下っていった。

（混戦だな。）

（一方的な戦闘が続くわけではない。敵も対策を考える。）

（砦が落ちたのは痛い・・・）

（しかし、目的は達した。）

リゲルが戻って来た。

「報告します。砦との連絡つかず。ヘイム軍からは、敵の集結地点に多大な被害あり。しかし、残存兵力が集結中。」

「集結点は、キャノン砲の射程外か？」

「はい。約1km程度離れています。」

我らは天幕に戻った。作戦地図上の駒を修正する。

シャープネス側への攻撃は積極的ではあるが陽動の可能性が高い。本命は、現在集結中の敵軍と見て間違い無いだろう。

多重魔法の射程とライフルの射程が同じであれば威力のある多重魔法に分がある。

城は度重なる砲撃で火災が発生しているようだ。あれでは、城からの攻撃は無視出来そうだ。

アルクテュー軍の機動砲とセリーヌの機動砲6門をヘイムに預けて、後退しながらの連続攻撃を行い、マリアの射程に入れば、なんとか凌げそうだ。

素早く作戦地図の駒を動かし、全体を眺める。

「リゲル。これで行くぞ！」

リゲルを通し各舞台に作戦を伝える。ヘイム軍の後方に移動したマリアにも次発装填を急ぐように伝えた。

「シャープネス軍は睨みあいです。敵はキャノン砲の射程外に展開中。」

やはり、陽動か・

「多重魔法使用時は機動砲で応戦せよ。」
私の指示を士官が連絡する。

「ヘイムの軍は大丈夫でしょうか？」

「移動しながらの攻撃だ。誘いに乗ってくれば良いのだが・」
「敵の数が多い場合は乱戦になる。ここも戦場になるぞ。ナナイ

に連絡して姫にも天幕で待機してもらったほうが良いな。」

「直ぐに伝えます。」

バコン！・・・バコン！・・・

乾いた発砲音が連続する。

ヘイム軍の方からだ。集結を終えて、敵は移動を開始したようだ。

10発程度砲撃が連続すると、異なる方向から砲撃音が聞こえる。
機動砲を2群に分けて1群毎に砲撃を行っているようだ。その間、
もう1群は後退中だ。

観測班の報告では、敵との距離を1km程度に保っているようだ。

乱戦に備えて、トロアの軍を砲兵隊前への展開を急がせている。

丁度、鶴翼の陣を180度反転した陣形だ。

「セリーヌ部隊の前進観測班より報告。敵部隊の一部がキャノン
砲射程に入ったそうです。」

「セリーヌに連絡。砲撃せよ！」

ドドドオオン！！

キャノン砲の砲撃が城に寄りすぎた部隊を殲滅する。

「マリアに連絡。ロケットの射程に入ったら直ぐに攻撃せよ。攻

撃後、セリーヌ部隊本部後方に移動。砲兵銃にて乱戦に備えよ！」

「連絡します。」

士官が走っていく。

（どうだ？）

（今の所予定通りだ。）

サリア達が姫を伴い天幕に入ってきた。

「敵の多重魔法攻撃により乱戦となる可能性が高い。此处で待機ねがいたい。」

「ナナイ。騎馬隊での車掛かり、天幕の前で行えるか？」

「可能です。直ぐに準備します。」

ナナイは外に走っていった。

「さて、すべきことはやったつもりだ。マリアのロケットを見学しようか。」

姫とサリアを伴って天幕の外に出る。

バコン・バコン・

機動砲の発射音がさっきよりもはつきりと聞こえてくる。

その時、斜め後ろからシューっと言う音とともに、火柱が空に一斉に飛んでいく。

「まるで、流星のようですね。」

姫が呟いた時、城の右やや後方に紅蓮の火柱が立ち上る。

しばらく間が空いた後に、ズズズンという地響きが伝わってきた。

しかし、全軍を殲滅することは出来ず、火柱を背景に敵軍が我が軍に突撃を開始したのが見て取れる。

ヘイムの部隊が2段に構えたライフル銃の射撃を開始する。

砲兵部隊を目指してくる敵にはトロアの軍が迎撃する。

機動砲の一部は、炸裂弾よりブドウ弾に弾種を変えて突撃してくる兵をなぎ倒す。

しかし、敵の数が多いことから、ヘイムの軍は少しづつ、後退しているようである。

そして、トロア軍とヘイム軍の間が空いた時、一斉に砲兵部隊に敵が押し寄せてきた。

「何でも良い。足止めの障害を作れ！」

私の声で、樽、馬車、杭、天幕等を並べて、急ごしらえの防柵を作る。

キャノン砲の一部にはブドウ弾を装填し、各砲兵は砲兵銃にカトリッジを詰め込む。

「遅くなりました。」

マリアが砲兵銃を背にしてやってきた。マリアの部隊は150名。十分な援軍だ。

バゴォーン！！

キャノン砲が火を噴く。砲炎で一塊の敵兵が吹き飛ぶのが一瞬見える。

バンバン・・・バンバン・・・バン

一斉にライフル、砲兵銃が火を噴き始めた。

私は、天幕の入口に立てかけられたハルベルトを掴むと、敵侵攻の真っ只中に立った。

槍を構えて走りこんでくる兵を横薙ぎに吹き飛ばす。

剣を構える兵を両断する。

天幕の入口に立ったサリアは、魔法で火炎弾を連発する。

銃の発射音と魔法の炸裂音が何時果てるとも無くつづいていく。

苦い勝利

薄明が過ぎ去り、朝靄があたりを包む。
モノトーンの風景に色加わると、凄惨な光景が私の前に広がった。

昨夜のあれほどの剣戟の音も今は無く、槍や銃剣を持ってヨロヨロと歩き回る兵士が見られるだけだ。

時折、未だ息のある敵兵に止めを刺しているのはせめてもの慈悲なのだろう。

負傷者は一箇所に集められ、治療を待っている。敵も味方もない、彼らの戦いは終わったのだ。

（勝利したのか？）

強い思念の問いかけに後ろを振り返ると、全身血まみれのサリアが立っていた。手に持つ長剣はまだ血が滴っている。

（武器で戦ったのか？魔法のみだと思っていたが・・・）

（弁舌だけで、帝国を造ったわけではない。それにしてもその姿、体を洗ったほうが良いぞ。）

確かに私の体も血のシャワーを浴びたような姿になっている。手に持つハルベルトも、過酷な戦いを示すように斧の刃がボロボロだ。お互い視線を交える。生体であったなら、互いに苦笑いをする状況であつたろう。

「此処においででしたか。」

血に汚れた包帯で片腕を吊ったミゲルが現れた。

サリアが片手をミゲルに向けて傷ついた腕に思念を送る。

うう・・・つと腕を押さえたリゲルだったが、たちまち腕は全快したようだ。

「おお・・・腕が。サリア殿ありがとうございます。」

「現在、各部隊の点呼を実施しております。負傷者はとりあえず一箇所に集めておりますが、救護所の設営は急務でしょう。姫の天幕に指揮官を招集しておりますので、急ぎいらしてください。」

ミゲルが腕の包帯を取りながら告げた。

「至急、情勢を確認したい。偵察隊を城の東西に出せ。それと、この血を拭き取ることは出来ないか？」

「分かりました。ここでお待ちください。至急用意します。」

ミゲルが天幕の後方に駆けて行く。

（良く出来た副官だ・・・）

（ああ・・・将来が楽しみだ。）

「これは、將軍・・・凄まじい姿ですね。」

セリーヌがマリアを伴って天幕に來たようだ。その姿は土まみれだが血の跡は無い。どうやら白兵戦には至っていなかったようだ。

「セリーヌ達も無事でなによりだった。」

「將軍のおかげです。私達は後方からの援護に精一杯でした。」

「恥ずる事は無い。お前達に銃を使用させたことは私の指揮の失敗だ。」

そんな・・・恐縮です。等と言いながら彼女達は天幕に入っていた。

「將軍。これをお使いください。」

ミゲルが兵達と水樽を運んできた。

私は備え付けの水桶で体に水を被る。2度、3度と繰り返して、

体を布で拭き取った。サリアも同じように体を洗う。

兵達に礼を言って、姫の待つ天幕に入る。

作戦地図を前ににて、ミゲルに部隊配置の再確認をさせる。

陣形は皆を失ったものの、全体での配置に変化は無い。

兵員の損失は大きく、負傷者は千人を超えている。死者も数百名はあるようだ。

しかし、本来の目的であるザイン城の攻略はまだ終わっていない。

「報告します。敵増援部隊の損害は極めて大きく4万以上は確実です。ロケットによる地域殲滅の結果、遺体を確認できないものが多く確定ではありませんが・・・」

「味方の損害は大きいものの死者は約300名ほど。負傷者は2千を越えますが、半数以上は軽傷です。」

「直ぐに救護所を開設し、負傷者を手当てせよ。」

「私も参ります。ここは、將軍に全権を任せます。」

私の指示に、姫は即答して天幕を出て行った。

（私も行こう。テレジア行くぞ！）

サリアは盲目の少女を連れて姫に従った。

しばらくして、シャープネス男爵とアルクテュー男爵が天幕に来了。これで、指揮官が全て揃う。

「いやー・・・乱戦でしたな。とりあえずは勝利ということでしょうか？」

「敵援軍は滅ばしたと言ってよい。しかし、ザイン城はまだ落ちていない。そして、我々の戦力は低下している。」

「至急、キャノン砲と機動砲の残弾を確認せよ。ライフル銃の弾

丸もだ！」

「大砲の弾丸は各砲に10発前後です。ライフル銃は各自のカートリッジが20発程度です。」

「鉾山都市の工房に連絡して弾丸の製造と輸送を急がせる。出来る分で良い。急いで移送するのだ。」

「皆には覚悟してもらいたい。この後、大砲の残弾を全て城に打ち込んで、城に突入する。」

「しかし、その前に城の状況を確認したい。ナナイ。再度城に行き降伏を促せ。降伏無き時は全軍で突入するとな。」

「了解しました。」

士官達が連絡、調整に動き出す。

「しかし、以外ですな。・将軍が一番リスクの高い、城の力攻めを選択するとは・・・」

「他にも手はあるうが、この状況を逃すとさらに被害が広がる。」

「たしかに・・・」

砲撃開始はナナイの降伏勧告が終了してからだ。

天幕をでて、入口に立てかけたハルベルトを掴む。誰かがハルベルトをあらってくれたようだ。血に濡れた金属が綺麗に磨かれている。

城に向かい1騎が白旗を掲げて駆けて行く。

ナナイだろう。

そして、ナナイが城まであと200m程に近づいた時、ザイネン城の北門が開いた。

北門から、騎馬が1騎白旗を掲げてナナイに近づく。

何かをナナイに告げ、ナナイが頷くと、北門から来た騎士がしろ

に向って白旗を振る。

それを合図に北門から、兵士が続々と出てきた。

兵士達は武装を解いている。

我らに、投降したのだ。ザイン城は我が軍門に下ったのだ。

ウワアアーーーー！！

全軍から喚声上がる。

最強の城砦と言われたザイン城を落としたのだ。

アルクテューの騎馬隊がナナイから監視の任を引き継ぐ。ナナイは此方に向け騎馬を走らせた。

「ただいま戻りました。ザイン城守備隊は、無条件で投降することのこと。私は投降を許しました。」

「それで良い。ところで、城には何名残っていたのだ。」

「当初の守備隊兵力は2千とのこと。投降者は約500です。」

「やはり、砲撃か・・・」

「リゲル。シャープネス男爵に連絡。ザイン城の調査と駐留をお願いします。」

しばらくすると、シャープネス軍が部隊を集結させ、静かに城に入っていた。

（どうやら、城を落とせたな・・・）

（しかし、これでは勝ったとは言えん・・・）

（全てに勝利することは無理だ。これを反省して次に備えるのだ。）

（次の戦いに時間がかかる。・・・敵も同じことだがな。）

（良いこともある。ザイン城の東と西。その領地を持った貴族はもはや反乱軍として役立たん。保身にかかるはずだ。交渉に注意しろ。）

（ああ・・・）

サリアは救護所で負傷者の手当てをおこなっているはずだが、私の思考は常に読み取っているようだ。

懷柔策

ザイネン城はキャノン砲の砲撃で著しく破損していた。
無理も無い。

12門のキャノン砲の斉射を何度も受けたのだ。
尖塔は無く、楼門も著しく破損している。

何とか形を保っている部屋を探し出し、作戦本部とする。

中央のテーブルに地図を乗せ、リオの部隊が知らせてくる現状の
敵配置を駒で示す。

そして、我が軍の駐屯地にそれぞれの駒を置く。

このザイネン城と王都の間にアクナウ市がある。王都の商業が発
展するにしたいが、王都での土地不足を補う形で作られた商業都市
だ。王都へ入るための通行税を払う必要がないため、多くの商人は
この商都で商売を行う。王都に残った商人は貴族相手の御用商人だ。
敵は、アクナウ市の前に展開しており、ザイネン城に対して鶴翼
の陣をとっている。

アクナウ市からの報告では、敵軍は2万程度だということだ。
それでも、我が軍と比較すれば2倍以上の大軍である。

敵襲に備え、我らはザイネン城を頂点とする魚鱗の陣で、防御体
制を整えているが、弾丸残量はいささか心もとないのが実情である。

（何を悩む）

何時の間にかサリアが部屋に入ったようだ。

（全てだ。攻撃を続ければ守る場所が増える。勝利しているとは
言え、貴族の数は変らん。彼らの領内ではさらに圧制が進むだろう。
）

（敵を引き込め、今なら交渉に応じる貴族がいるだろう。）

（西のサーミストのことか？）

（そうだ。サーミスト軍はザイン城への援軍を派兵しているが、ほぼ殲滅している。いまのサーミスト子爵には軍が存在していない。）

（交渉で、憂いを無くすということか？）

（そうだ。かなり厳しい条件でも、今の彼には飲む以外の方法が無い。）

（問題は、誰を行かせるかだ。）

（ヨアヒムを使え。アヤツを飼い殺しにするのは忍びない。これを手柄とし、側近に加えるのだ。）

「ミゲル。ヨアヒムの様態はどうだ？」

「ヨアヒム殿ならテレジア様の魔法でほぼ全快しています。今は、城の片付けを部下と供におこなっておりますが。」

「直ぐに呼べ。」

ミゲルは部屋を出て行き、ヨアヒムと供に帰ってきた。

「敗軍の将を呼ぶと言う事は、私の処分が決まったのか。」

「決めた。」

私の言葉に、ミゲルの顔が緊張する。

「西に行き、サーミスト子爵に投降を促すのが、お前の役目だ。」

「条件は？」

「前面降伏。身分は平民とする。領地は没収。ただし館の財宝の十分の一を保障する。降伏無き場合は一族郎党ともに滅ぶべし。三日の内に領内への侵略を開始する。」

「同行者は？」

「お前1人だ。」

「………解った。行こう。」

ミゲルに指示して、馬を用意させる。
ヨアヒムは一騎で西に駆けて行った。

「上手く運ぶでしょうか？」

「どちらでも良い。上手く運べば使える士官が増える。だめならば、滅ぼすまでだ。」

小さくなって行く彼の姿を見送り、作戦本部に戻るとヘイムが来ていた。

「実は相談したいことがありまして・・・」

彼の相談は、機動ライフル兵の武装についてであった。それは、移動しながら発射できる小型ロケット砲の提案である。

機動砲は操作、移動共に容易であるが、停止して行うのが最大の弱点である。ロケット砲なら台車への負担がないので馬車で走りながら撃てるのでは、ということだ。

射程は1km程度で十分。弾種は炸裂弾だけでよいとのことである。

アイデアとしては面白いものがあるので、試作を約束した。出来るのは少し先になるであろうが。

「ミゲル。一度ジュリーに城へ来てもらって欲しいのだが。」

「工房へ出す図面ですか？至急ミールに連絡を取ってみます。」

「次に攻撃を開始するまで少し時間がある。各指揮官、仕官に今回の反省を踏まえ、装備の改良等があれば対応したい。その旨、伝えて欲しい。」

解りましたとリゲルは作戦本部を出て行った。

ヘイムの案も良いが、実戦での評価はこれからだ。今後の戦闘において最大の脅威となるのが、多重魔法攻撃となる。

射程がライフル並みだとすれば、3段構えの防戦を容易に粉碎で

きる。さらに戦闘後に解ったことだが、魔道師への被弾を防ぐため、
ぶ厚い木材を被せた荷馬車を使用したようだ。

遠距離攻撃を防御する点では我らの移動砦と同様の視点に立った
ものと言えよう。

戦闘時の移動運用は装甲車に近いものがあり、我らの移動砦の先
を行っている。機動砲で潰すしかなかったはずだ。

その反省も踏まえた提案がヘイムによる移動ロケット砲だが、ロ
ケットで装甲車を狙うのは、いささか無理がある。

ふと、2つの案が浮かぶ。

1つは、戦車だ。機動砲を小型化して馬車に積み込み、人力で移
動する。装甲は木材と防御魔法で対応する。速度は歩くより遅いが、
移動しながら砲撃できるし、ロケットより遥かに命中率が高い。

もう一つは、携帯型のロケット砲だ。使い捨てで使用できる小型
のロケットをライフル機動部隊に装備させ、必要時に発射する。ロ
ケットは反動が無いことから極めて有効だろう。

傍らの紙にペンを走らせ、おおその形と概略寸法をメモしてお
く。

2日程経って、ザイン城にジュリーと工房のドワーフ達があつ
て来た。

早速、以前のメモを渡すと概要を説明する。

「基本は出来ておるから1週間程待て。使い捨てを何本かと移動
式を1台作ってみる。細かい所はそれで修正したらどうじゃ。」

私が同意すると、彼らは部屋を出て行く。

ジュリーが去り際に、手紙を取出した。

「妹のスレイからの預かり物です。伝言では伝わらないかもしれ
ないと手紙にしたようですね。」

「確かに預かった。連絡は後ほど。と伝えて欲しい。」

解りましたと挨拶を残し部屋を去って行った。

その夜、サーミスト子爵の説得に向かった、ヨアヒムが帰ってきた。

作戦本部にわが軍の首脳を集め、ヨアヒムの結果を確認する。

「説得は、成功です。サーミスト領は再び帝国領となりました。しかし、子爵の位に固着しておりましたので、軍の侵攻を匂わせたところ、あつさりと恭順した次第です。」

「財産没収も承知したのか？」

「承知しました。命と天秤にかければ、それでも多いのかも知れません。本来であれば、反乱貴族は財産没収の上、国外追放ですから今回の措置は温情ある措置と言えるでしょう。」

「エルザに連絡して、財産の没収と目録造りをさせる。ヨヒアムには再度同行して貰おう。兵100名をヘイムから借り受けて準備しておけ。」

「了解しました。」

部屋を出るヨヒアムにヘイム続いて出て行く。たぶん貸与する兵の相談だろう。

「そう言えば兄上。今回の戦は貴族対民衆であると前に仰っておりましたが、我らの扱いはどのようになるのでしょうか？」

「とりあえず明確なのは、貴族から平民になることだな。しかし、帝国の運営には積極的に関与することになる。そして、それを後進の民に教授することが我々の仕事になる。」

「所領はどうなるのでしょうか？」

「所領は全て帝国に返還する。但し、財産没収には至らないから土地を買うことは可能だ。」

「すると、収入が無くなりますが・・・」

「その段階になった時は帝国が仕事に応じた報酬を支払おう。軍についても全て帝国が持つことになる。」

「私も古い貴族ではないので、貴族を辞めることには応じますが、応じない場合はどうなりますか？」

「サーミストと同じことになる。・・・しかし、今回の反乱首謀者は全て財産没収の上国外追放だ。」

途中からシャープネス男爵に代わり、私が説明を行う。

「貴族階級の穏やかな終焉を目指したいが、この戦を見るとそうもいかぬようだ。この戦の続く限り現状の立場でいてもらいたい。」

「姫の願いは民の平等だ。姫から見れば、貴族も民も一緒になる。私は、能力の有る者が報われる構造に帝国を変えるつもりでいる。」

「全ての国民が均等にその機会を与えられる。そんな国には停滞は無い。発展あるのみだと私は考える。」

「確かにすばらしいですな。しかし直ぐには・・・」

「そのために両男爵がいるではないか。所領経営に長けた人材は貴重な存在だ。」

「利用できる限り利用されるおつもりですか？」

「その通り！」

「確かに遣り甲斐はありそうですね。しかも我々をこき使うと・・・面白い、実に面白い。兄上、仲間に誘っていただき感謝しますぞ！」

「出来れば、これと思う貴族がおれば懐柔して頂きたい。所領は没収するが財産は十分の一。これが条件となりますが・・・」

「能力のある貴族の懐柔ですね。それも、面白そうですね。解りました。動いてみましょう。」

我々は、戦による反乱貴族の殲滅と戦によらない反乱貴族の造反

の2つ方策をとることとした。

教育と戦車

アクナウ市の前に展開した反乱軍と対峙して1週間が過ぎようとしている。

崩れかけたザイン城の城壁から望むトルタナ山脈の頂上付近は白く雪を頂いている。

もう直ぐ、冬だ。焚き火で暖を取る兵士の数も増えてきている。

ミゲルの話では、帝国領は南の港付近を除き、冬には雪に包まれると言う。

作戦本部に戻り、スレイ嬢の手紙を読む。

学園の基本構想が書かれていた。

教育理念は【考える力】

初等教育は、5歳から10歳までとし、語学と数学それに体育を学ぶ。

中等教育は、11歳から15歳までとし、初等教育の学科に科学と魔法学が加わる。

教育のスタートラインとしては問題ないだろう。

エルザと相談して初等教育については、帝国の義務として無償化も視野に入りたいと思う。

教育の平等化を考慮して、奨学金制度も作る必要があるかもしれない。

さらには、官僚機構に組み入れるための高等教育も必要だろう。

未来を担う者達をどのように育てるかを考えることは、このような体となっても楽しくなる。

そのような事柄を考えながらスレイ嬢への返信をしたためる。

そこに、サリアがテレジアを伴ってやってきた。

（少し、話がある。良いか？）

（サリアからの話とは珍しいな。）

（我の話は、救護所のことだ。今回は予想を上回る死傷者が出た。それはいい、戦の常だ。我が望むのは、応急的な救護所ではなく、救護を専門にした部隊の創設だ。場合によっては廃兵院を作る必要も視野にあるのだが・・・）

（確かに戦闘後の手当てでは、生死を分ける場合には問題だな。しかし、治療魔術に長けた人材がどれだけいるか・・・）

（我らの陣には5人の治療術師がいる。我と水の神殿から借り受けた2名の神官、それにエリーヌ、テレジアだ。）

（我らの元に戦闘中に負傷者を運ぶ者達が欲しい。もちろん、その者達にも現場での簡単な手当ての指導は行う必要があるが・・・）

サリアは衛生兵を欲しがっているようだ。確かに弾丸等による銃創よりは剣等による裂傷が多いのだろう。治療が早ければ失血死を未然に防ぐ事が可能だ。

衛生兵なら武装は要らない。しかし、現場で止血する等の簡易な医療装備は必要だろう。

（サリア。では衛生兵を作ることにする。衛生兵は戦闘に参加しない。負傷者の応急手当てと医療機関への搬送が任務だ。担架搬送を考慮して、4人1組で、10組用意する。それで良いか？）

（十分だ。何時までに準備出来る？）

（1週間程度見てくれ）

（了解した。）

衛生兵か？たぶん負傷者移動用の馬車も必要なはずだ。装備は大型の腰バックと救急用品、誰もがわかる表示も必要だ。・・・私の軍のそれで良いか・・・

サリアの手当て専用馬車も必要だ・・・野戦病院？そんなものだ

ろう・・・

さらさらとペンを走らす。

隊長は・・・たしか、前の戦で騎馬を率いていた男に、ケーニスという者がいた筈。彼なら命の重さも解ろうと思われる。

作戦本部の外で待機している士官を呼び出す。

「先の戦で投降したケーニスは今何処に？」

「輸送部隊の指揮を執っております。」

「ケーニスとケーニスの部隊より50名を連れて来い。それと、この手紙をミールの届けて欲しい。」

士官は手紙を持って湖の館に馬を飛ばす。

ミゲルがボタンと扉を開ける。

「どうした・・・敵が動いたか？」

「いえ。ドワーフ達が変な荷車を持ち込んで来まして・・・將軍の依頼だとか・・・」

「解った。ヘイムを広場に連れて来い。」

「了解しました。」

私は席を立つと、城の広場に向った。

そこには、2台の板で覆われた荷車と幌を被った荷車があった。

荷車の周りを一周する。

4輪の荷車だ。荷台は低く作られている。荷台全体を分厚い板で覆っており、そのために車輪が見えているのは地上50cmほどである。

「中はどうなっている？」

私の質問に工房の弟子が慌てて荷車の中ほどに作られた扉を開ける。

低い荷台の前に機動砲が1門据えつけられている。普通の機動砲が2連装なのに対して、これは1門のみだ。しかも後退機構が付けられている。砲の台座には小さな車輪が着いており。荷台に付けら

れた溝の中を動くようになっていた。

荷台の後ろには砲手と装填手以外に2人ほど乗れそうだった。

この荷車は人力で動かす。そのため中で車を押す人間が4人程入る穴が開いている。

確かにこれは戦車と言えよう。しかし、この重量を4人で動かす事ができるのだろうか？

「どうじゃ・・・出来ただろう！」

「この重量をどうやって動かすんだ。これでは機動砲のほうが・・・」

「重量じゃと！・・・重力低減魔法で重量は半分以下になるわい。4人で十分じゃ。」

ドワーフが弟子達に命じ荷馬車を動かしてみせる。

まるで、軽々と荷馬車が動いている。

「どうじゃ。」

「砲は動かしながら発射できるのか？」

「やって見せよう。」

ドワーフの1人が荷馬車に乗り込む。そのまま馬車は城を出て行き、がたがたと荷馬車を走らせながら機動砲を発射した。

なるほど、自信ありげに言うだけのことはある。

戦車だ。量産できるか不明だが確かに役に立つ。

ドワーフが帰ってくる。

「十分だ。後は量産だが・・・10両ほど作れるか？」

「後、1週間待て。さっきのと、これを10両つつ造ってやる。」
そういつてドワーフが荷馬車の幌を取ると、そこには連装の小型ロケット砲が乗っていた。マリアの多連装と比べロケット自体もずっと小さい。機動砲程度の威力なのだろう。射程もあまりなさそうだった。

「射程は500m位じゃ。ロケットの炸薬も少ない。機動砲程度

じやる。それと、これが人が持つて撃つロケットじゃ。発射筒は木で出来とるから、撃つたらそれで終わりじゃがお。」

「どの位、ロケットを作ってきたんだ？」

「とりあえず、50本じゃが、これも1週間後には沢山出来るぞい。」

「ヘイム！…ヘイムはおるか！！」

「ここにおります。」

私がヘイムを呼ぶと、興味を持った兵士達の間からヘイムがやってくる。

「お前の意見に合わせて、私が作らせたものだ。装備はお前に任せる。1週間後に出来る装備を含めてな。」

「ありがとうございます。」

ヘイムは部下達と荷馬車を運んでいった。

リゲルが近づく。

「凄いと言うか…何と言うか…」

「何と言うか…だろうな…この世界で戦車戦をしようとは私も思わなかった。」

「お歴々が作戦本部でお待ちです。」

「解った。お前も来い。」

作戦本部に入ると見慣れない騎士がいる。

何時もの席に着くと、少し離れた席にいるアルクテュー男爵が口を開く。

「將軍。例の件ですが…この者は、私の叔父にあたるアトレイ男爵家の者です。アトレイ男爵は今回の反乱には加わらず、我らには敵対しておりません。我らの考え方に同調はしておりませんが、敵対はする意思がないというております。どのように遇しましょう

か？」

「敵対せず、傍観するのみ・・・それが、アトレイ男爵のお考えか？」

私は、騎士に問うた。

「さよう。我々はどちらにも組するつもりはございません。」

「では、これを機に独立すると・・・それも1つの道ではある。」

「いえ・・・そのような、我らはこの戦の後で改めて帝国に加わる
うと・・・」

「それは、どちらの帝国なのだろうな？・・・我らに加わらずば、
それも良い。しかし、我らの作る帝国には貴族は必要ない。改めて
加わることは不可能と知れ！！」

「貴族政治を否定なさるのか？」

「貴族等いらん。民がおれば良い。アトレイ男爵に伝える！・・・
貴族を捨て我らと共に歩むか、貴族の身分と共に我らに滅ぼされる
かを選択せよ。と・・・」

「失礼した・・・」

騎士は我らに礼をすると作戦本部を出て行った。

「アトレイ男爵は昔からアウトローであるな。」

「誰とも組しない・・・ということか？」

「そうだ。しかし日和見ではない。直ぐに結果が出るよ。」

「私は見たことがないのですが・・・」

姫が会話に加わる。

「宮殿は息が詰まる。我は草原で馬と共に・・・そんな男なので
すよ。」

「変った御仁ですね。」

「ところで、將軍確認したい事があります。」

シャープネス男爵が改まって聞いてきた。

「2度の戦によって得られた敵の財宝ですが・・・どのように措置

しましょうか？」

「全ては帝国のため、姫の判断でよろしかろう。」

「私は、將軍に使って頂きたいのです。將軍は常に全軍の為を思
って行動しております。今後とも資金は必要です。」

「では、使わせて頂きます。しかし、どの程度あるのですか？」

「旧皇帝金貨で1万枚程度になります。」

「全て頂けると・・・」

「はい。」

新皇帝金貨で約5千枚・・・教育の先行投資に使えるか。

「この資金の一部で帝国の未来を買おうと思います。」

「未来は買うことが出来るのですか？」

「できます。教育という形で・・・学校造ろうと思います。身分に
関わらず誰もが平等に学ぶ事が出来る学校です。」

この時以降我々は、作戦本部で戦が終わった後の政治、経済につ
いて少しづつ話あうようになった。

アクナウの戦い（1）

反乱軍と対峙すること2週間。

小競り合いはあるが、前面衝突には至っていない。

陣形も変えず、対峙する距離も変えず・・・2つの軍は互いを牽制している。

冬が近い、今年の反乱軍への攻勢は次の戦が最後になるだろう。

そして、雪解けの攻勢を有利に運ぶためにはザイン城攻略のようによくの死傷者を出すわけにはいかない。

昨日の補給で、我々は、ほぼザイン城攻略前の状態まで装備を整えている。

後は、私が号令を発するだけだ。

作戦本部には、指揮官、士官が集まっている。

作戦の最終確認を行うためだ。

ミゲルがミールより送られたリオ部隊の情報を元に敵軍の配置を修正する。

続いて自軍の配置を確認して、私に頷いた。

「冬を前に攻勢に出る。敵はアクナウ市の前方に展開している。

指揮官はカルナス。反乱貴族の中では中位であり、所領は帝都の南西部だ。我々に鶴翼で対峙することから、兵の運用はなれているだろう。」

「カルナス將軍は帝国の第2軍団の司令官です。」

「なるほど・・・では、目前の2万は彼の軍団という訳だな。どうりで統制が取れているはずだ。」

姫の言葉に、同意した。

カルナス將軍に率いられた2万の帝国軍。今までの寄せ集めの軍団ではない事を此処で改めて周知する。

「更に、作戦を複雑化する要因がある。ミールから届いた商会の依頼だ。」

「アクナウ市に損害を与えないで欲しい・・・かなり難しい願いだが、これには訳がある。」

「帝都の民の食生活の殆どがアクナウ市により行われている。アクナウ市を破壊した場合、この冬に多大の餓死者を帝都は出すことになる。」

「我らが征服者であるなら、その選択もあるう。・・・しかし、我らは解放者であることを忘れる訳にはいかん。私の許可無くアクナウ市への攻撃を一切禁止する。良いな！」

「次に、今回の作戦だが、1つ気がかりな事態が生じた。」

私は作戦地図上の騎馬隊を指揮棒で示す。

「2日程前に進駐してきた騎馬隊だが、数が多い。約3千だ。アクナウ市の後方にいる。距離は市より約3kmほどで、我々の攻勢に対し容易に介入できる位置にいる。」

「古来より、鶴翼陣には車掛かりの戦法で対処することが多いが、それは機動力のある騎馬隊が多い場合だ。我々の軍の攻勢は歩兵が主力であることから、この方法は取る事が出来ない。」

「よって、魚鱗の陣をもって敵に当たる。」

「陣の戦闘は、ヘイムの部隊。右にシャープネス、左にアルクテュー。その後段にアレスとトロアの部隊を置く。騎馬隊は全てナナイの親衛隊に預ける。ナナイの部隊は遊軍として左後方に置く。」

「セリーヌとマリアの部隊は最後尾。そして私の位置はここ、セリーヌの前だ。」

「陣形の変更は今夜行う。ザイン城前方500mにセリーヌの

キャノン砲を設置する。この護衛はヘイムが担当しろ。その後で、前方に展開するのだ。」

「攻撃は早朝。敵正面へのキャノン砲攻撃をもって開始する。キャノン砲に続いて機動砲は敵側面への攻撃を1斉射した後で前進せよ。」

「今回は、ザイン攻略の際に現れた敵の装甲車への備えは出来ている。さらに、敵が密集すればマリアの軍で叩ける。しかし、敵は帝国の正規軍である、強敵だ。決しておこる事は許されん。」

「そして今回新たな部隊を創設した。救護隊だ。ケーニス。ちょっと立ってみろ。」

ケーニスは立ち上がると少し後ろに移動する。皆によく見えるようにだ。

「彼の装備を見る！ 彼らの部隊は武器を持たない。腰のバックは包帯等の医療品だ。そして、戦場で目立つように印を付けている。」

ケーニスは腕の腕章と体の前後の目印、そして帽子の目印を指で示す。

「赤の十字だ。戦場では目立つだろう。しかし、これを見た負傷者は安心するはずだ。直ぐに駆けつけ、応急措置を施し、後方の治療施設・野戦病院とでも言おうか・に運んでくれる。そこには、姫、サリア等の治療に秀でた術者がいる。助かるのだ！」

「彼の任務は敵、味方を問わずに行う。・良いか。戦場で負傷したら大声で叫べ。【衛生兵！】と、さすれば彼の部下が駆けつける。」

私の説明が終わったことを知り、ケーニスは再び席に戻った。

「しかし、戦場で戦闘の最中に負傷者を助けられるのでしょうか？」

アルクテュー男爵が疑問を呈する。

「昔、私の所属する部隊には小隊毎に専門の部隊がいた。彼の服に付けた印はその隊員を区別するものなのだ。そして、その隊員の働きは有効だった。私は瀕死の重傷を何度も受けたが、今此处にいる。」

「他に、今回の攻勢に対して意見は無いか？」

私は地図の乗ったテーブルの周りに座る指揮官を見渡す。

誰も、意見は無いようだ・

「では、解散！・・今夜に備える！！」

指揮官達が退席し、ナナイとマリアが残った。

あらかじめ残るようにリゲルに命じていたのだ。

「我らに別の作戦ですか？」

「そうだ。今夜の陣形変更時に敵の夜襲が重なると不味い。陽動をして貰う。」

「マリア。敵の陣形と距離方角は計測しているな？」

「もちろんです。1週間以上にわたって入念に計測してあります。」

「では、今夜半前より、単発で敵陣に向け発射しろ。1斉射分使用してかまわぬ。但し、明け方までには、再装填を完了しておけ。」

「そして、ナナイよ。騎馬隊を2陣に分け、両翼を車掛りで攻撃せよ。2度行えば良いだろう。その後ライフルのバレル掃除を確実にしろ。」

「それでは、夜襲と変わらないですが・・・」

「敵に夜襲を取ったと思わせれば良い。マリアも敵を壊滅させる等と思うなよ。適当にロケットを分散して発射しろ。相手の夜襲を誘わない程度にな。」

「もし本格的な野戦に発展した場合はどうなりますか？」

「それには至らぬ。夜襲は敵の陣形がわからねば壊滅する危険性が高い。昼には居なかった部隊からの攻撃で敵は陣形を変えたと思

うはずだ。」

「解りました。しかし、作戦始める時間が微妙ですな。」

「信号弾で合図する。それで、攻撃を開始せよ。」

「解りました。」

2人は作戦本部を後にする。

後に残ったのはミゲルだ。

「今年最後の攻勢になります。冬はどのように対処なさるおつもりですか？」

「シャープネスで体制を整える。そして、雪解けを待つて攻勢だ。」

「私が言っているのは、その雪の間です。反乱軍も体制を立て直すとするでしょう。」

「その間は、アルクテュー男爵とヨアヒムの独壇場となる。戦のない戦が行われるのだ。」

「ところで、シャープネスへの帰還時に兵士の報酬を支払うことが出来るようにミールに連絡しておけ。金の無い年越しはつまらないだろう。」

「解りました。手配します。・・・戦死したものにはどのように？」

「家族に2倍与えよ。そして、毎月銀貨1枚を与えることを明確に伝えるのだ。」

「ずっと、続けるのですか？」

「親、妻が死ぬまで、子がいれば子が18歳になるまでとする。」
「解りました。ミールに伝えます。」

彼が部屋を出ると、作戦本部には私1人になった。

両軍の配置を今一度確認する。

やはり、後ろの騎馬隊が気になる。

明日の攻勢は敵騎馬隊の動きとそれに対する我が軍の対応で勝敗が分かれることになりかねん。

奇策を用いず、正攻法で変化する。再度作戦の方針を自分に言い聞かせた。

夕刻になり、陣のあちこちで松明が焚かれる。

寒さ対策と夕餉の仕度のための焚き火も混ざっており、その光りでおおよその陣形がわかる。敵陣も同じようだ。

城壁を歩くと観測兵が望遠鏡で敵陣を監視している。

「どうだ。変化はないか？」

「！・・・これは、將軍殿。今の所変化無しです。今夜は此处に詰めますので、砲撃が始まるのが楽しみです。」

「そうか・・・。しかし、寒さが応えるだろう。厚着をして交替の頻度をあげる。解ったな？」

「了解しました。」

私は、城壁を後にして、作戦本部に戻った。

作戦開始まで、あと数時間・・・騎馬隊の始末を考えるには十分だ。

夜、ザイン城の崩れかけた城壁に上り、両陣営の布陣を再度確認する。

両陣営ともに澄み切った星空の元で、静かに対峙している。だいぶ、松明もまばらになった。

私は脇で望遠鏡で敵陣を見ているミゲルに命じた。

「信号弾・・・発射！！」

ミゲルは、銃を持つ手を高く上げて信号弾を発射した。

バン！・・・ドォーン！！
信号弾が夜空に花を咲かせる。

アクナウの戦い (2)

アクナウの星空に信号弾が炸裂する。

それを合図に大地より一条の流星が流れる。

しばしの静寂の後、敵陣に火柱が上がり、続いて低い炸裂音と台地の振動が伝わってきた。

上がった火柱に敵陣の慌しい動きが見て取れる。

そんな中に、また流星が空を駆けて行く。

私は、ザイネンの城壁から進行を見守る。

「あと、3つロケットが発射された後に移動を開始する。」

「準備は完了との連絡は既に入っております。」

ミゲルは士官らと共に傍らで敵陣を望遠鏡により監視している。

「移動開始！」

私の指示を士官がセリーヌの砲兵部隊に連絡する。

キャノン砲の運搬準備が終了しているとはいえ、12門の運搬そして据付までを敵に気取られないことが大事となる。

「ヘイムの部隊を前進させる。最初の予定地までだ。」

「了解しました」

今回の攻撃陣形の突先となるヘイム部隊は、最終位置では敵との距離が2kmを切る。

先ず、最初の予定位置まで移動し、セリーヌ部隊がキャノン砲を据えつけるまでの防御を担当する。

南門からヘイムの部隊が前進する。

戦車10台を先頭に移動式ロケット砲、機動ライフル部隊が進んでいく。

ガラガラと車輪の音が異様に大きく聞こえるのは静寂の中だから

か、それとも音を意識しすぎるせいか・

また、1条の流星が空に流れる。
陽動と見抜くか・・・それとも反撃するか・・・敵の司令官も思案の最中だろう。

突然、敵陣に光球が数十個発生し敵陣を照らし出す。

（夜襲有りと判断したようだな）

いつのまにかサリアが私の後ろに来ていたようだ。

（魔法か？）

（夜襲に備えて自軍の周囲を照らし出しているのだ。今のところ作戦通りと言える。）

（前の夜襲の際にサリア達が使用した魔法だな。すると敵側に多数の魔道師がいるということか？）

（そうだ。目の前の敵は仮にも帝国第2軍団なのだ。魔道師は部隊規模で存在している。約200と言う所だろう。）

（では、装甲車が出てくるな。）

（ああ・・・間違いなく、しかも前より多く・・・）

下を見るとヘイムの機動砲部隊が門を出て行くところであった。
ヘイムの最後の部隊だ。

闇の中をゴリゴリ・・・と、重量物を乗せた馬車が進むとが微かに聞こえる。

セリーヌの部隊がザイン城を迂回して進む音だ。

敵陣を照らす明かりでロケットの弾着が良く見える。

着弾誤差が大きいことから敵陣を外れるものもあるが、3発に1発は敵兵を巻き込んでいる。

「やはり、ロケットは単発で使用するものではないですね。」

「あのような構造ではな。今のところでは、多数のロケットを同時に使い面で捕らえるのが正しいと思う。」

「將軍。セリーヌ様からです。【予定地点に到着。キャノン砲の設置を始める】とのことです。」

「ヘイム殿は【セリーヌ様の前方に部隊を展開。セリーヌ様の合図をもって、前進する】とのことです。」

連絡を受けた士官が私に告げる。

「了解した。ヘイムの前進にあわせて、残りの部隊を展開する。その陽動はナナイの部隊だ。ナナイの準備を確認しておけ！」

ミゲルが士官に指示して確認を取る。

（どうもロケットは命中率が悪い・・・同士撃ちの可能性はないか？）

（ナナイの両翼攻撃時は中央攻撃に切替えるようマリアに言っている。心配無い！）

突然、右手前方に光球が出現する。

バン・バン・・・とライフル銃の発射音が木霊する。

（敵の偵察部隊だろう・・・しかし、ロケット攻撃が陽動であることが敵に知れたぞ！）

（いや・・・まだだ。）

「マリアに連絡。敵陣の中央左右にロケットの目標変更。発射間隔は今まで通り。但し2発を同時発射。」

「ナナイに連絡。攻撃せよ！」

ミゲルは直ちに士官に指示する。

（部隊はいない。の報告の後で夜襲を掛けられると敵の司令部は混乱するな・・・）

（しかし、夜襲の呼び水に成りかねないぞ！）

（此方が攻撃している間は夜襲はない。しかも、攻撃が車掛りだ。何処から来るか判らんし、何処に帰るかも判らんはずだ。）

「ナナイ殿が突入しました。」

ミゲルが望遠鏡を離さずに報告する。

鶴翼陣の両端にナナイの騎馬隊が攻撃しているのが見て取れる。攻撃武器はライフル銃。但し、片手で打てるように全体を短くしており、火薬も少ない。有効射程は150m程度だろうが敵に接触しないで攻撃できる手段は我々に有利だ。

敵陣から火炎弾が発射される。魔法攻撃だ。

しかし、風の魔法と合体された多重魔法でなければ飛距離が足りない。しかも、多重魔法では動きの早い騎馬隊に対処することは出来ない。

ナナイ達は一方的な攻撃を終了して引き揚げていく。

「セリーヌ様から連絡です。【キャノン砲設置終了。機動砲は左右に展開済み】」

「全軍、展開せよ！」

ミゲルは士官達を総動員して、各部隊へ連絡する。

ザイン城の3つの門から部隊が続々と出発していく。右の門はシャープネス、左の門はアルクテュー。南門はにアレスとトロアの部隊だ。

6千を越える軍勢であるが、荷車の音だけが響いてくる。

「ナナイ殿から連絡です。【突入する】です。」

前と同じ様にナナイの騎馬隊が両翼に突入する。敵の光球が数を増して両翼へ集中している。

「マリアに連絡。ロケットの残数を報告せよ！」

後、数時間で薄明が始まる。

「マリア様から連絡。【ロケット残り2両分24発。なお、4両のロケット装填終了】です。」

ギリギリで持ちそうだ。

門を見ると、部隊の最後尾も見えなくなった。これから、各部隊は暗闇の中で配置を行うことになる。

「ナナイ殿から連絡【2回目の襲撃終了】です。」

「了解した。ナナイに連絡。予定外の3回目を行う。しばし休め！」

部隊の展開まであと少し・・・

「ヘイム殿より連絡。【部隊前進終了】です。」

東に明けの明星が姿を現す。

「ナナイに連絡。突入せよ！」

「続いて、マリアに連絡。ロケット残弾全て打ち込め！そして装填急げ！」

星の消え初めた空に数条の流星が走る。

ボンヤリと周囲がモノトーンに見え始めた敵陣にナナイの騎馬隊が突入していく。

ミゲルが各部隊からの報告を告げる。

「シャープネス男爵より連絡。【部隊展開終了】です。」

「アルクテュー男爵より連絡。【部隊展開終了】です。」

「アレス殿とトロア殿の部隊。【部隊展開終了】です。」

「現在、マリア様の部隊は城の左側でロケットの装填中。ナナイ殿は城の右側で休息中です。」

「了解した。我々も出かけるぞ。サリア後は頼む。多分忙しくなるはずだ。」

（了解した。城は守備兵を含め200名程居る。姫のことは案ずるな。）

ミゲルと士官を伴い、城の城壁を降りる。

待機していた馬車に乗り込むと、セリーヌの陣に向う。

我々の馬車が到着するとセリーヌが駆けて来た。我々を待っていたようだ。

「全て準備終了です。目標を指示願います。」

「敵までの距離は？」

「敵正面まで、約3km。翼端まで約2.5kmです。」

「初弾と次弾は敵中央に全弾斉射。3弾目からは半数で敵の後方を叩け。乱戦になる。必ず後方を狙え！」

「了解しました。観測部隊と連係を密にします。」

「ミゲル。各部隊に最終確認。準備出来次第砲撃を開始する。」

「了解しました。」

ミゲルの指示を待つまでも無く士官達がそれぞれ各部隊と連絡を取り合う。

「準備完了とのことです。但し、ナナイ殿とマリア様の部隊はまだ準備が整っておりません。」

「ナナイ達の出番はまだだ。」

私は、そう言って、セリーヌに体を向けた。

彼女は私の一挙手を見逃すまいと私を凝視している。

「セリーヌ。初弾発射！」

「キャノン砲、全砲門一斉射撃用意……発射！」

セリーヌの号令で士官が紅い旗をふりあげる。

ドドドオオン！！！！

キャノン砲の砲撃がアクナウの薄明の中に木霊した。
やや間を置きズズズウンと言っ音と地鳴りが届く。

我が軍は、キャノン砲の砲撃を合図にゆっくりと前進を開始する。

「次弾装填開始！」

セリーヌの順序だった命令が響く。

12門の砲長が蒼の旗を次々と掲げる。

馬車の上に作られた簡易な物見台で士官が数を数える。

「全門装填終了！」

「発射！」

「ヘイム部隊と敵の距離、約1200。敵陣形変化しました。装甲車を先頭にした三重の鶴翼陣です。」

ミゲルが報告してきた。

砲撃の集中を避けるために部隊間の距離を離れたものだろう。

バコン！・・・バコン！・・・バコン！・・・

機動砲の発射音が聞こえる。

この距離での攻撃は我々の利点だ。装甲車を1台でも破壊するにこしたことはない。

「ヘイム殿より連絡です。【敵の装甲車は100台以上】です。」

「距離は？」

「ヘイム部隊と敵の距離、約1000。」

機動砲で後2撃は可能だ。

アクナウの戦い (3)

薄明が終わり朝靄が戦場を包む。

機動砲の甲高い発射音が木霊する中、両軍がジリジリと陣の衝角の距離を縮める。

敵味方の探索騎馬が陣の周囲を駆けながら互いを牽制する。

靄が濃くなってきた。最早、霧と言っても差し支えないほどだ。

ミゲルが首を傾げている。

「どうした。」

「いえ・・・特に作戦に問題はありませんが・・・この季節に霧が出るのは・・・」

「敵の魔法と言うわけだな？」

「はい。その可能性が高いと思います。」

「ミゲル。ザイン城に連絡。至急、霧の発生源若しくは濃い部分を調査せよ。」

「次に、ミール経由でアクナウ市の南方に展開している騎馬隊の状況を確認しておけ。」

霧に紛れて側面を突かれるのが、この時点での最悪ケースだ。

騎馬で霧の中を移動するのは極めて困難と考えるが、出来たならば戦況が一変する。

「ザイン城から連絡。【霧の発生源は不明なるも、両翼部が比較的濃い模様。尚、戦場以外での霧は極めて薄い】です。」

「やはり、敵の魔法と見てよいだろう。・・・セリーヌに連絡。敵の両翼に2斉射。」

直ぐに、両翼への砲撃が始まる。

少し霧が薄くなったようだが、見通し距離は500mを切るだろう。

「ヘイム部隊と敵の距離、約300。ヘイム部隊停止しました。」
機動砲の砲撃が一段と激しくなる。

時折、ライフル銃の一斉射撃が聞こえる。

霧の中に赤い光がボンヤリと光るのは、多重魔法による火炎弾か。

「ミールから連絡です。【アクナウ南方に展開していた騎馬隊は移動している。移動先は不明】です。」

「全ての偵察部隊、観測部隊に連絡。敵騎馬隊の移動箇所を確認せよ。念のためにザイン城にも連絡。」

ミゲル指揮下の士官達が慌しく連絡をとる。

「続いて、各部隊の指揮官に連絡。敵騎馬隊が行方不明。側面攻撃の可能性大。機動砲の半分を応戦準備に備えよ。」

「敵の狙いは、騎馬隊攻撃に備えるため、こちらが常時使用する機動砲を削減するためでしょうか？」

「それもある。しかも、騎馬数が多ければ側面攻撃は極めて有効だ。」

「総数3千。一斉に突入された場合は、機動砲では対処しきれん。早急に発見し、ロケットで殲滅したい。」

「セリーヌ様の部隊に歩兵はいません。周辺に柵もありません。」

「急ぎ、杭を打ちロープを張れ。樽でも、木箱でも、馬車でもかまわん。側面にばら撒け！」

（だいぶ焦っておるな。）

（サリアか・・・今何処に？）

（もう直ぐ、そちらに着く。今、ケーニスの部隊が応急の柵を回りに作っている。シャープネスに応援を要請しておけ。）

「ミゲル。シャープネス部隊に連絡。敵の騎馬攻撃が予想される。応援を求む。」

「了解しました。」

「我々も、セリーヌの応援に行くぞ。各自の護身銃にカートリッジを装填しろ。」

セリーヌは馬車に作った観測台の下にテーブルを広げて指揮を取っていた。

キャノン砲の砲撃は継続している。

「現在の状況は？」

「敵の両翼後ろに砲撃を継続しております。機動砲は、左右に6門を展開。全ての兵に砲兵銃を持たせております。」

「場合によっては、敵騎馬兵が3千で突入してくる。マリアの部隊の現状位置は？」

「後方2kmで、城の影になります。騎馬隊を見かけたら城に入ると言っておりますが・・・」

「なら、問題なかるう。城の監視所からは、まだ敵騎馬隊は確認されていない。」

（どうだ。まだ、見つからぬか？）

サリアが姫達と共に臨時の司令部にやってきた。

「まだ、見つからぬ。周辺の監視部隊が搜索している。」

（此方の、周辺部に臨時の柵は拵えた。しかし数が多いのがいささか心配ではある。）

「リゲル。この両脇に馬車を置いて、姫達を隠せ。」

「承知しました。」

リゲルは士官達と弾薬運搬用の荷馬車を周辺に急いで移動する。これで、この中はかなり安全になる。

「作業終了しました。私達は戦場にまいります。」

「サリア様が【ご苦労】とのことです。」

テレジアがサリアの通訳をする。

その言葉を聞きケーニスは衛生兵の部隊を引き連れ戦場に行った。

臨時の本部に、壮年の騎士が現れた。

「カシムと申します。歩兵200を連れて応援にまいりました。」

「ご苦労。砲兵隊の左右に分かれて部隊を配置願いたい。機動砲は12門あるが全て女性だ。守ってやってくれ。」

「かしこまりました。」

カシムは本部を退くと素早く部隊を2分し兵を配置していく。

「將軍。ヘイム部隊から連絡です。【敵、第1陣を撃破。敵第2陣も装甲車多数。】です。」

リゲルは持参した作戦駒を砲撃用の地図上に配置する。

「敵正面で100台以上か・おそらく200とすると、両翼の部隊もある程度装甲車を持っている可能性はあるな。」

「そのようです。両男爵より連絡。【敵装甲車により前進停止】です。」

「セリーヌ。精密射撃は可能か？」

「霧のため誤差が大きいです。敵の後段であれば味方を巻き込まずに砲撃が可能なので、継続しておりますが・・・」

（霧を晴らす事は可能か？）

（部分的であれば可能だ。しかし、それには我が直接出向く必要がある。）

（後段を砲撃しても、霧が晴れぬということは、中段に霧を発生

させている魔道師が居るに違いない。前線部隊の機動砲で叩くことは出来ないか？)

「リゲル。各部隊に連絡。機動砲により敵の中段を攻撃せよ。」

敵中段の攻撃を開始すると、霧が徐々に晴れ始める。

「將軍。敵中段への攻撃可能です。」

セリーヌが観測兵からの連絡を受けたようだ。

「両翼の中段へ攻撃を開始せよ。」

「將軍。敵騎馬隊の位置が判明しました。我々の右側面約2kです。現在早足移動中。来ます！」

「マリアに連絡。確認でき次第ロケット発射！」

「トロアに増援依頼。・・ナナイに連絡。ロケット弾着後に敵騎馬隊側面を突け！」

「セリーヌ。全ての砲にブドウ弾装填。来るぞ！覚悟しとけ。」

(やはり、側面を突いてきたか・・・)

(ああ、絶妙のタイミングだ。敵との衝突で増援をあまり期待できない。)

(左側面はどうする？)

(回り込みを考えると、兵を引き抜くのは無理だ。)

ドドドオオン！！！！

右側面にロケットが着弾した。爆炎が揚がり風が爆炎に向かう。バゴオン！！

キャノン砲がブドウ弾の水平射撃を開始した。

爆炎が霧を追い払い、突撃してくる敵騎馬隊の姿を現す。

キャノン砲が続けざまにブドウ弾を発射し、敵の騎馬をなぎ倒すが次々と騎馬が後ろから押し寄せる。

キャノン砲の部隊は砲の操作を止め、砲兵銃を手に持ち砲の影に隠れている。

機動砲が短い間隔で砲撃を開始する。

「馬を狙え！…奴らの機動力を奪うのだ！！」

カシムが大声で指示を飛ばす。

「来るぞ、銃撃の準備！」

私は、士官の差し出したハルベルトを掴むと馬車の側面に飛び出した。

バン！…バン！…

砲兵銃が連射される。一斉射撃ではなく各部隊毎に対処しているようだ。

一隊の騎馬隊が馬を撃たれ、その場に騎兵が転げ落ちる。槍を持ち立ち上がる騎兵を別の砲兵が銃で狙撃する。

砲兵隊に無数に引かれたロープで馬の足を取られ転倒する騎馬が続出する。

その中にカシムの部隊が銃剣を装備して飛び込んでいく。

阿鼻叫喚の世界…

馬を捨て、私に長剣を構えて走りこんでくる兵を一刀にしながら、状況を見る。

ナナイの騎馬隊が敵騎馬隊の横に迫り、騎兵銃を発射すると素早く後退していく。

ナナイの部隊を追った敵の騎馬隊は、マリアの部隊による銃撃で前進を阻まれる。

私の頭を越えて次々と火炎弾が敵騎馬隊を襲う。

サリアの攻撃だろう…

一旦襲撃を中断し、部隊の集結を図ろうとした所へロケットが着弾する。

生き延びた少数の騎馬は南に去っていった。

馬車を飛び越し、本部に帰るとミゲルに状況把握を命じる。
連絡士官を呼び、戦況の変化を確認する。

「ザイン城からの連絡では、騎馬隊は壊滅とのことです。また、ヘイム部隊は敵2陣を破り現在3陣と交戦中、これも時間の問題だといっております。」

「両男爵軍は現在第2陣と交戦中。霧はだいぶ薄れており、敵装甲車を機動砲にて各個撃破中とのことです。」

最大の危機が去った。

まだ、敵の装甲車は危険な存在だが、機動砲で対応可能だろう。

（そろそろ、我らの仕事を開始する。）

（ああ・・・手間をかけてすまん。）

（よい。これも楽しみの内だ。）

サリアはテレジア達を連れて後ろに下がる。

馬車の荷を解き、救護所を開くのだろう。

「キャノン砲で支援砲撃！観測部隊と連絡を取れ！」

セリーヌの声が聞こえる。無事だったようだ。

カシムが血まみれの姿で現れた。

「久しぶりの乱戦です。前は控えの部隊に居りましたので残念でしたが・・・」

「怪我は無いのか？」

「浅手ではありますが、殆ど返り血です。」

「すまんが、周囲の確認と負傷者の移動をお願いします。サリア達が手当てを行う。カシムも一度見てもらえ。」

「気遣いもうしわけありません。早速開始します。」

「ヘイム部隊、敵3陣を撃破しました。」

「アレスとトロアの軍を前進して左右に展開。両翼の敵を挟撃せよ！」

リゲルの報告に、素早く継ぎの指示を出す。

アクナウの戦いはもう直ぐ終わる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9861v/>

我が故郷は星の彼方

2011年10月9日22時27分発行